srchack.org

Tivoli. software

Tivoli Access Manager for Enterprise Single Sign-On v8.1

Unofficial Installation Guide

本資料について

- IBMのシングルサインオン製品「Tivoli Access Manager for Enterprise Single Sign-On v8.1」の導入手順を、srchack.orgにて独自に記載したものであり、記載内容での導入手順を保障するものではありません。
  srchack.orgは、利用者がこれらの情報を用いて行う一切の行為 について何ら責任を追うものではありません。

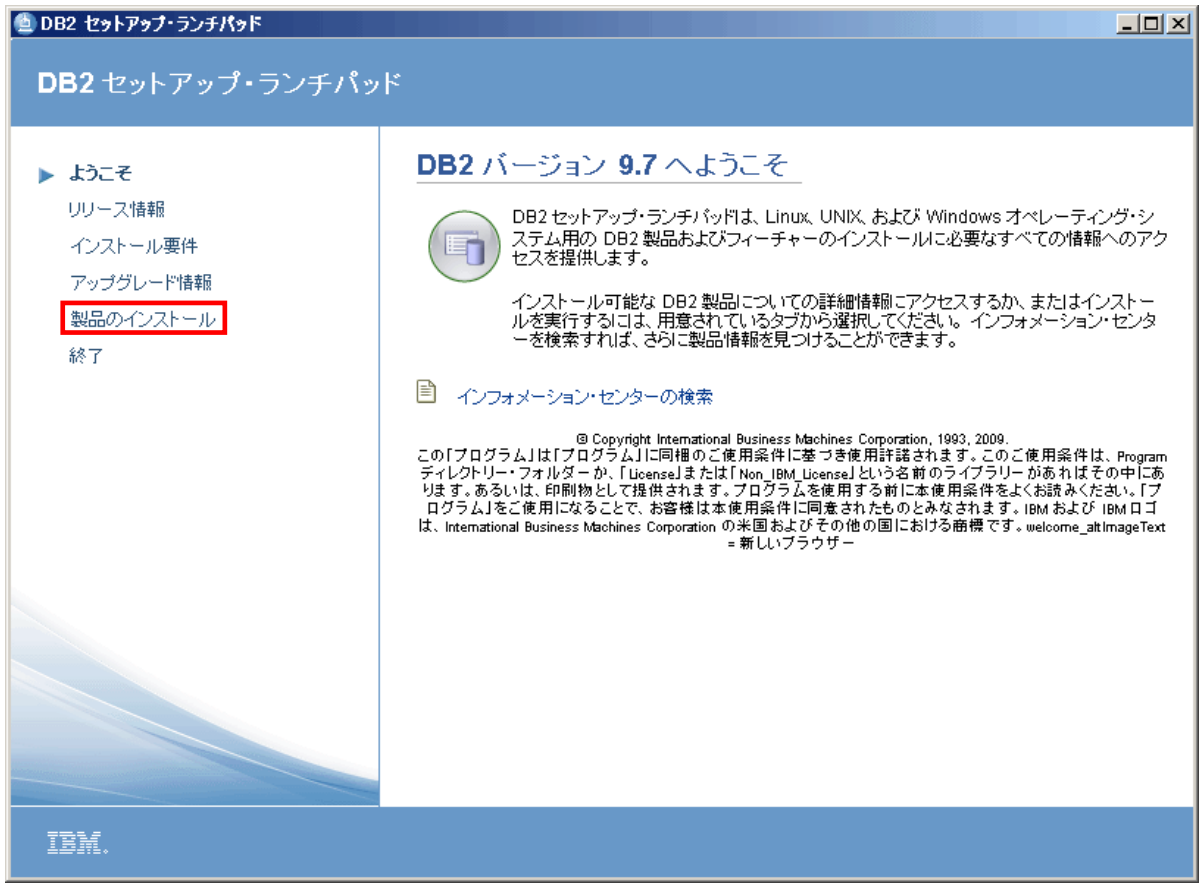
動作確認環境

- Windows Server 2003 Enterprise Edition
  - ServicePack2 (2009/11/30までのFix適用済)
- Tivoli Access Manager for Enterprise Single Sign-On v8.1
- WebSphere Application Server Network Deployment V7.0
  - FixPack7
- IBM HTTP Server V7.0
  - FixPack7
- IBM DB2 9.7 Workgroup Server Edition
  - FixPack1

- VMware Server 1.0.9
  - Athlon 64 3500+
  - 2GB Memory

DB2導入

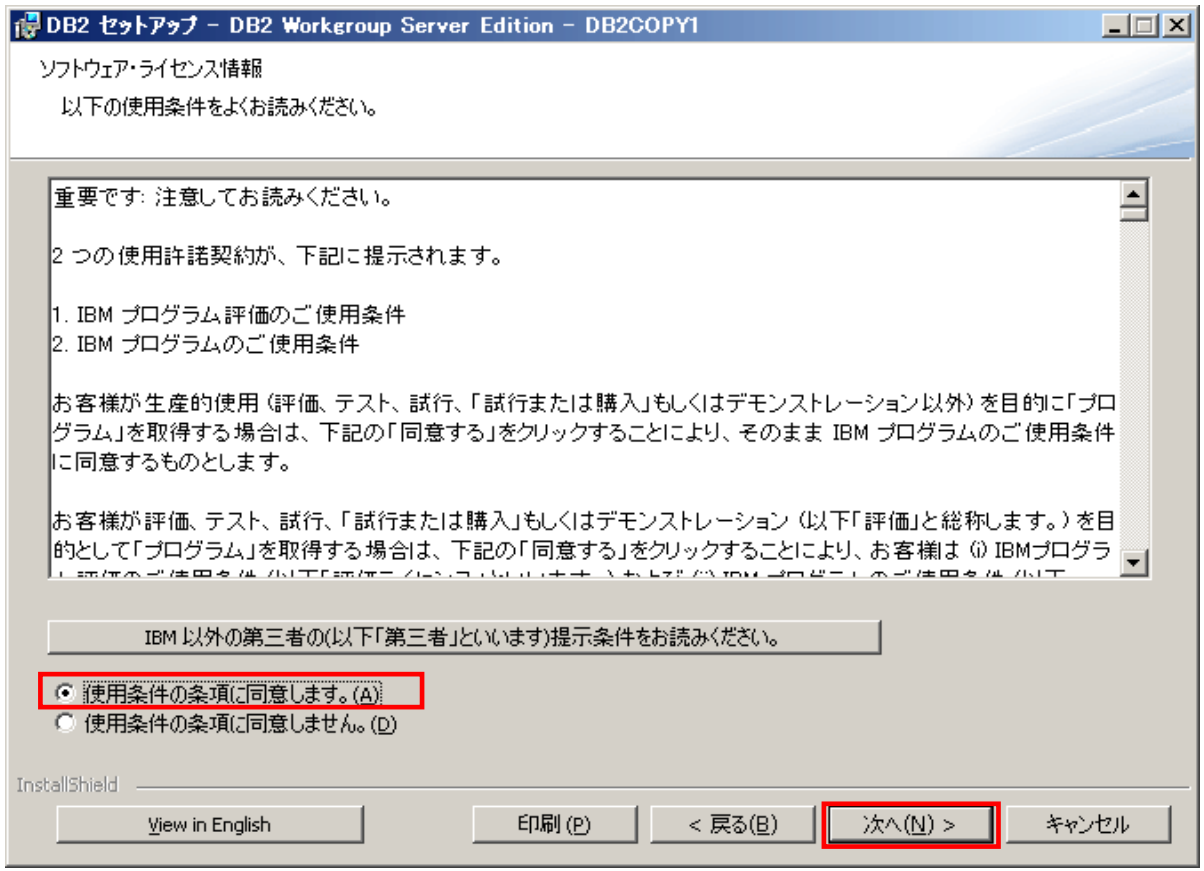
- DB2 9.7 FixPack1のインストールウィザードを起動します。



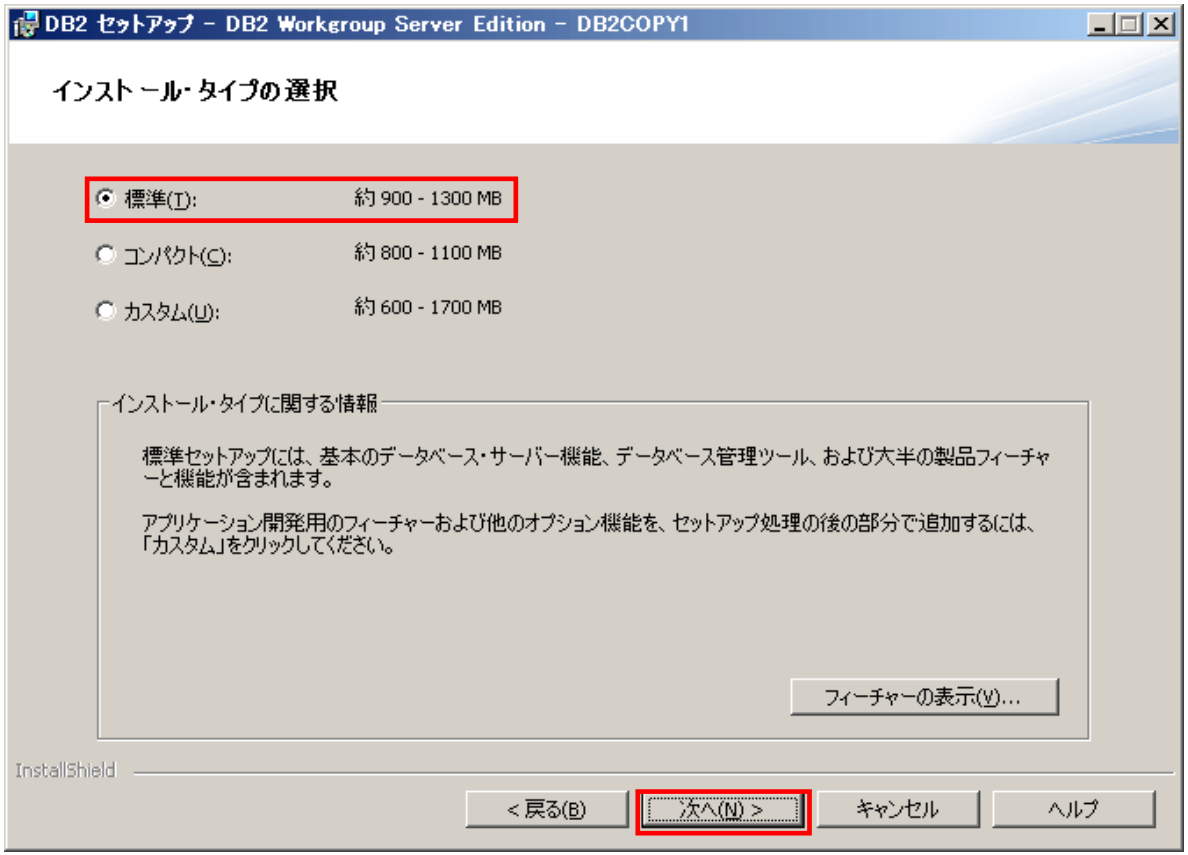
- 以下の画面が表示されます。「製品のインストール」をクリックしてください。Workgroup Server Editionを選択（同梱ライセンス）

- 以下の画面が表示されます。「次へ」をクリックします。

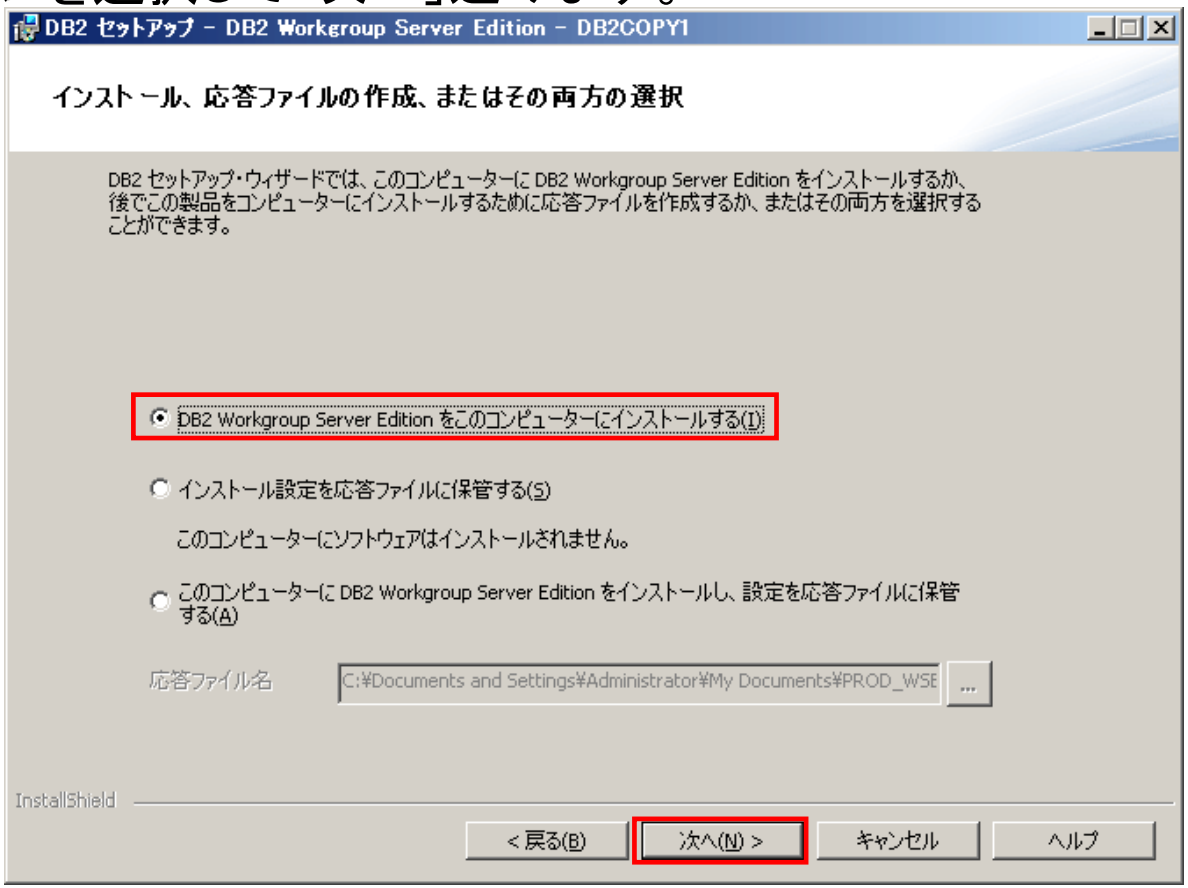
- 以下の画面が表示されます。使用条件を確認し、「次へ」をクリックします。



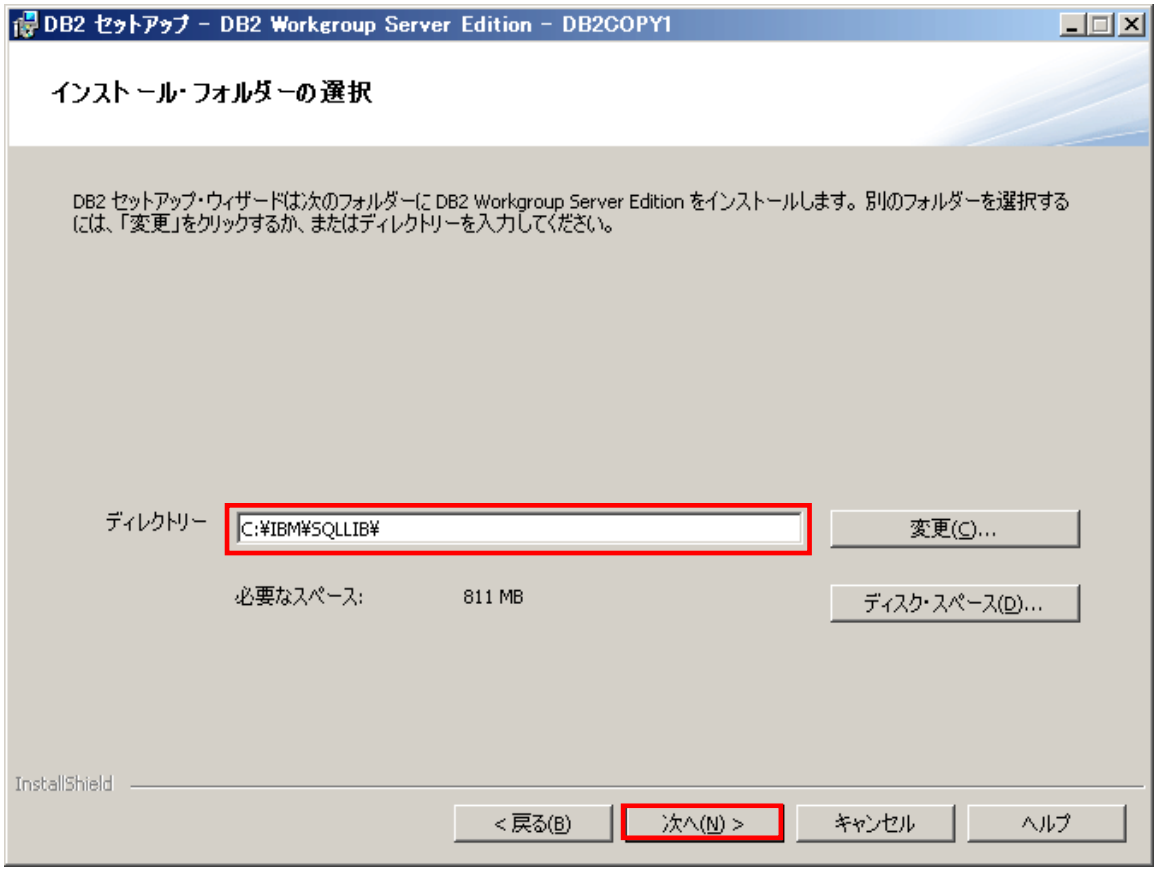
- 以下の画面が表示されます。「標準」インストールタイプを選択して「次へ」をクリックします。



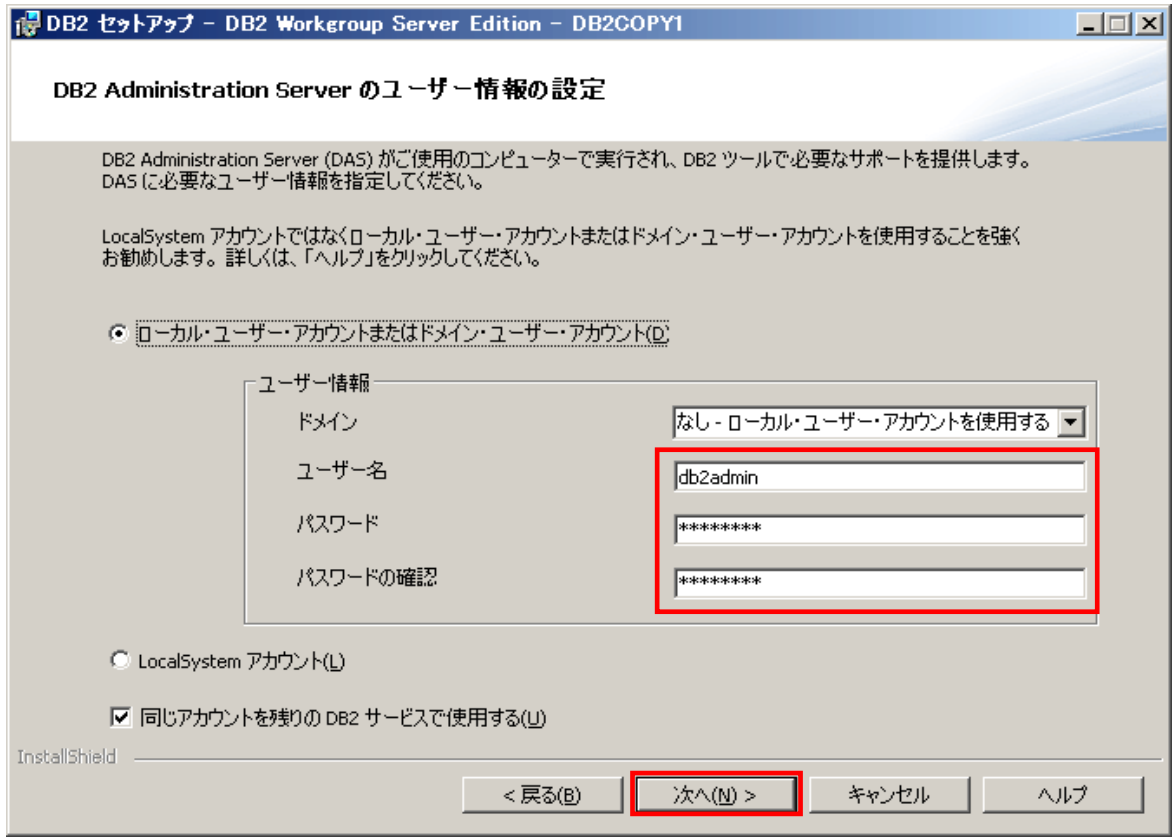
- 以下の画面が表示されます。応答ファイルは保存せずに以下のラジオボタンを選択して「次へ」進みます。



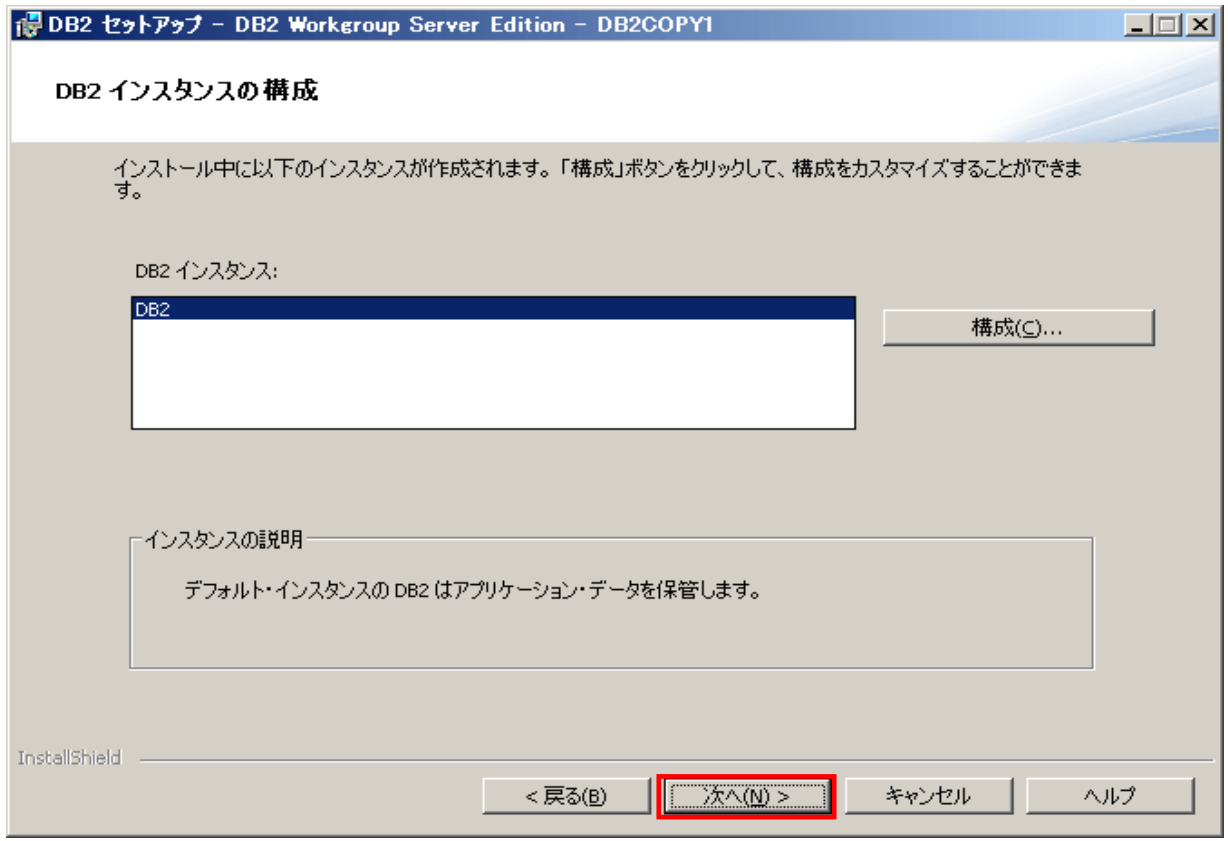
- 以下の画面で導入ディレクトリを確認し、「次へ」進みます。



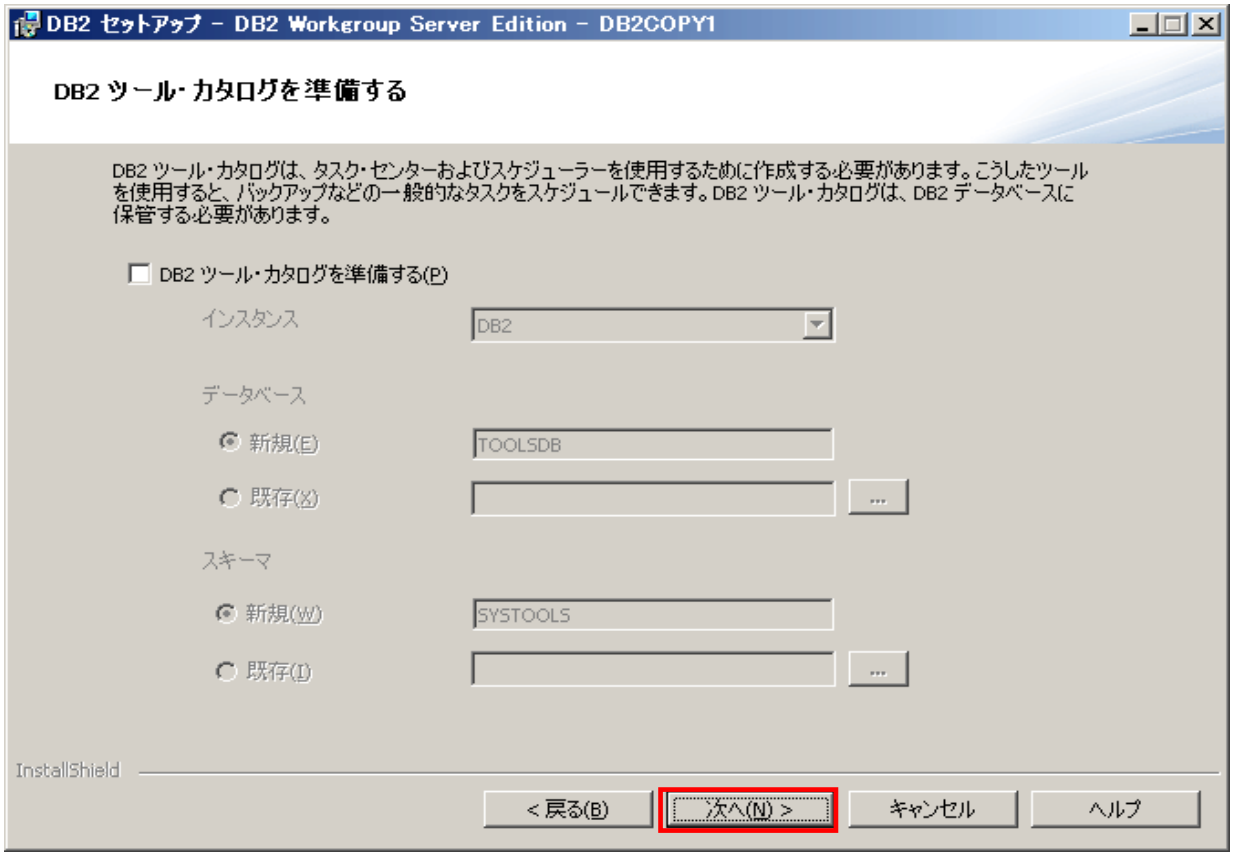
- 以下の画面に示すようにDASで使用するユーザを指定してください。



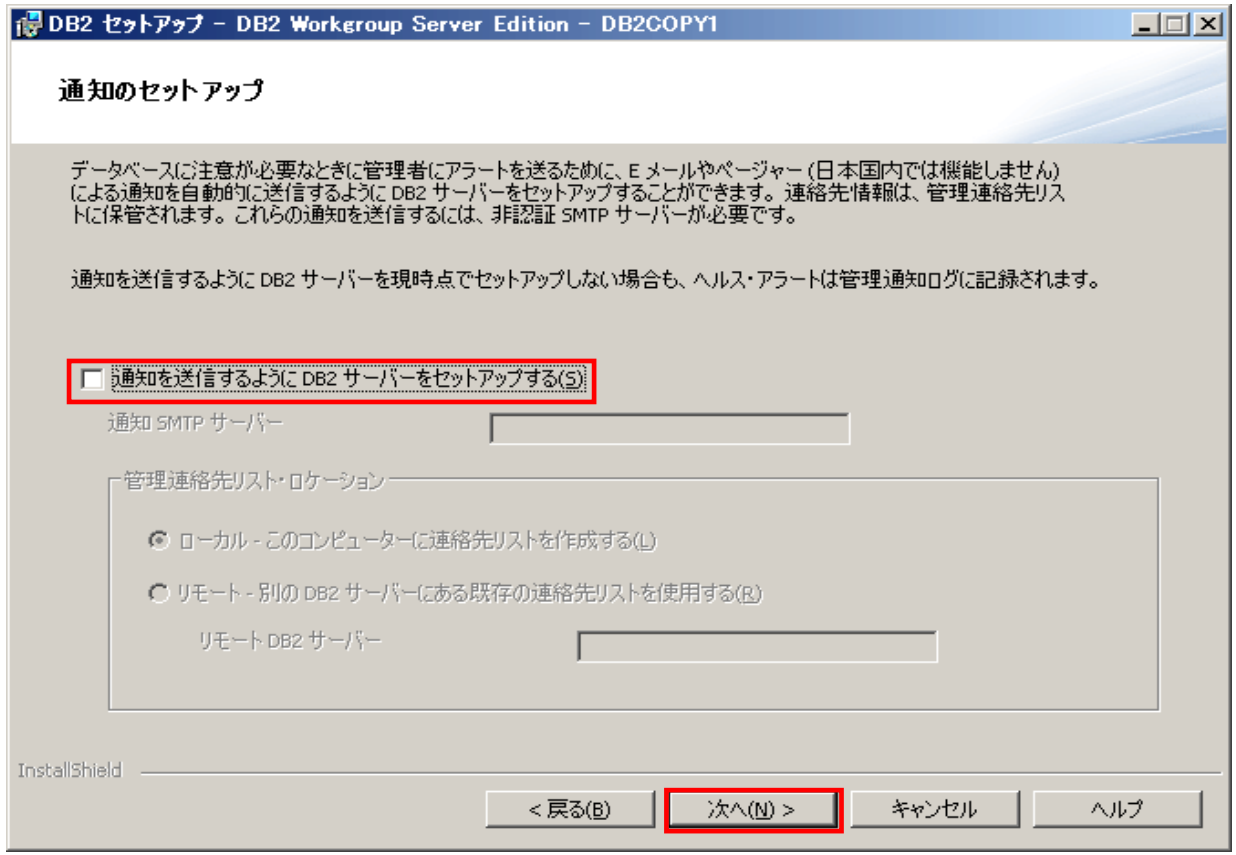
- 以下の画面でDB2のデフォルトインスタンス名を確認して、「次へ」進みます。



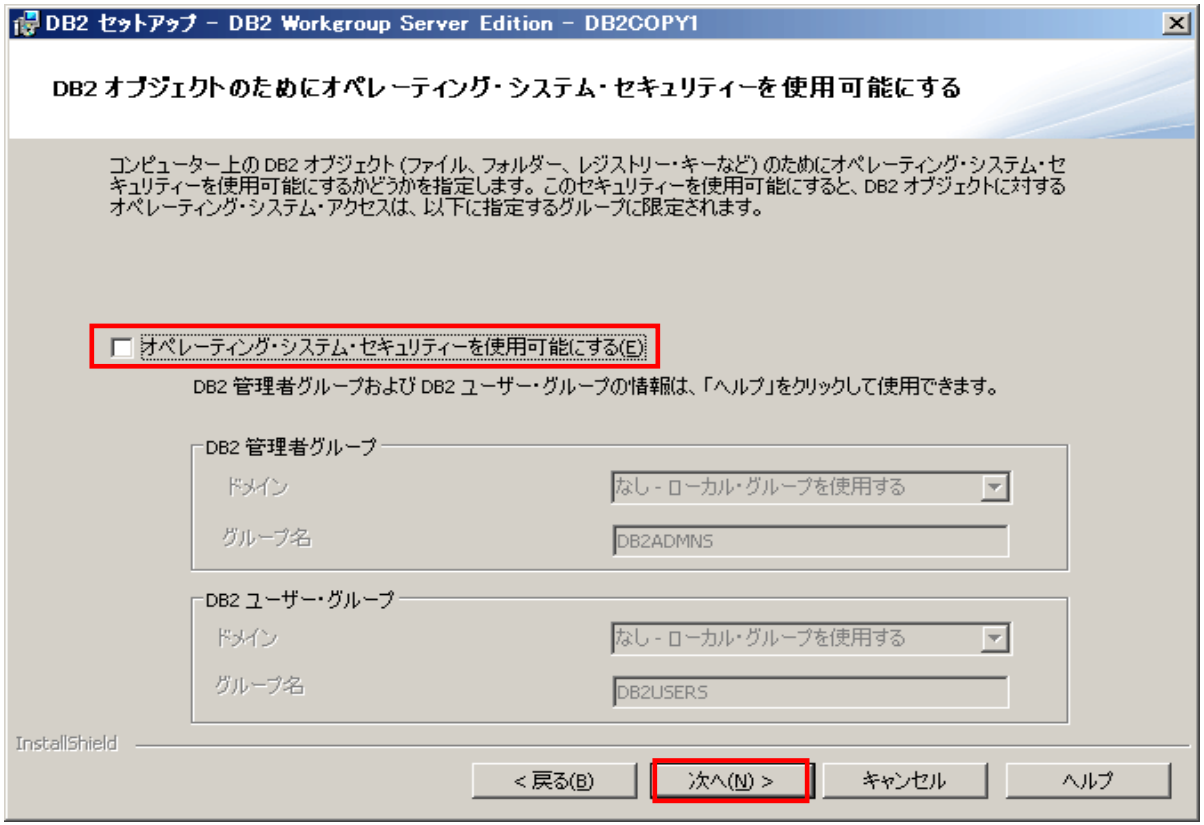
- 以下の画面でDB2のカタログを作成せずに「次へ」進みます。



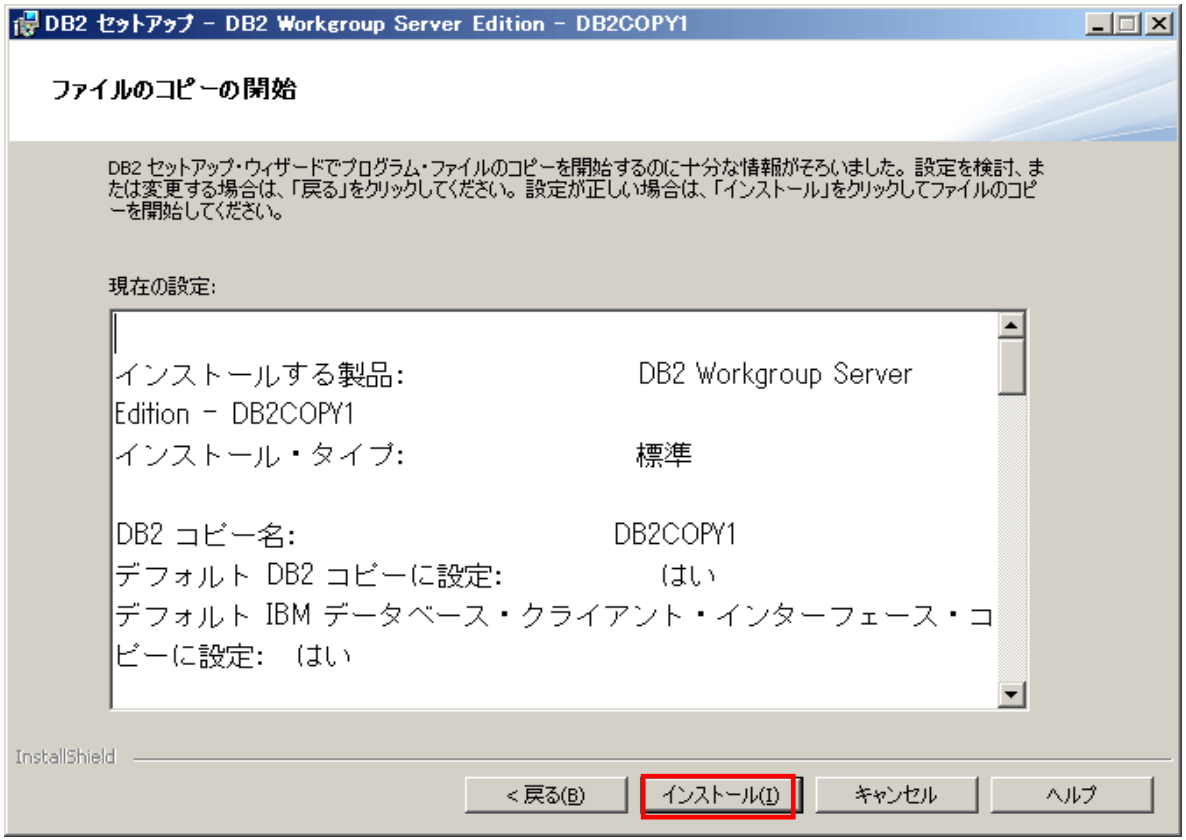
- 以下の画面で管理者への通知送信機能を使用しない選択を行い、「次へ」進みます。



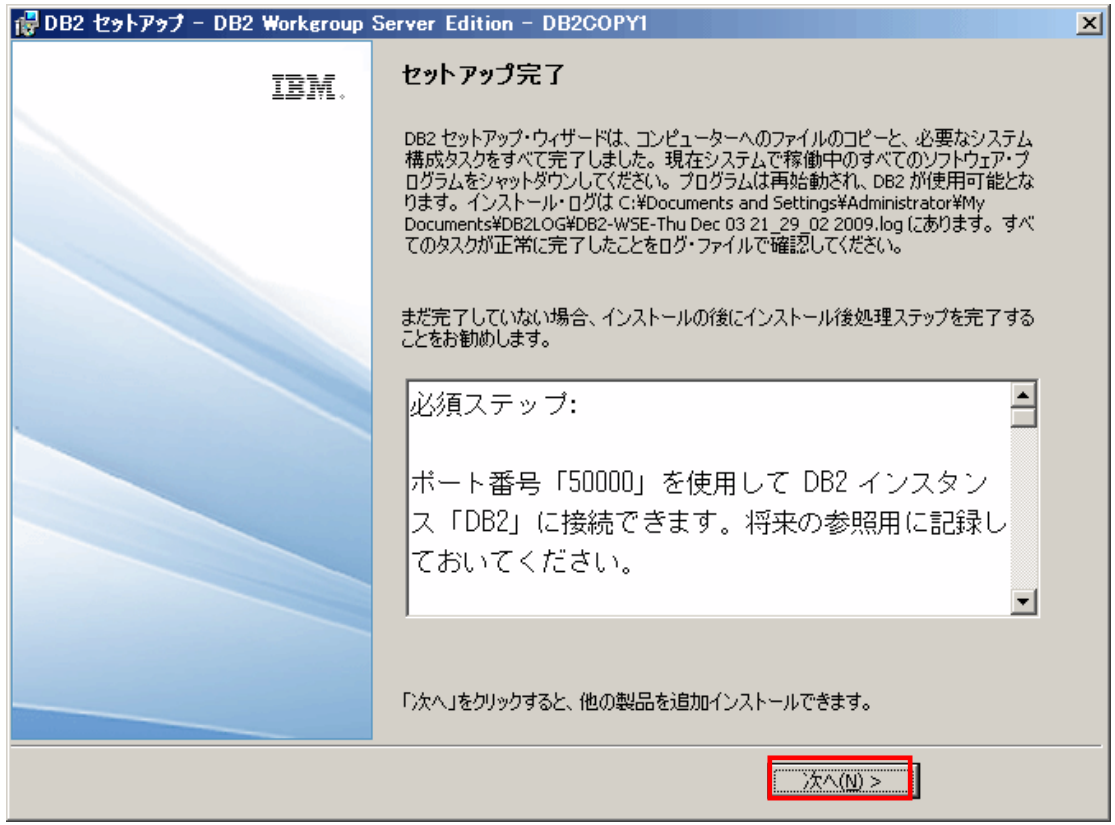
- 以下の画面でオペレーティングシステム・セキュリティを使用しない選択を行い、「次へ」進みます。



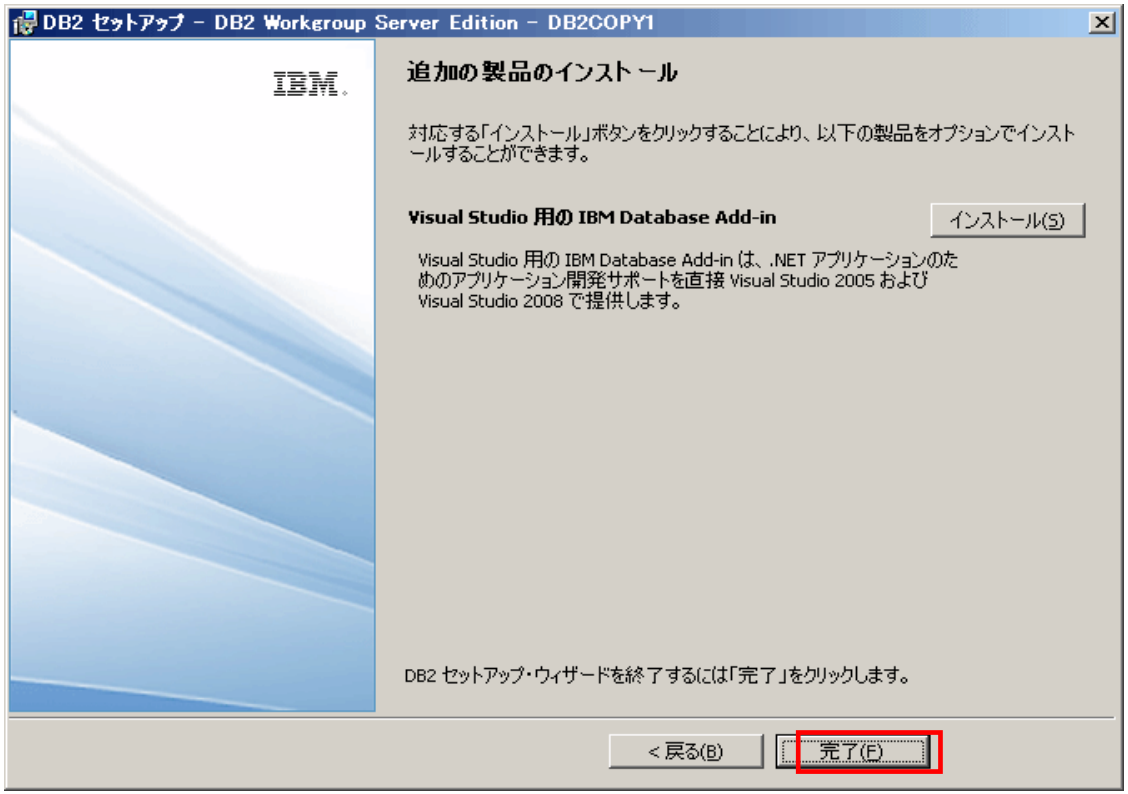
- 以下の設定内容の確認画面を確認し、「インストール」をクリックします。



- 以下の画面でモジュールの導入が開始されます。(DB2の導入には数分～数十分程度かかります。)



- 以下の画面で示された、オプションのインストールは行わずに「完了」します。※導入後Windows再起動を行います。（後々JDBCドライバ絡みの問題が発生する為）



IMSDB作成

- 「スタート」ー「プログラム」ー「IBM DB2」ー「DB2 COPY1(デフォルト)」ー「コマンド行ツール」ー「コマンド・ウィンドウ」のメニューからDB2のコマンドウィンドウを起動します。

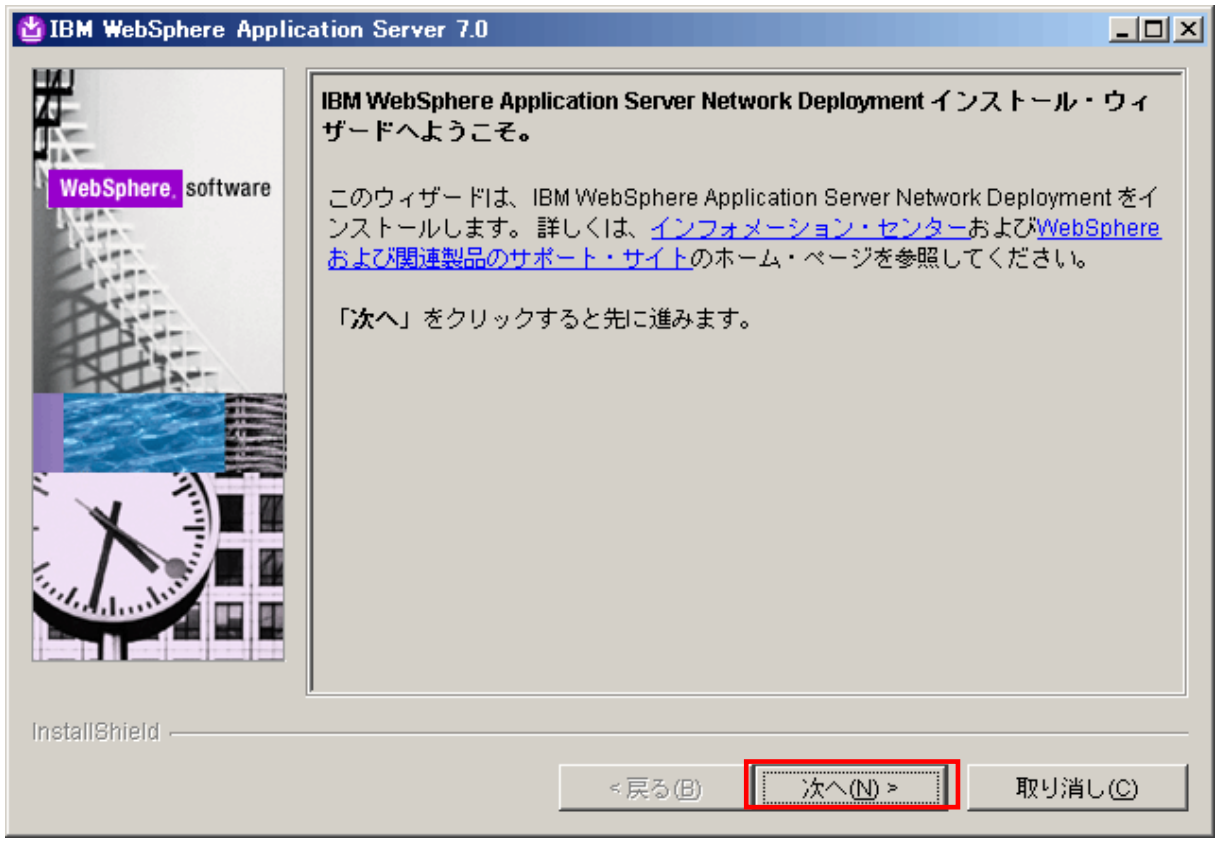
  以下の手順に従いIMSが使用するDB2データベースを事前に作成します。

```
C:¥IBM¥SQLLIB¥BIN>cd c:¥

C:¥>db2 create database IMSDB automatic storage yes on 'C:¥' dbpath on 'C:¥' using codeset utf-8
territory us collate using system pagesize 8192
DB20000I  CREATE DATABASE コマンドが正常に完了しました。

C:¥>db2 connect to IMSDB

   データベース接続情報

データベース・サーバー                  = DB2/NT 9.7.1
SQL 許可 ID                        = ADMINIST...
ローカル・データベース別名                  = IMSDB

C:¥>db2 grant createtab,bindadd,connect on database to user db2admin
DB20000I  SQL コマンドが正常に完了しました。
```

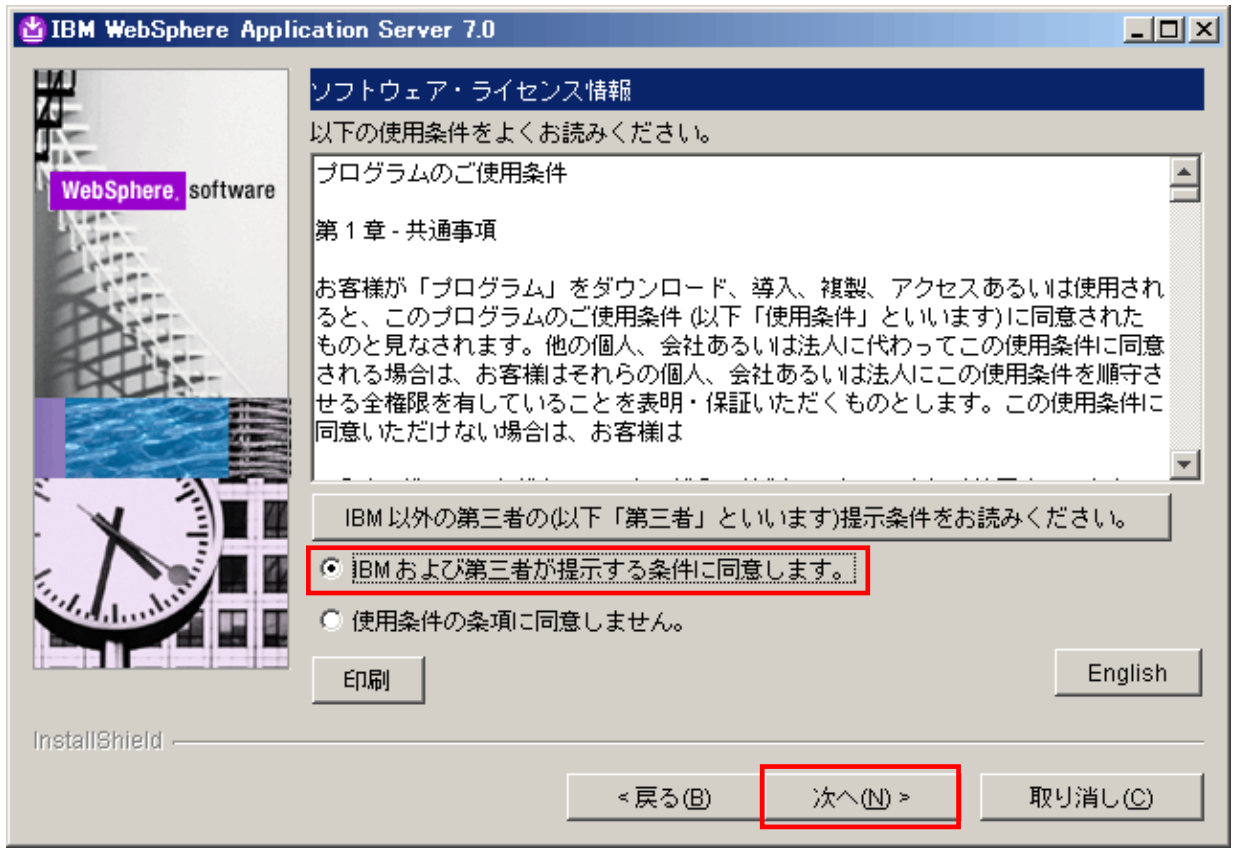
WAS導入

- WebSphere Application Serverのインストールウィザードを起動します。

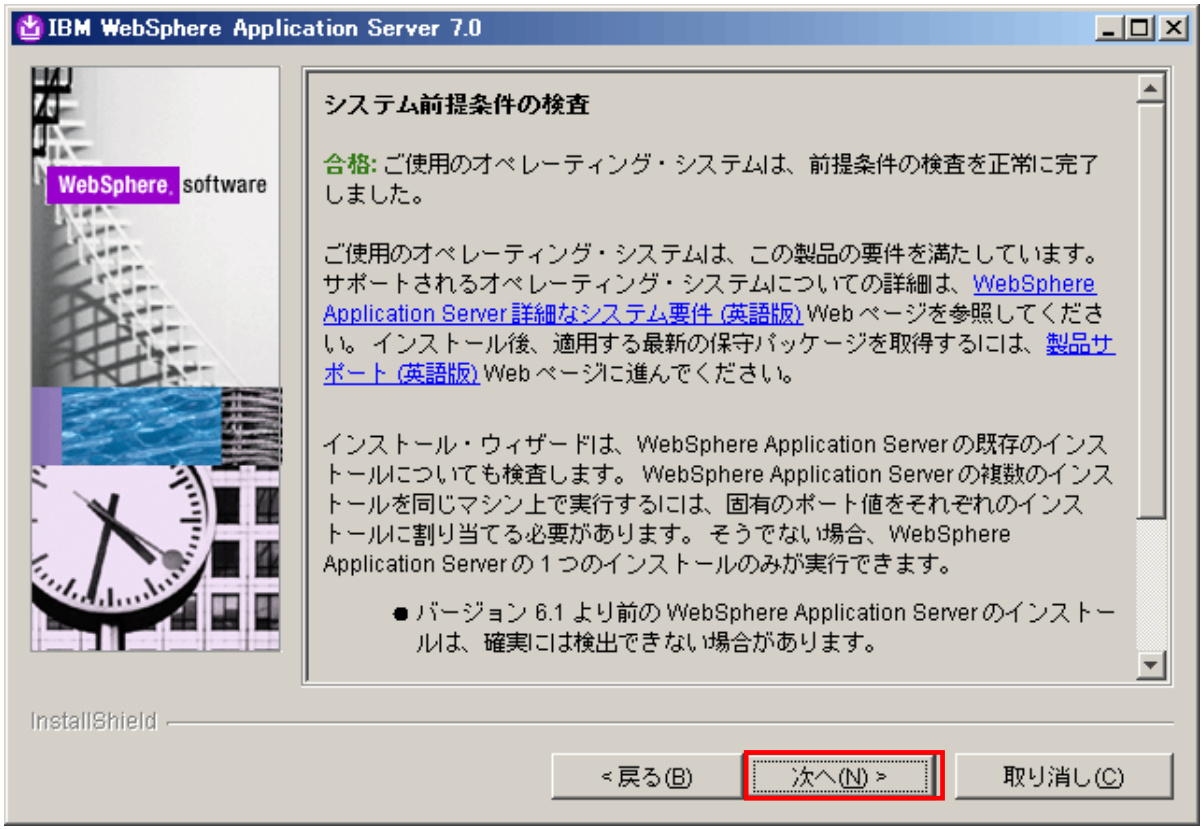
- 以下の画面が表示されます。「次へ」をクリックします。



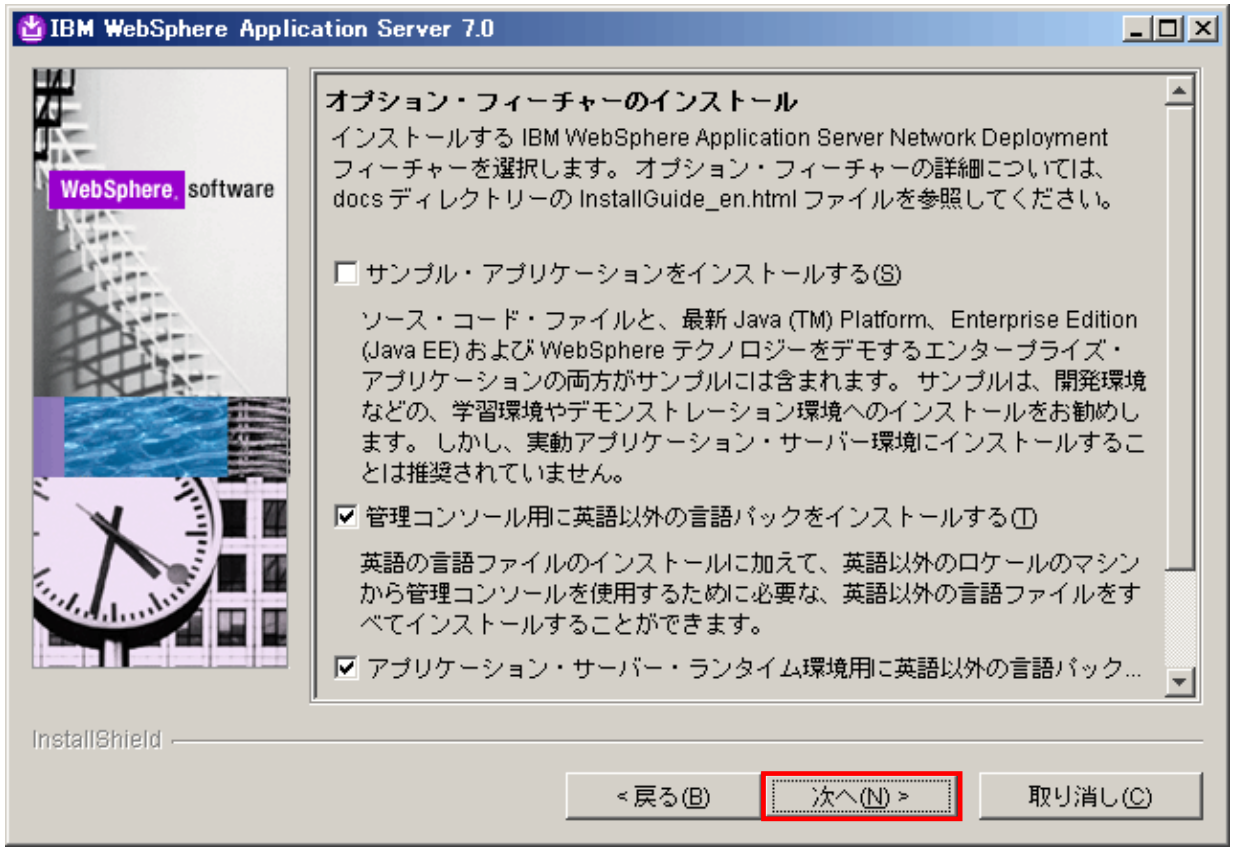
- 以下の画面が表示されます。使用条件を確認し、「次へ」をクリックします。



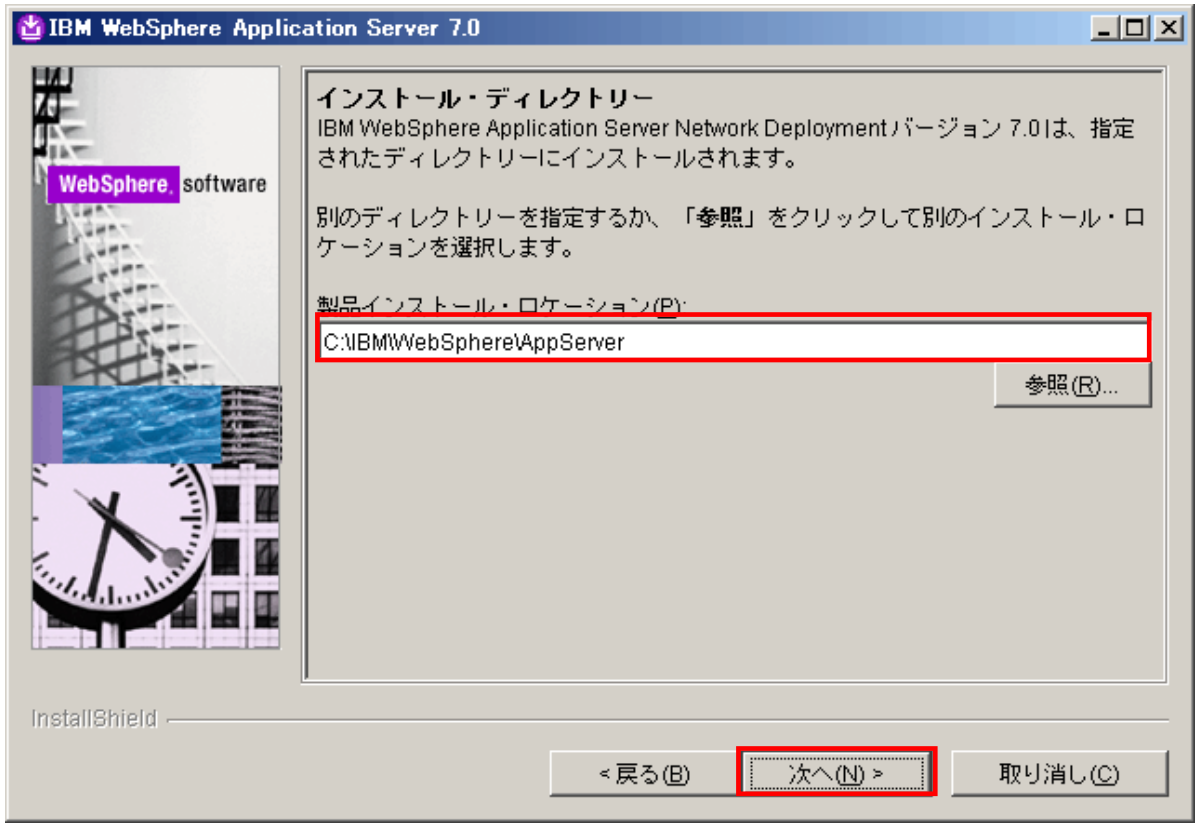
- 以下の画面が表示されます。「次へ」をクリックします。



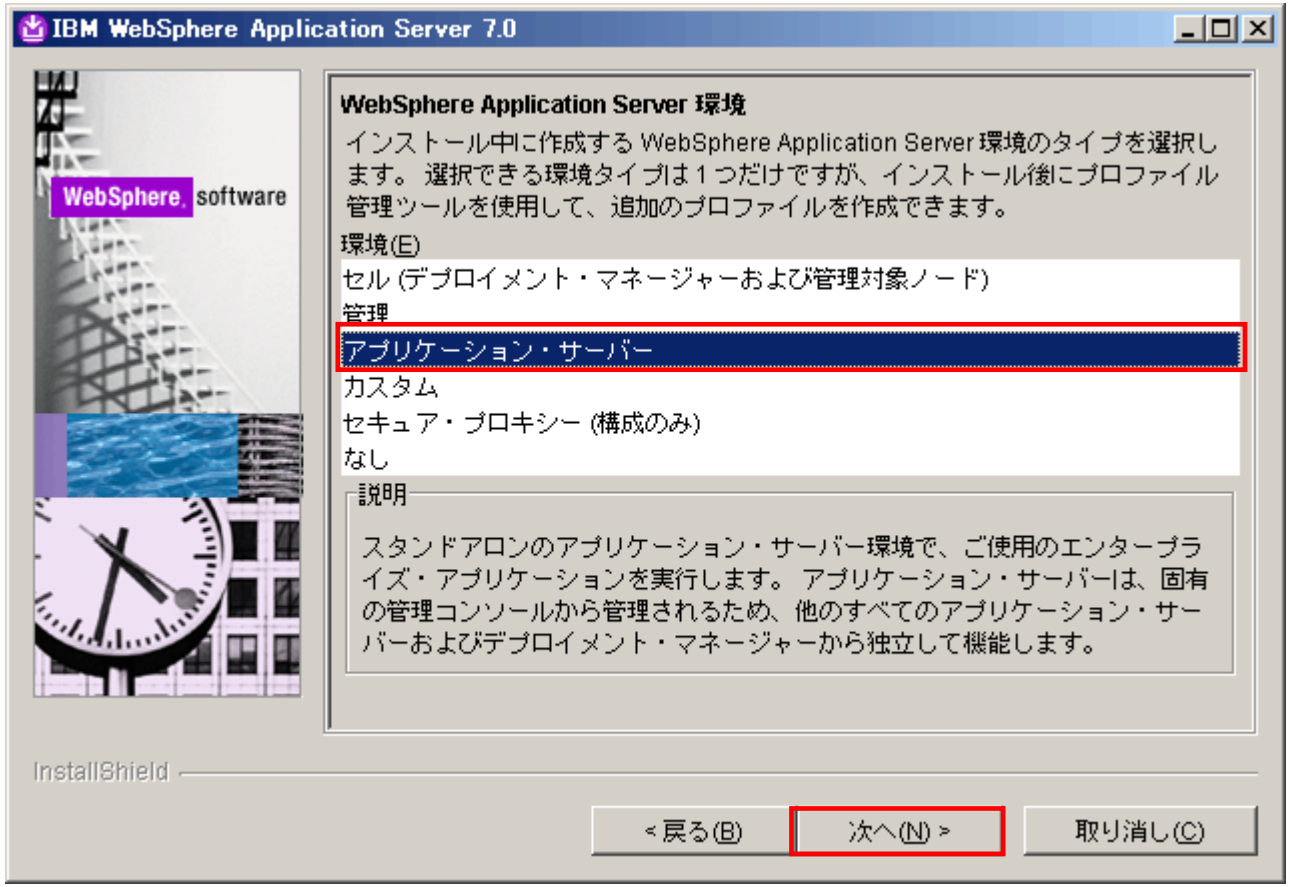
- 以下の画面が表示されます。サンプル・アプリケーションはインストールしない選択を行い、「次へ」をクリックします。



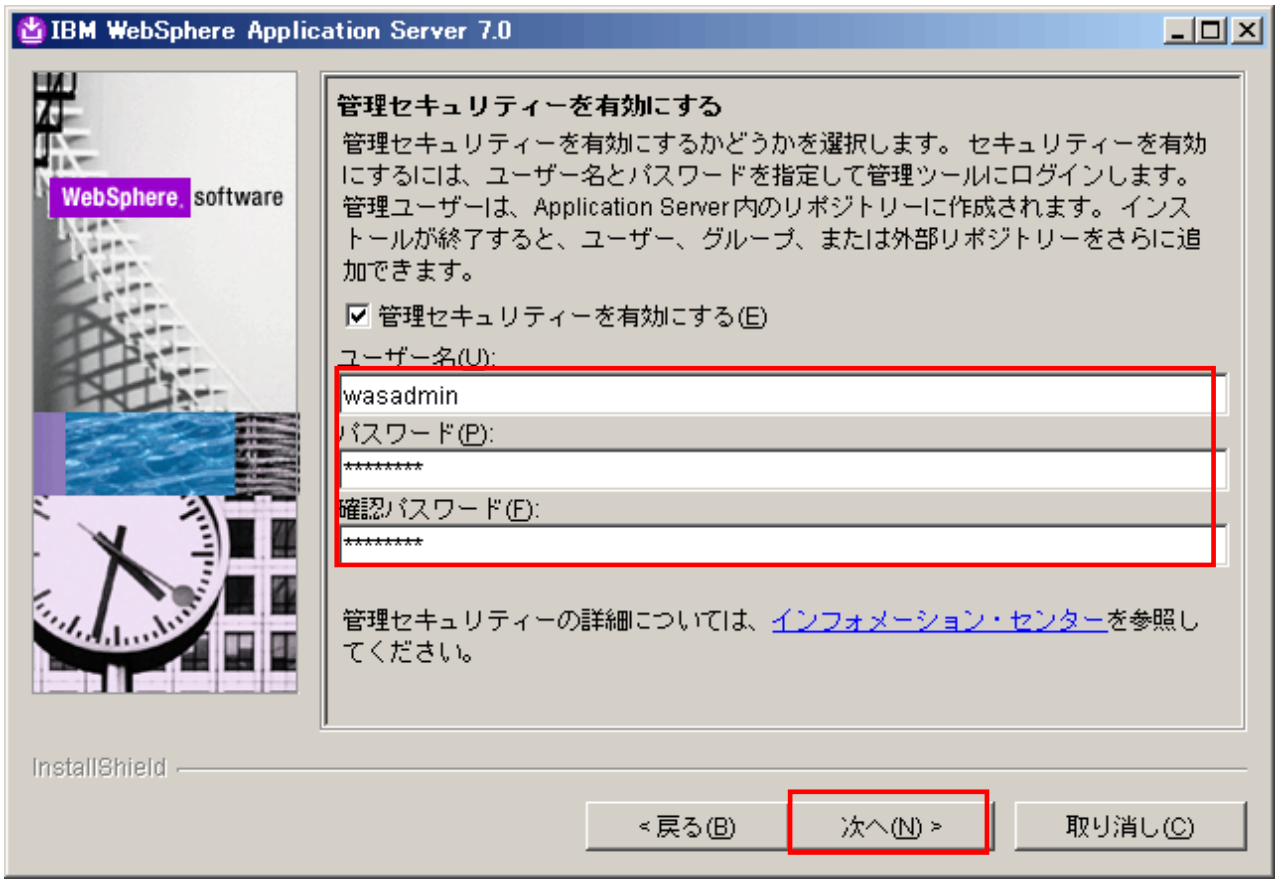
- 以下の画面で導入ディレクトリを確認し、「次へ」進みます。



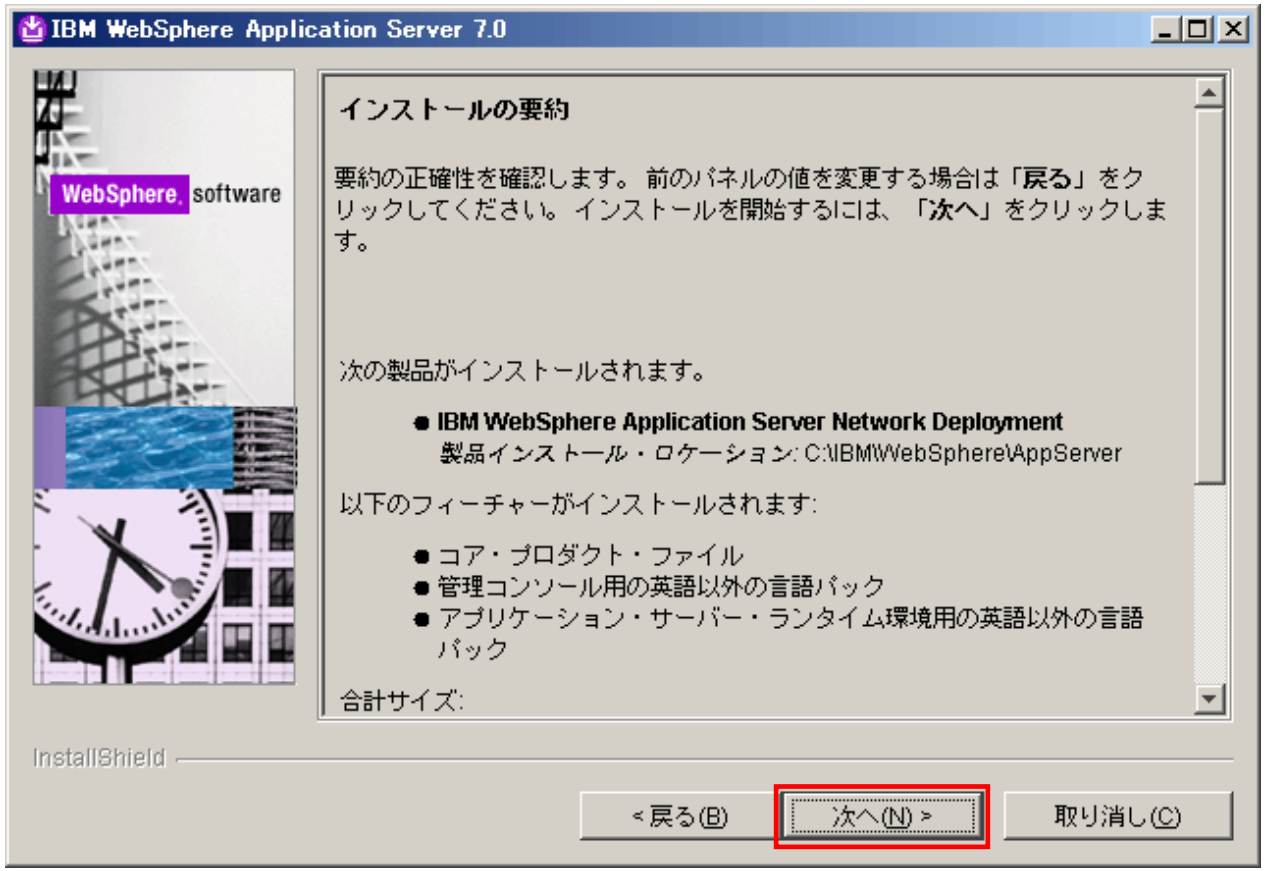
- 以下の画面が表示されます。「アプリケーション・サーバー」を選択し、「次へ」をクリックします。



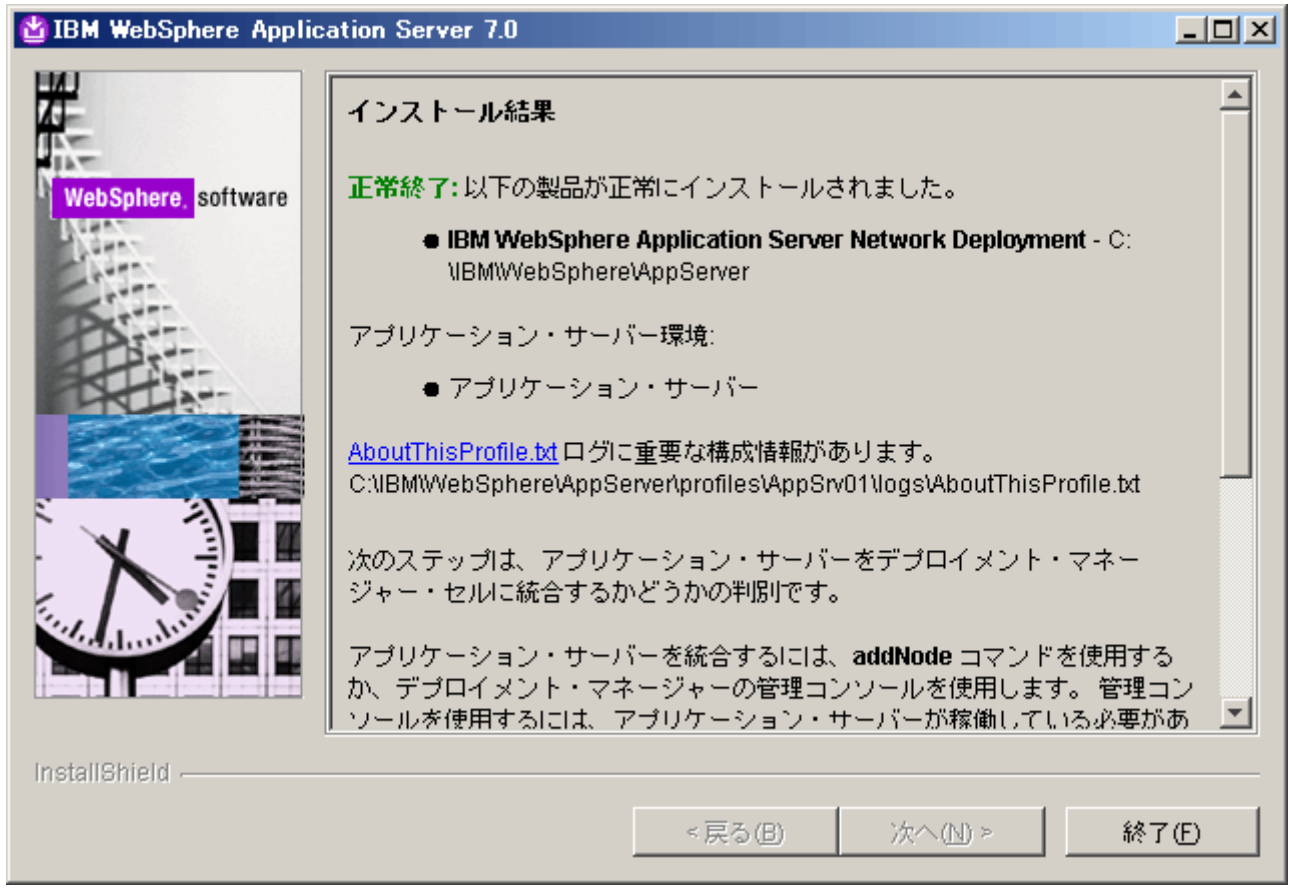
- 以下の画面に示すようにWASで使用するユーザを指定してください。



- 以下の画面でモジュールの導入が開始されます。(WASの導入には数分～数十分程度かかります。)

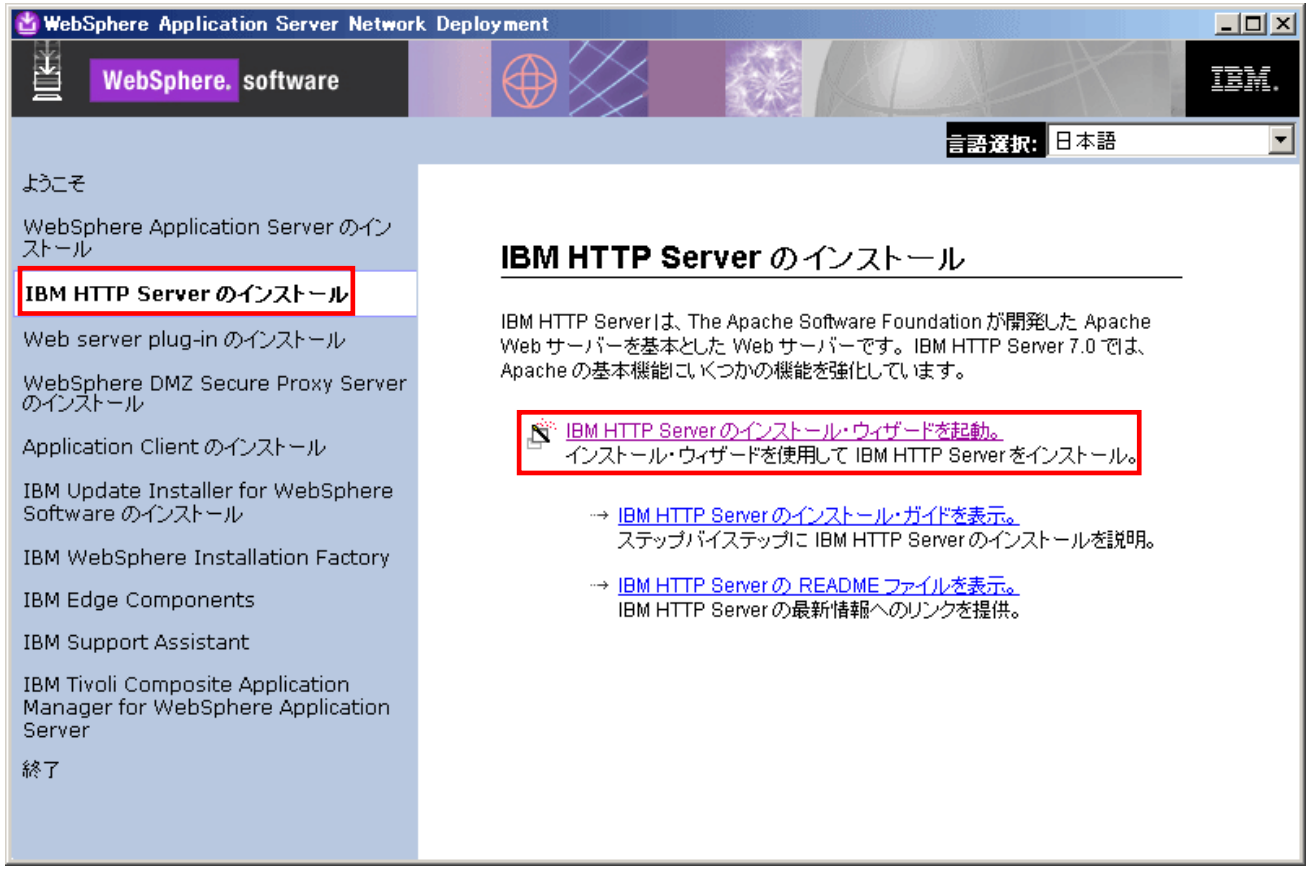


- 以下の画面で示された、「終了」します。

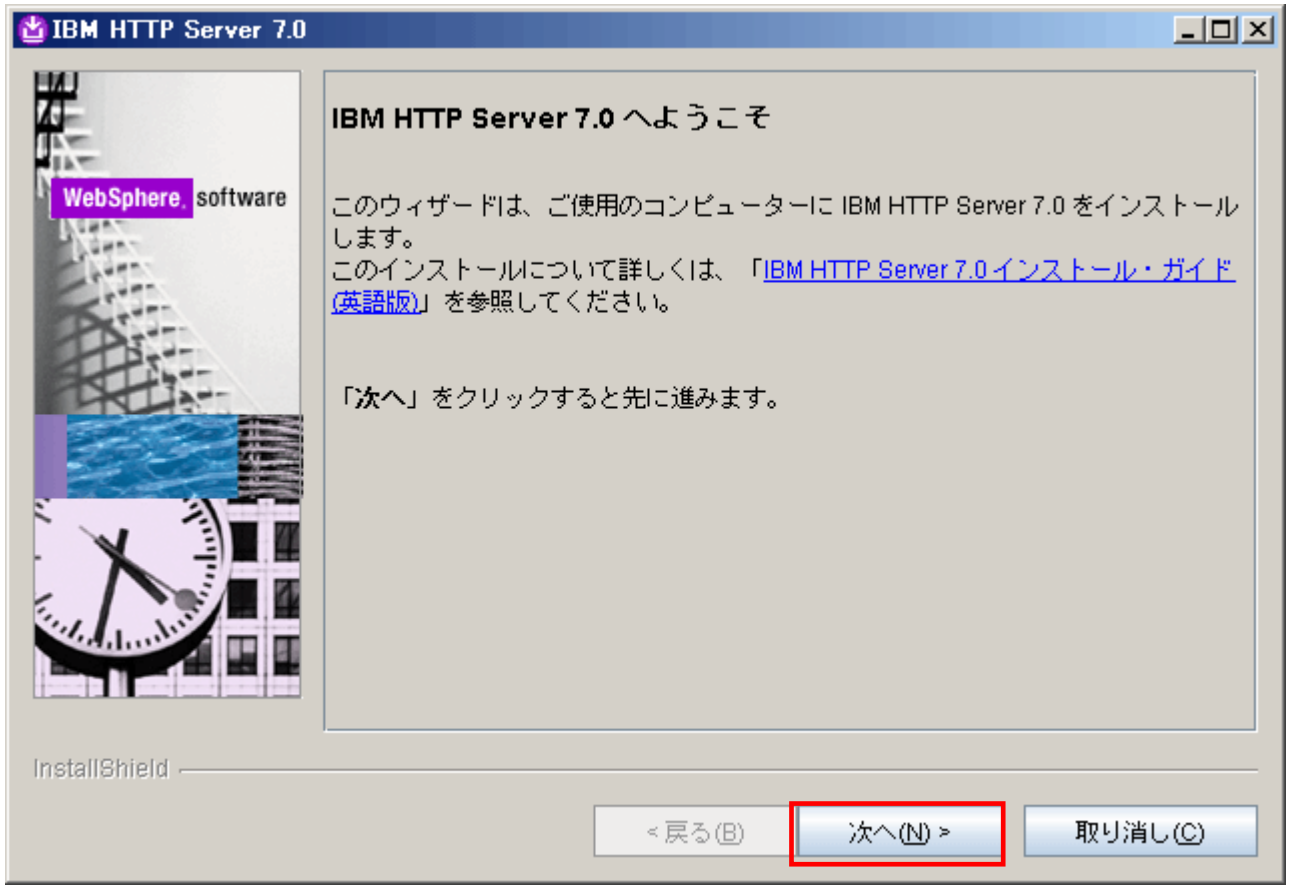


HIS導入

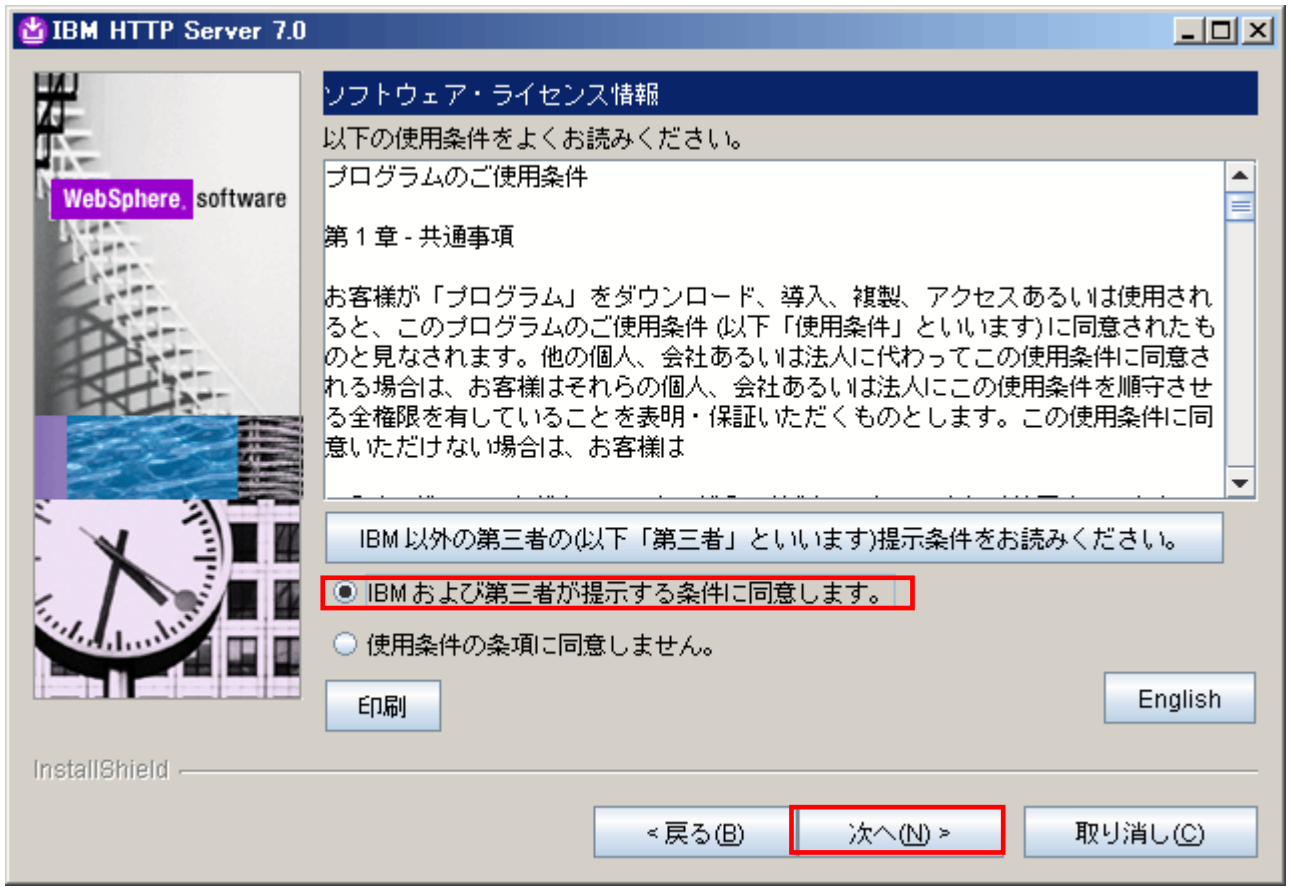
- IBM HTTP Serverのインストールウィザードを起動します。



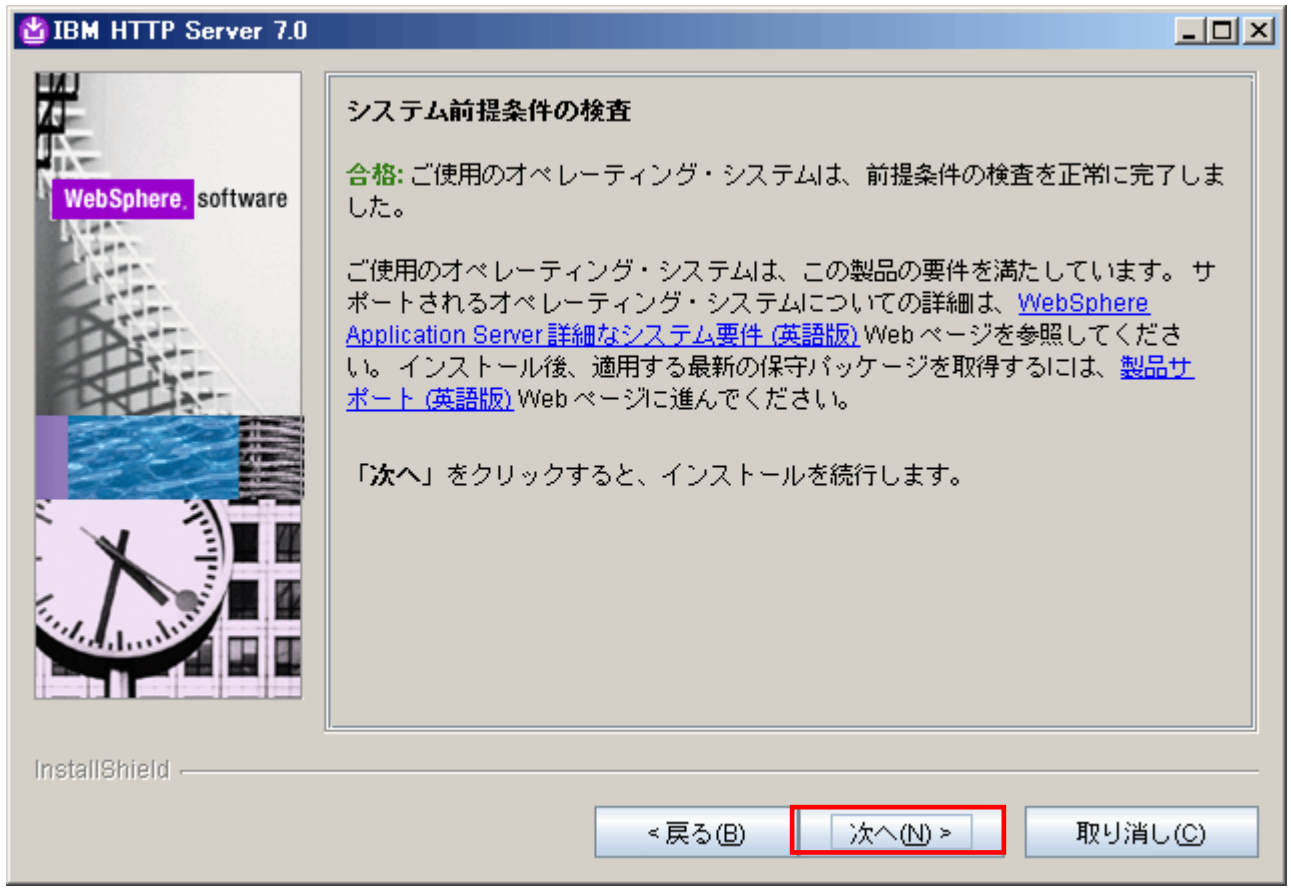
- 以下の画面が表示されます。「次へ」をクリックします。



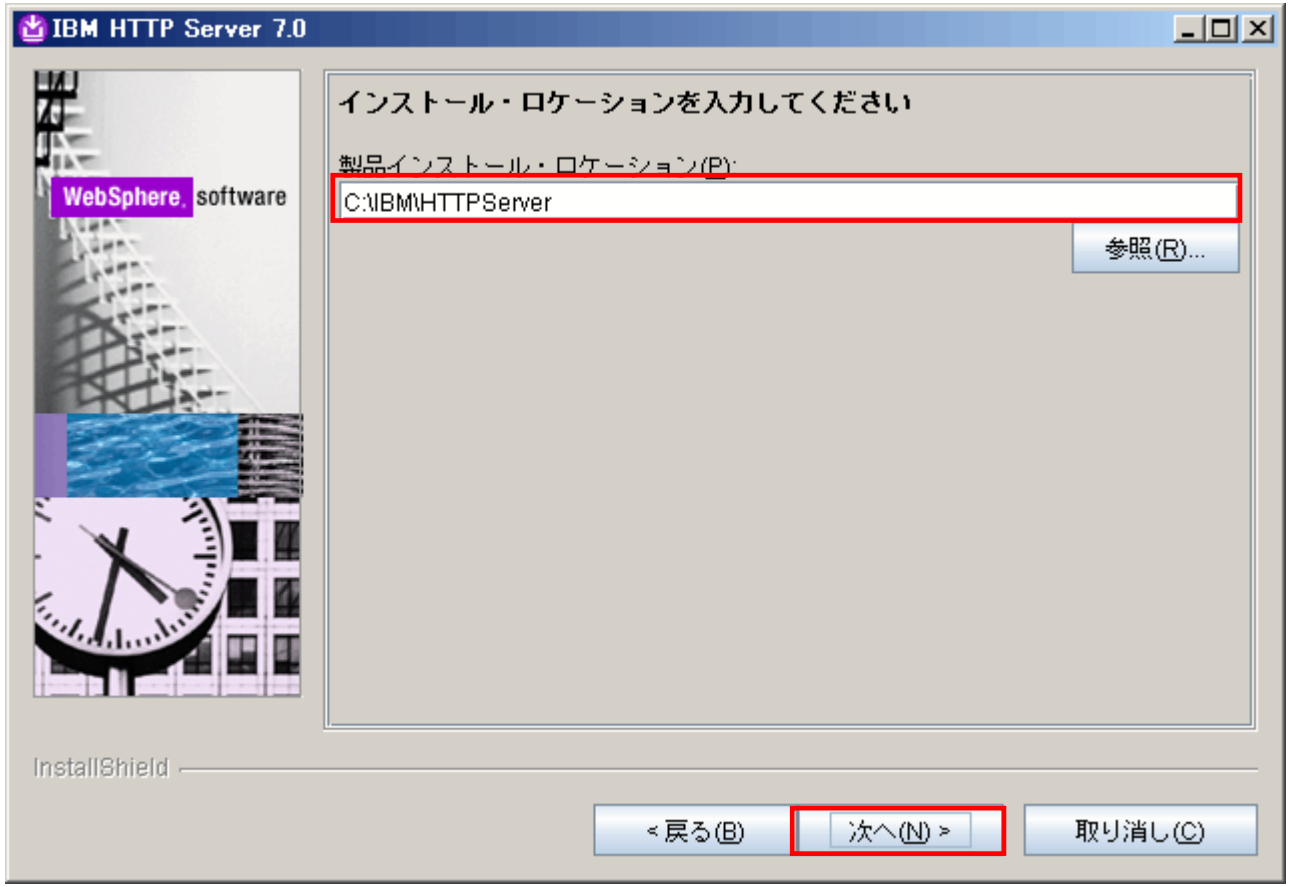
- 以下の画面が表示されます。使用条件を確認し、「次へ」をクリックします。



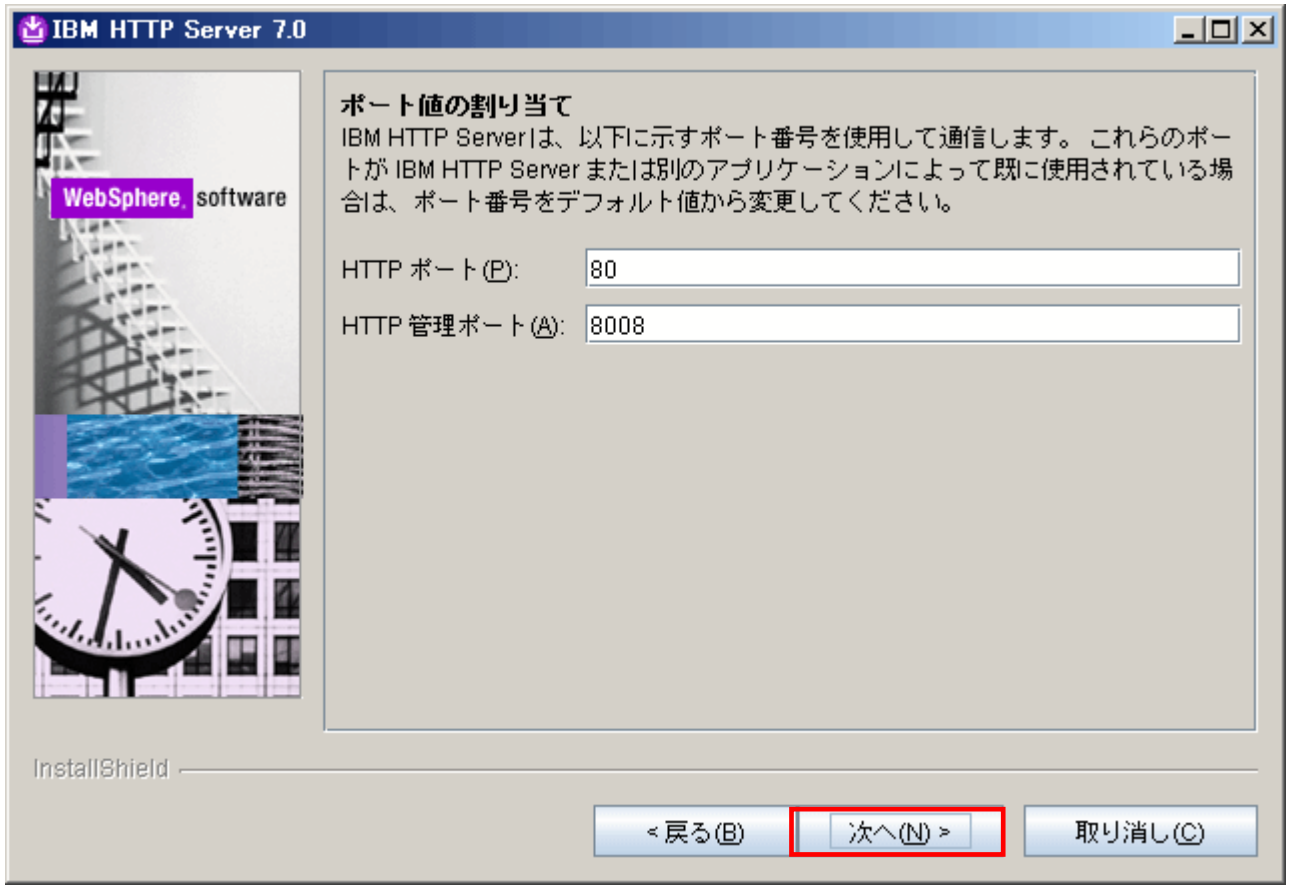
- 以下の画面が表示されます。「次へ」をクリックします。



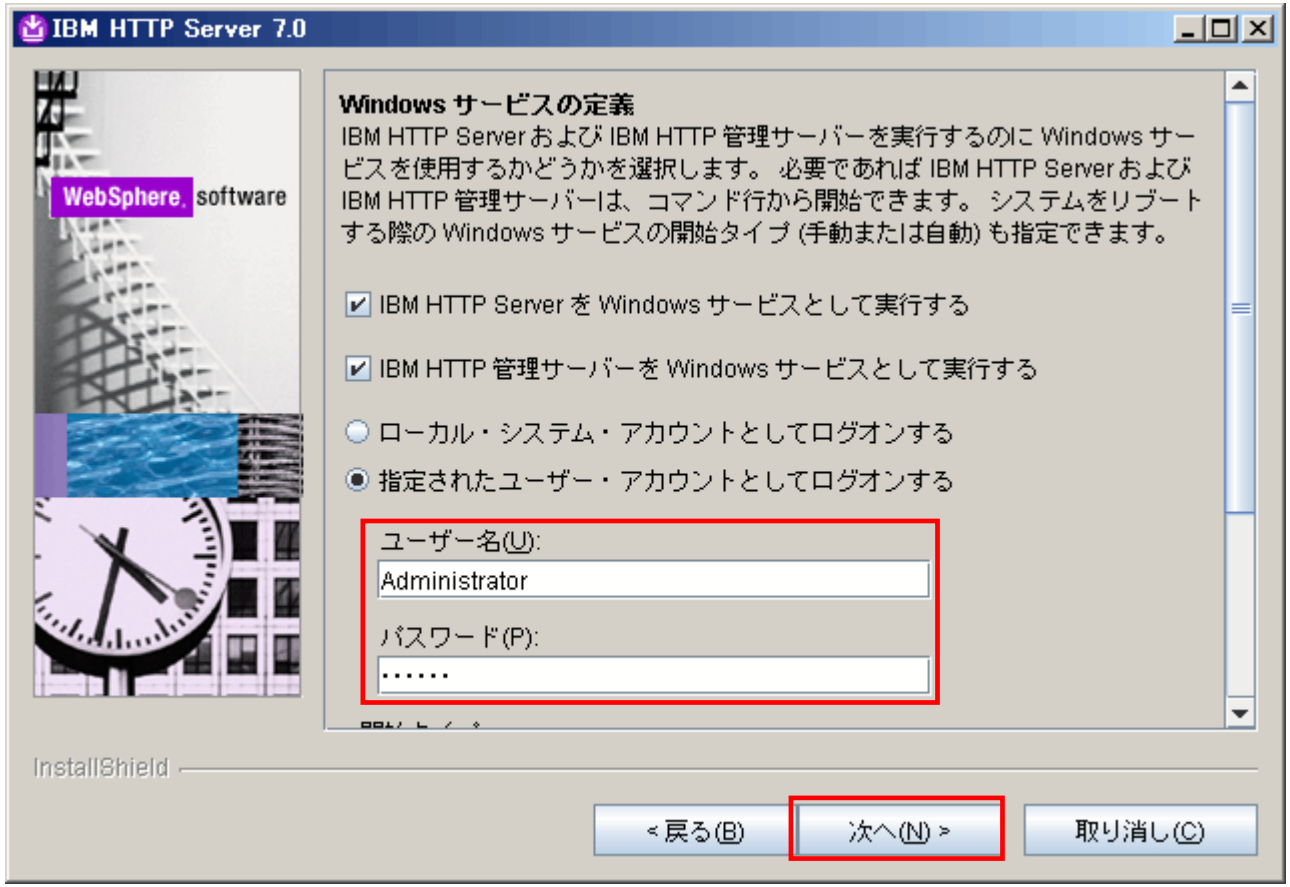
- 以下の画面で導入ディレクトリを確認し、「次へ」進みます。



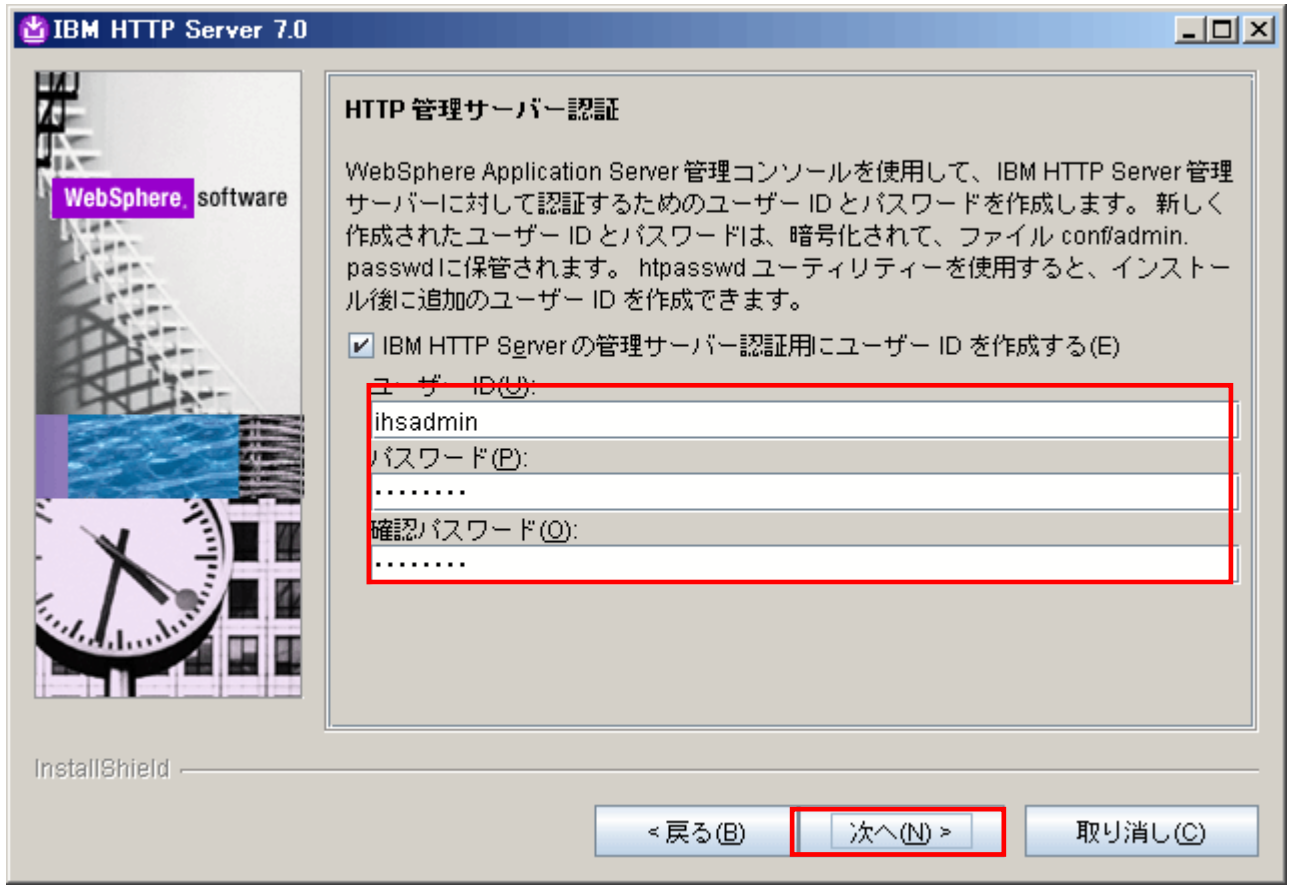
- 以下の画面に示すように使用するポートを指定してください。



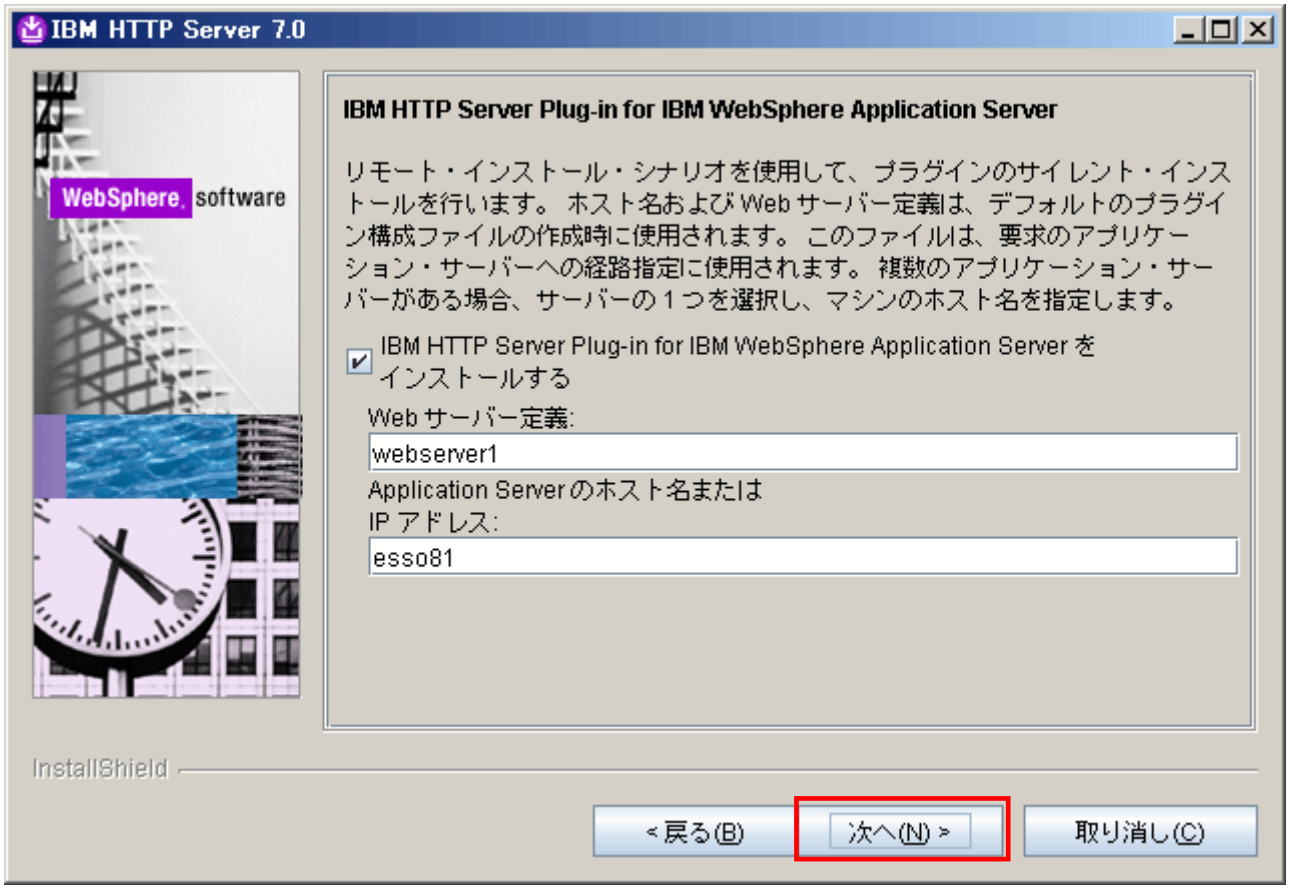
- 以下の画面に示すようにHIS Windowsサービスで使用するユーザを指定してください。



- 以下の画面に示すようにIHSで使用するユーザを指定してください。

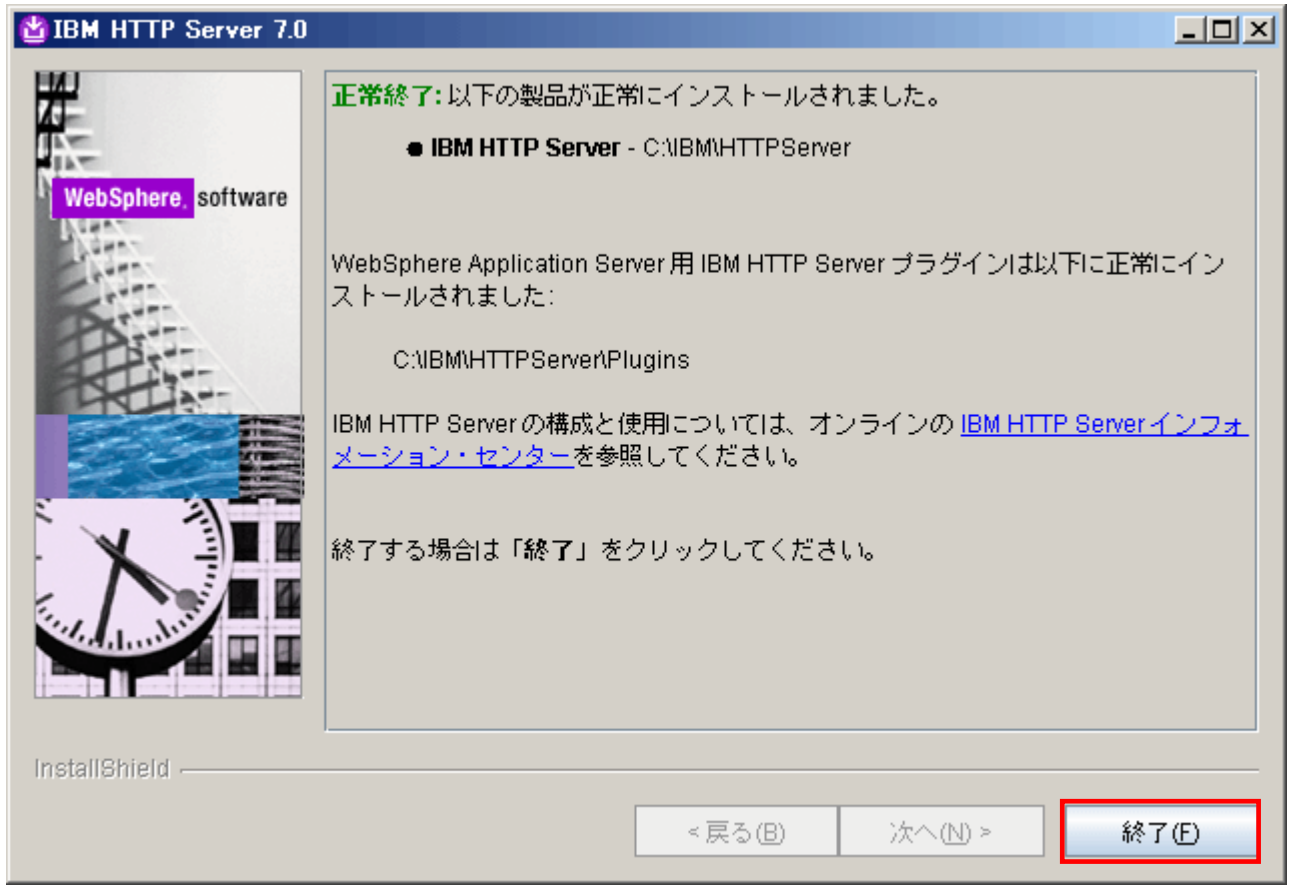


- 以下の画面で連携するWebSphere定義を確認し、「次へ」進みます。



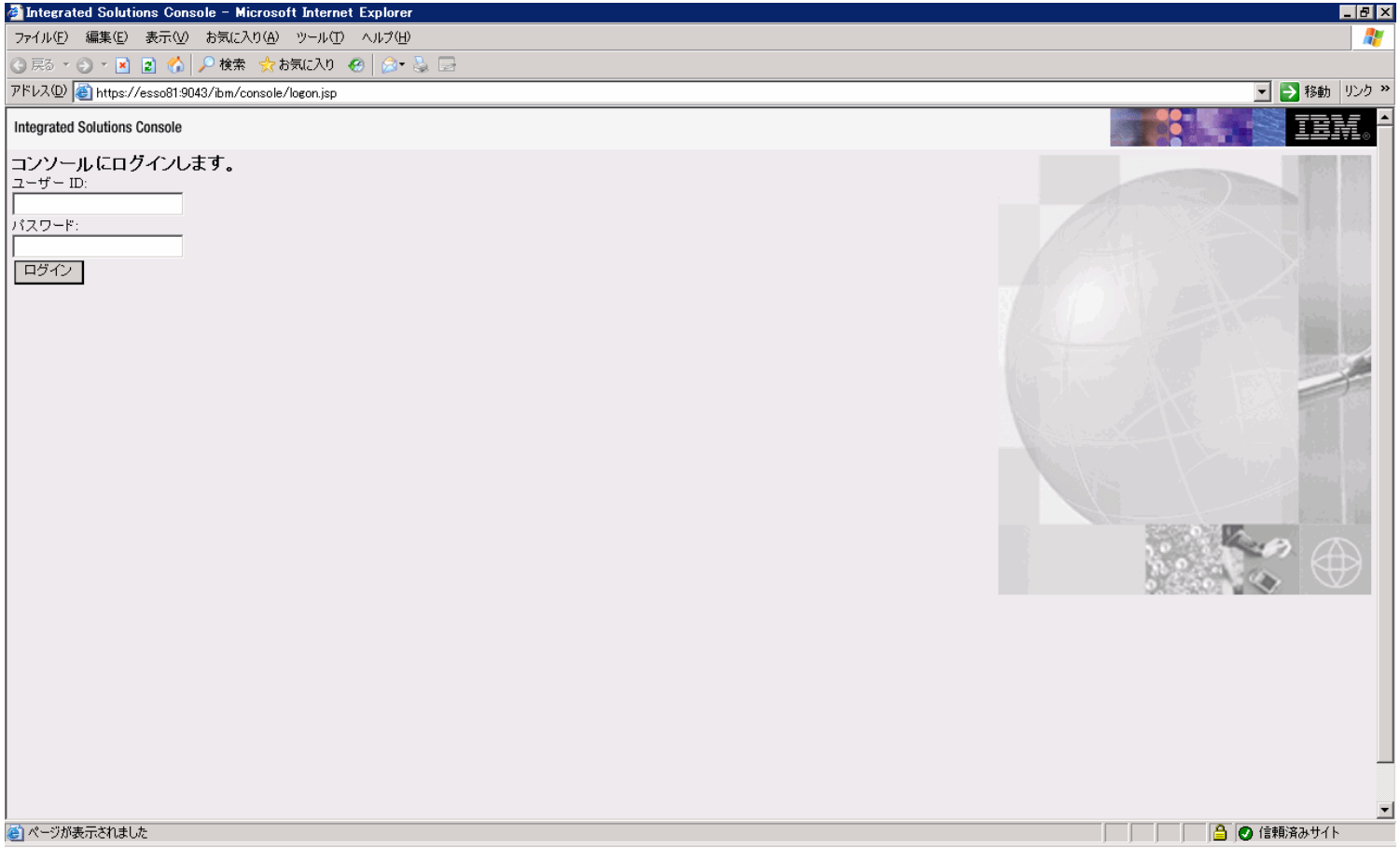
- 以下の画面でモジュールの導入が開始されます。

- 以下の画面で示された、「終了」します。

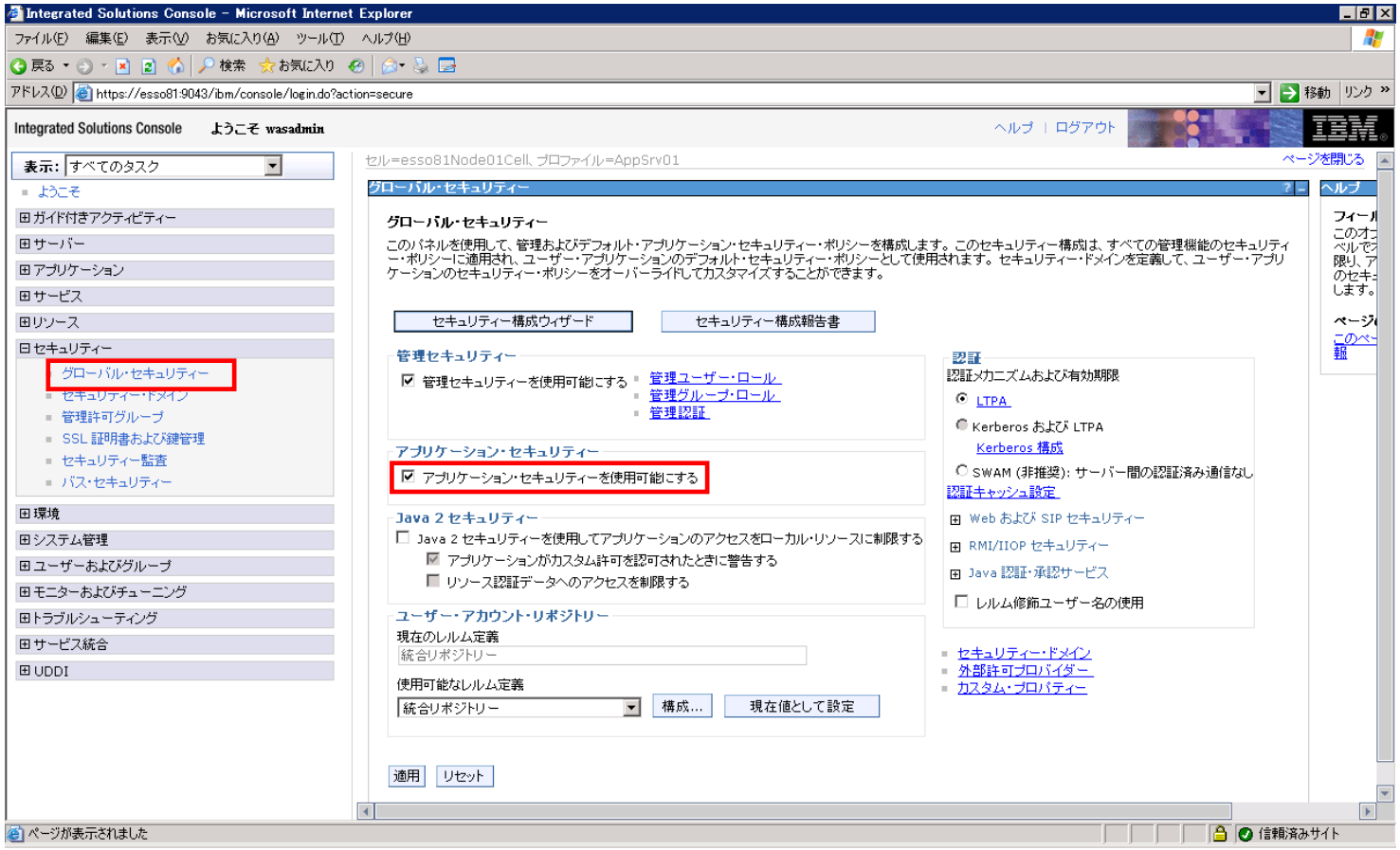


WebSphereセキュリティ設定

- WebSphere管理コンソールを起動



- グローバル・セキュリティ設定のアプリケーション・セキュリティを使用可能に変更する



WebSphere FixPack適用

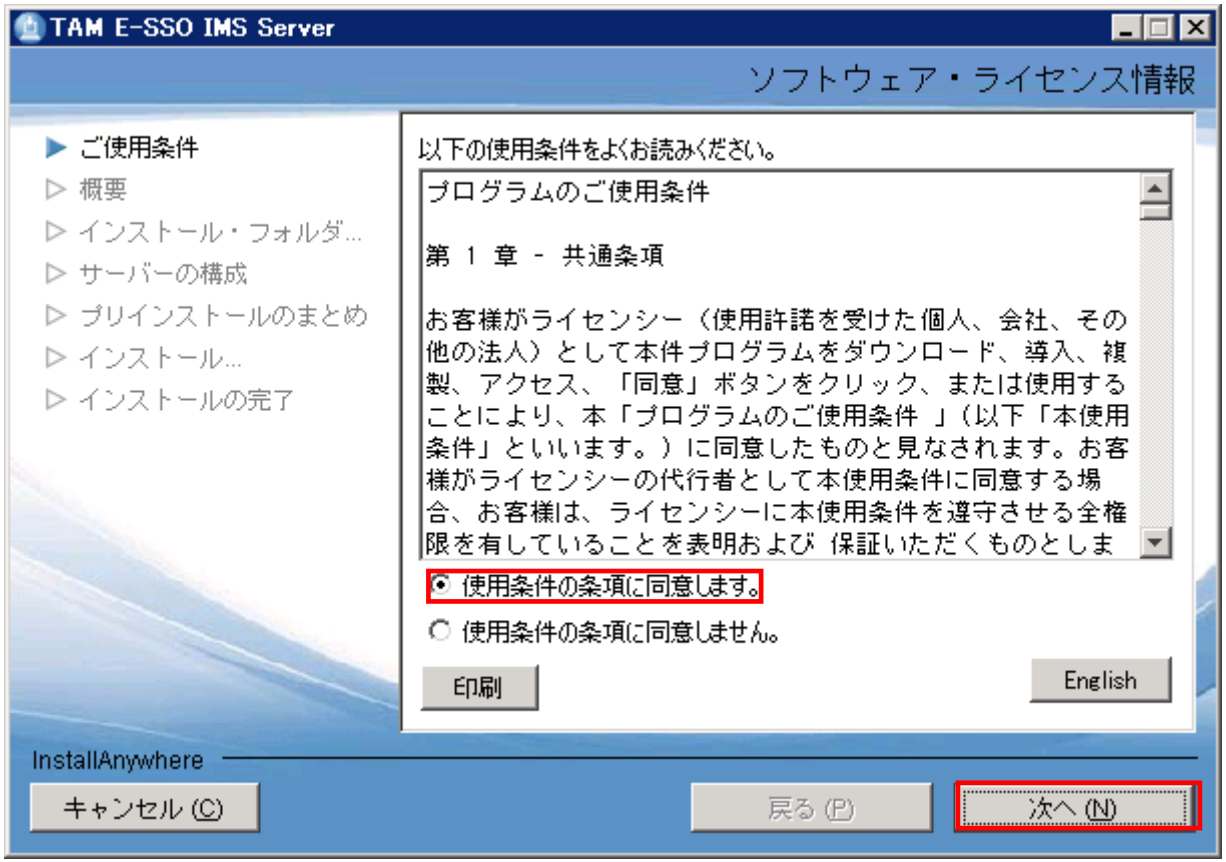
- WebSphere、IBM HTTP Server、PluginのFixPackを適用します。

ー手順記載省略ー

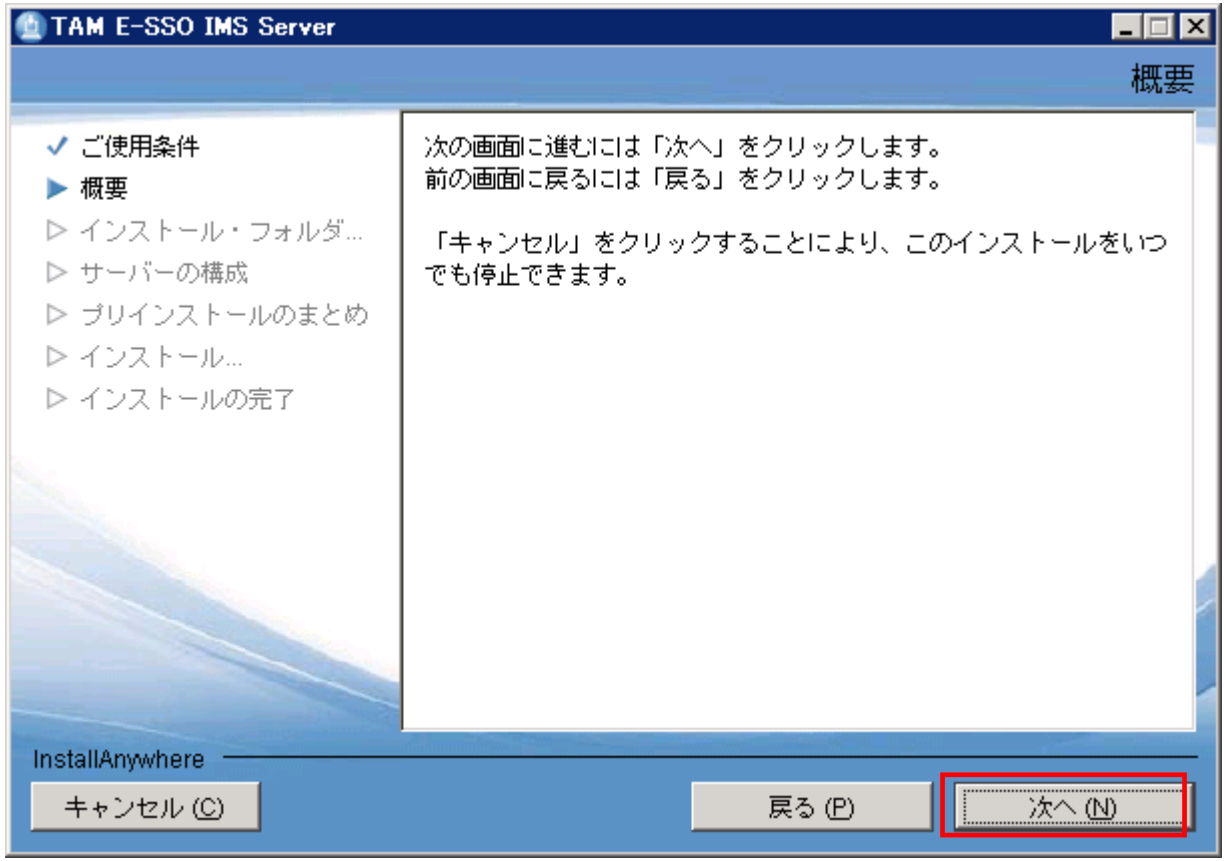
IMS Server導入

- IMS Serverのインストールウィザードを起動します。

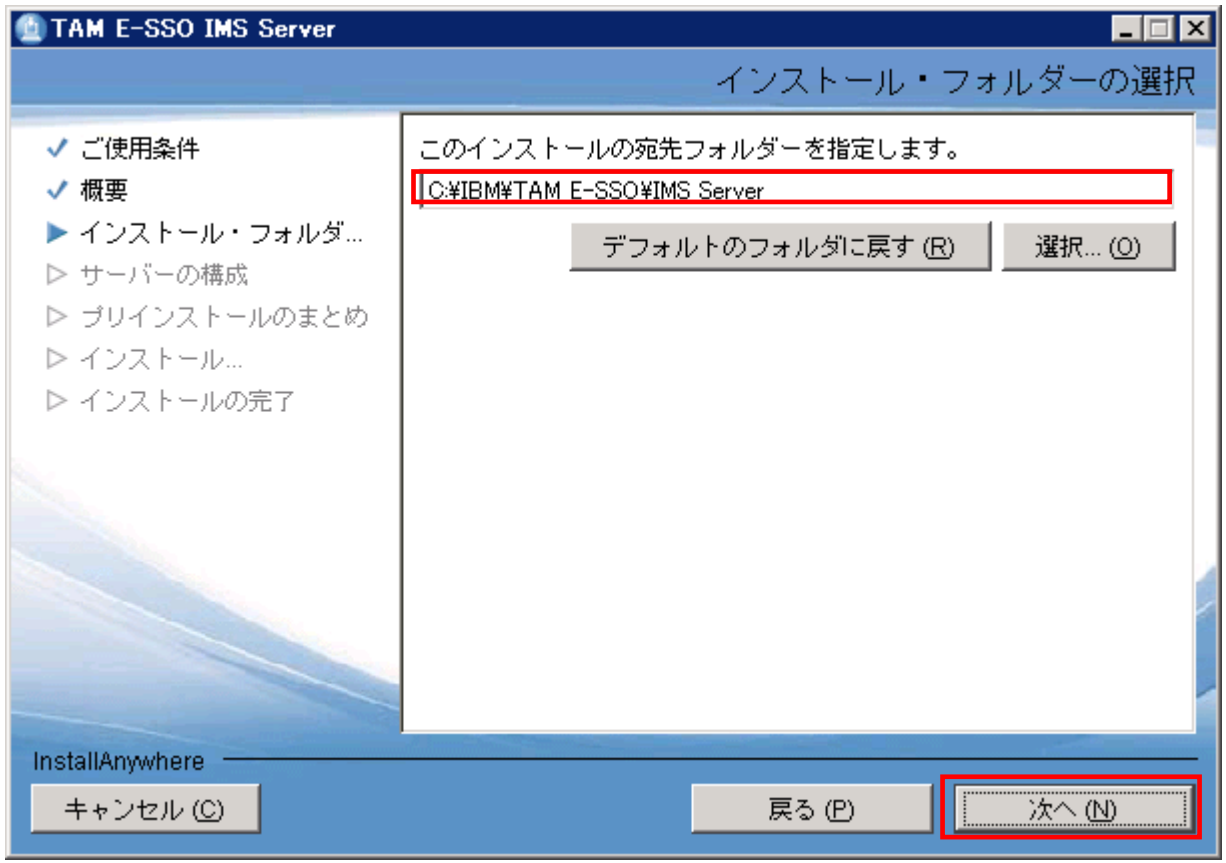
- 以下の画面が表示されます。使用条件を確認し、「次へ」をクリックします。



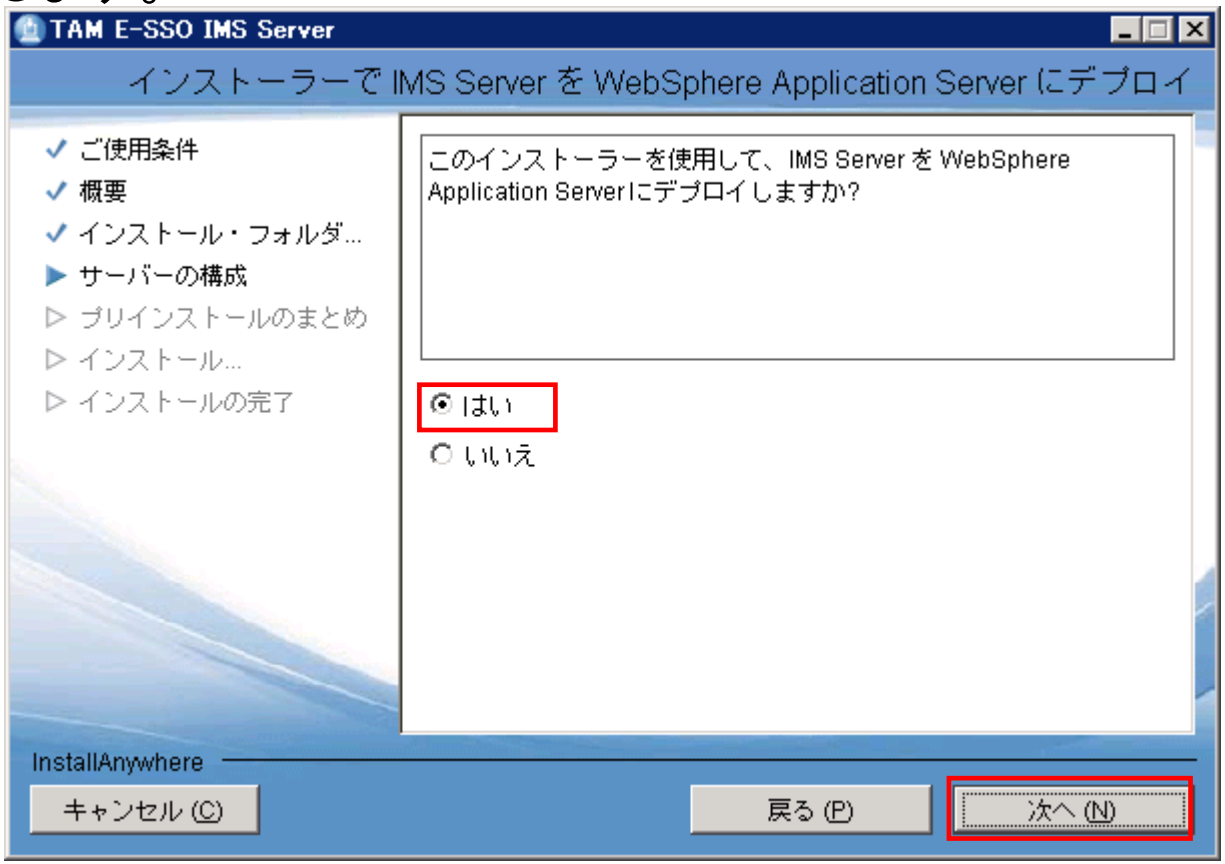
- 以下の画面が表示されます。「次へ」をクリックします。



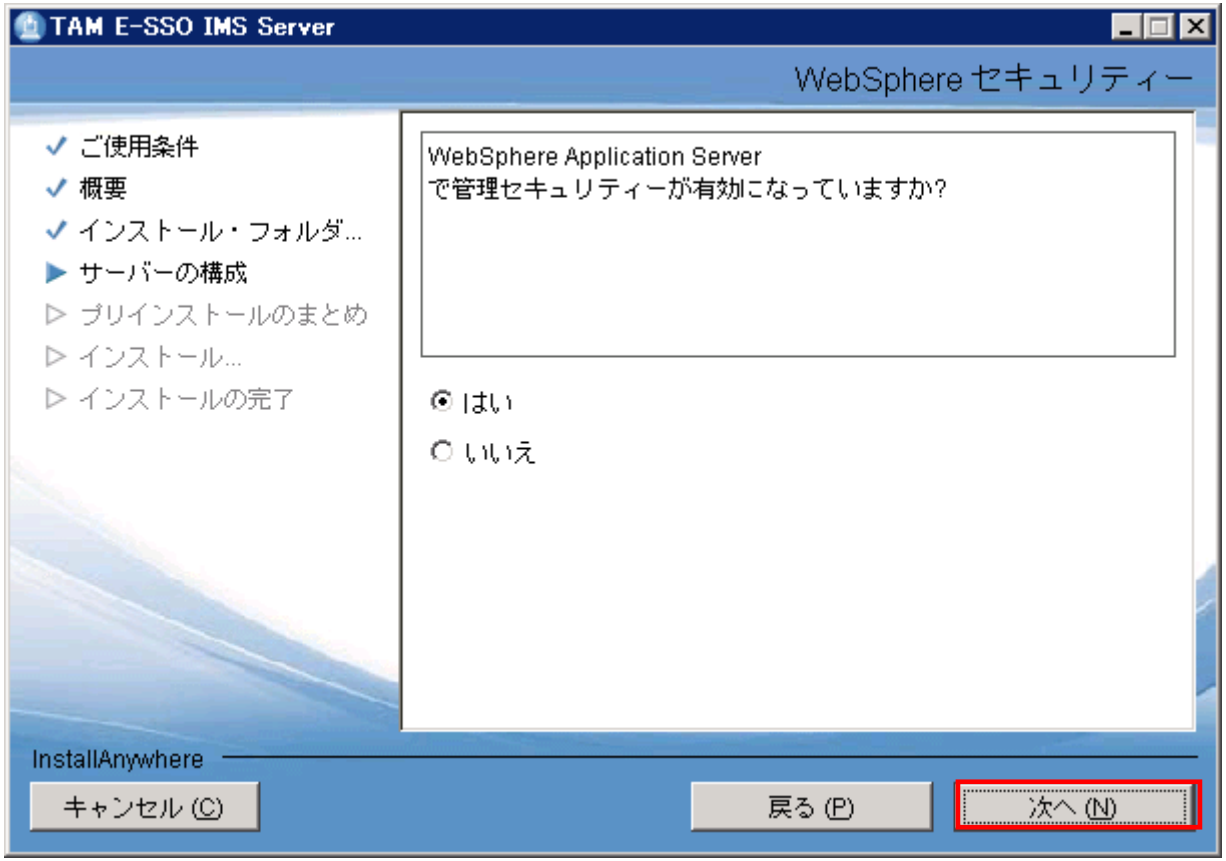
- 以下の画面で導入ディレクトリを確認し、「次へ」進みます。



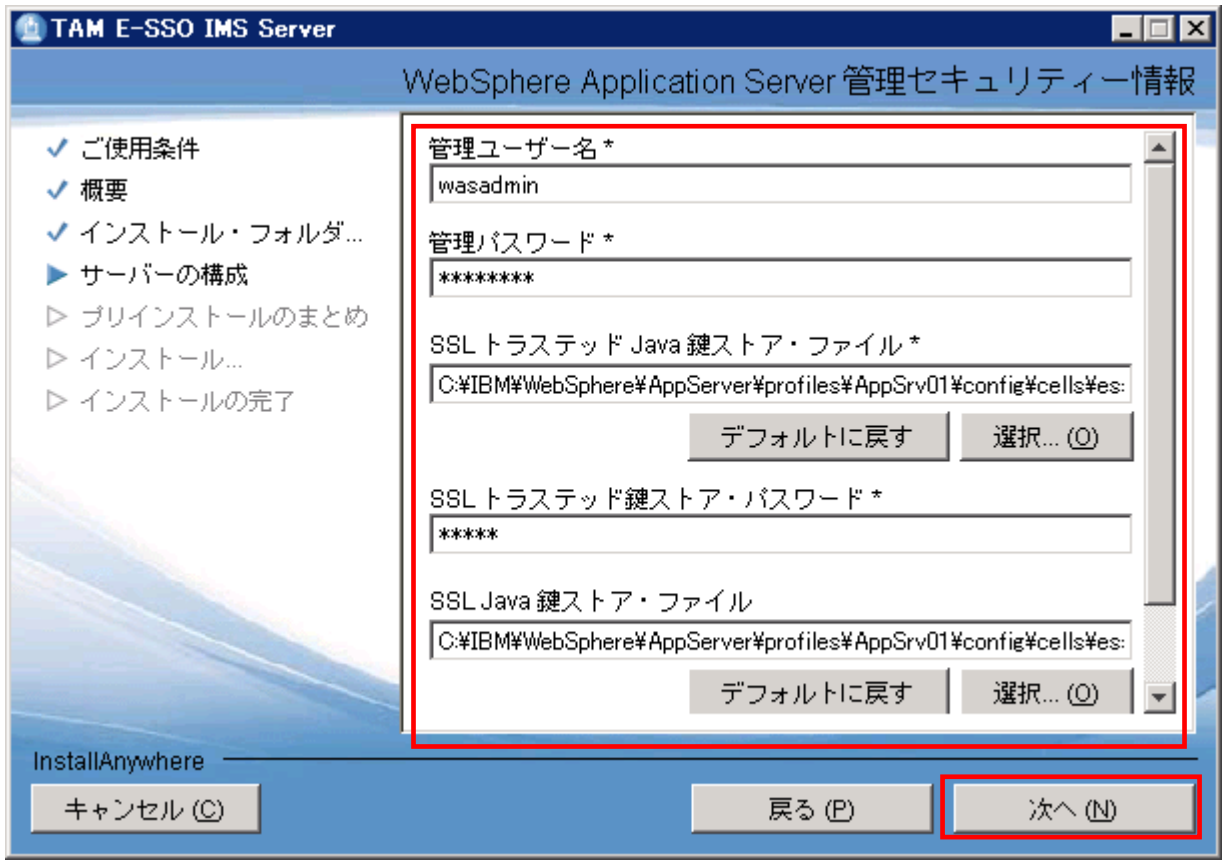
- 以下の画面が表示されます。「デプロイする」を選択し、「次へ」をクリックします。



- 以下の画面が表示されます。「次へ」をクリックします。



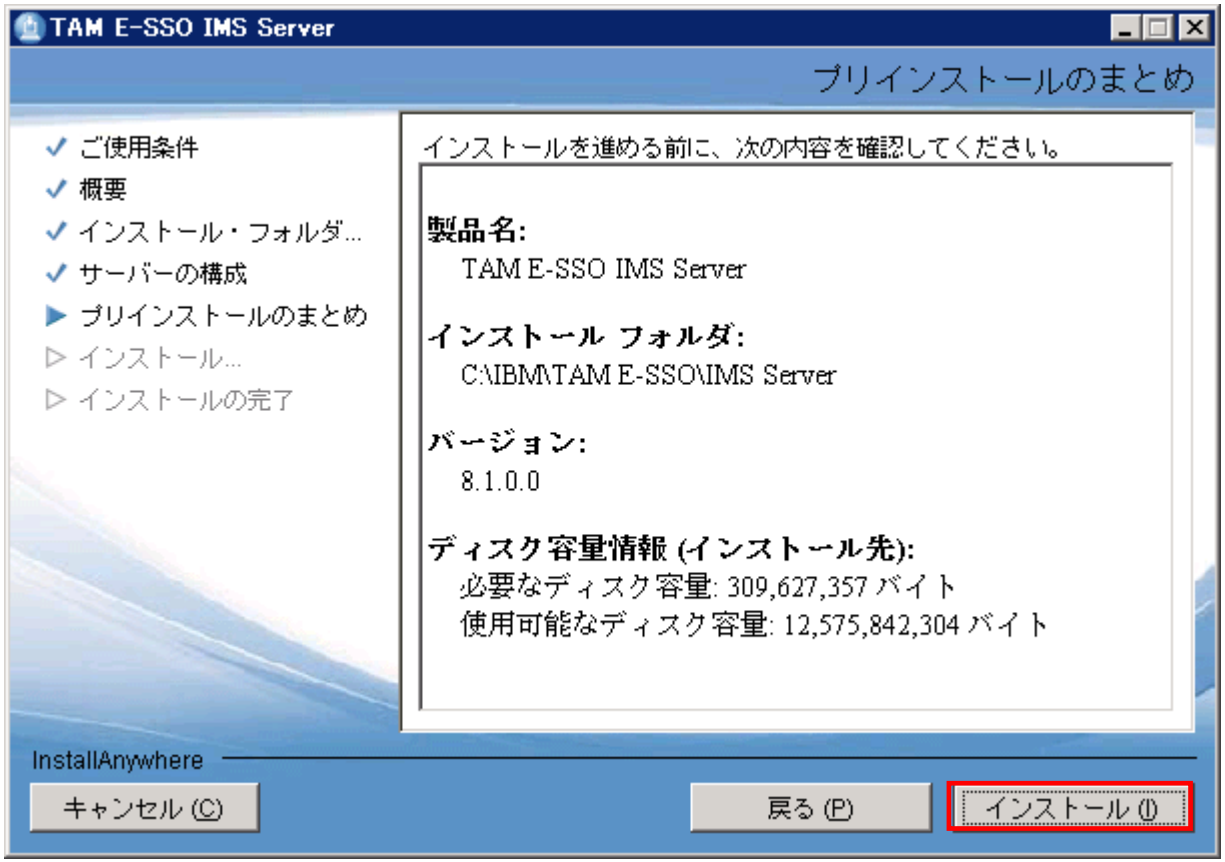
- 以下の画面に示すように次ページ記載の一覧を元に指定してください。



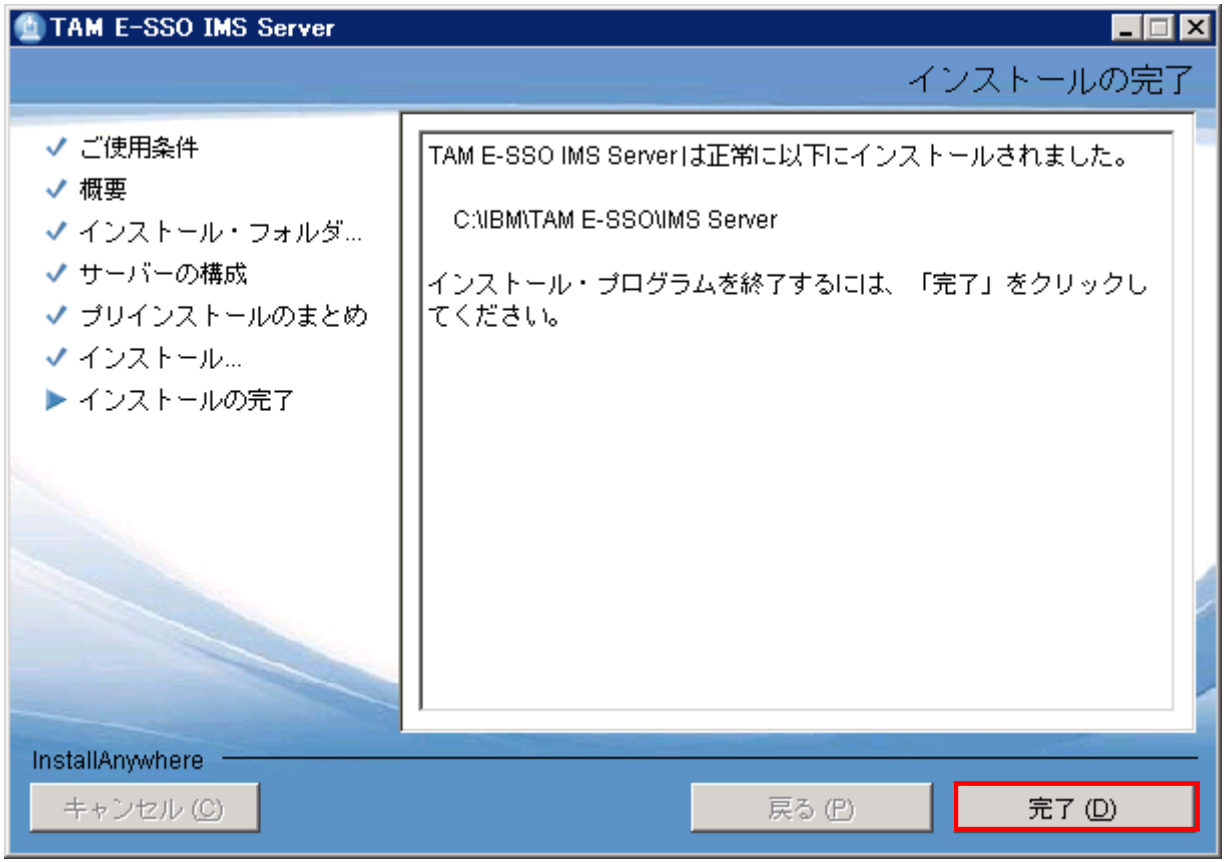
- 管理ユーザー名:
  - wasadmin（WebSphere導入時選択）
- SSLトラステッドJava鍵ストア・ファイル:
  - <WebSphere Application Server installation folder>¥AppServer¥profiles¥<profile name>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥trust.p12
- SSLトラステッド鍵ストア・パスワード:
  - WebAS
- SSL Java鍵ストア・ファイル:
  - <WebSphere Application Server installation folder>¥AppServer¥profiles¥<profile name>¥config¥cells¥<cell name>¥nodes¥<node name>¥key.p12
- SSL鍵ストア・パスワード:
  - WebAS

- 以下の画面が表示されます。SOAPコネクター・ポートを指定し、「次へ」をクリックします。

- 以下の画面でモジュールの導入が開始されます。(IMS Serverの導入には数分～数十分程度かかります。)

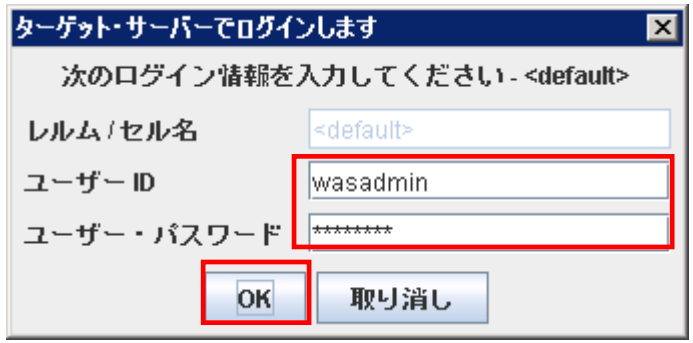


- 以下の画面で示された、「完了」します。



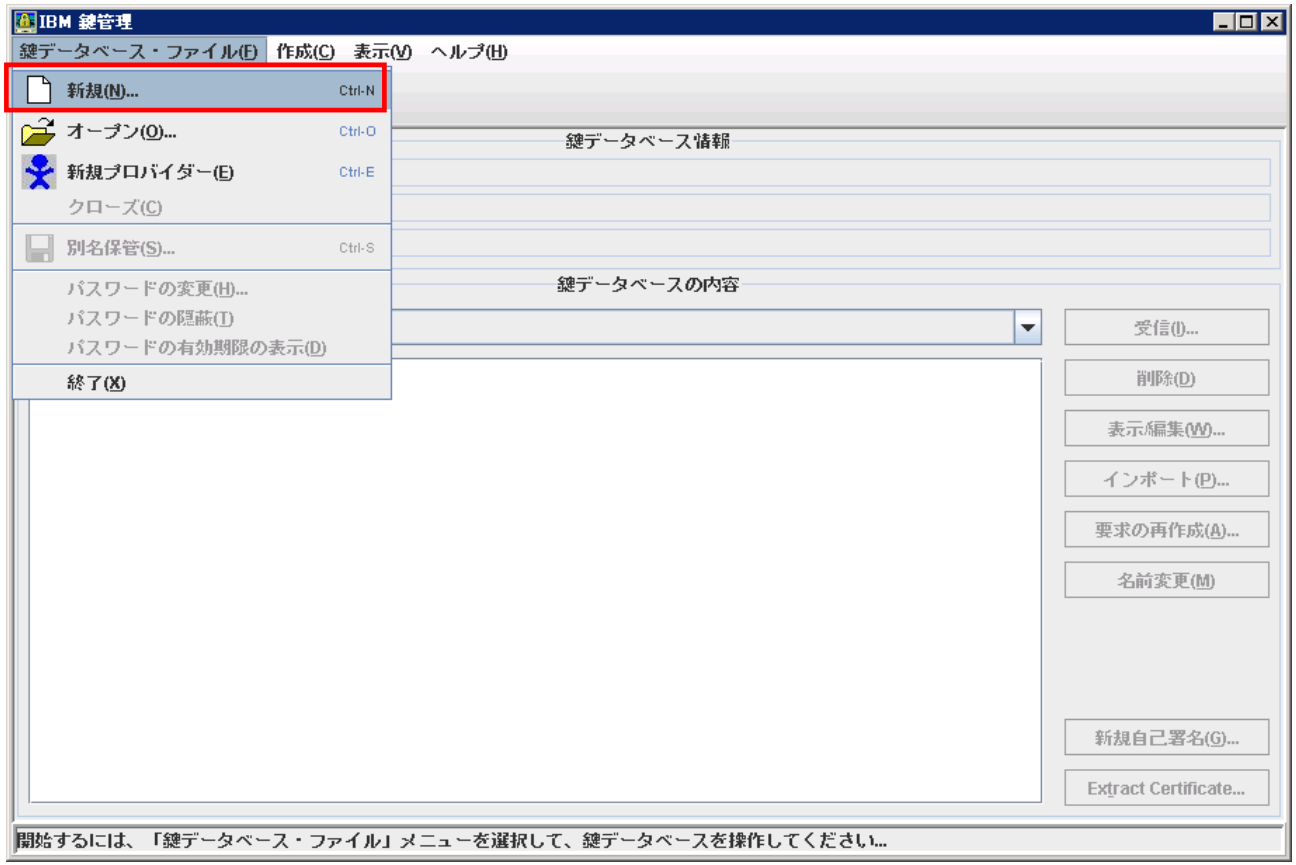
IHS WebSphere連携

- configurewebserver1.batを「<IBM HTTP Server installation directory>¥Plugins¥bin」から「<WebSphere Application Server installation directory>¥bin」へコピーし実行し、以下画面でWebSphere管理ユーザ情報を入力する。

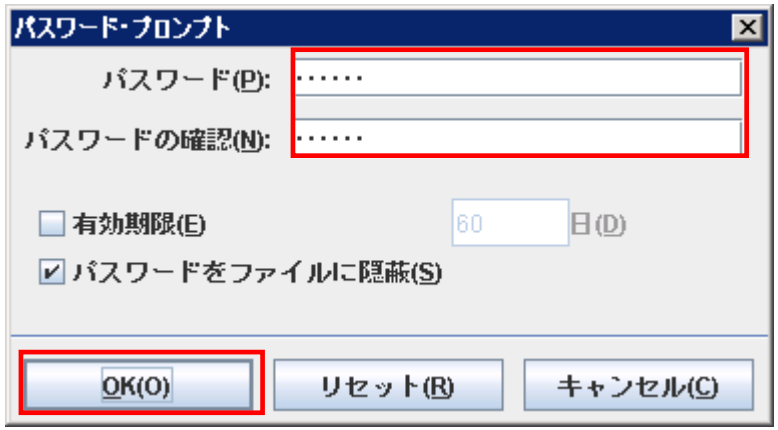


SSL自己証明書準備

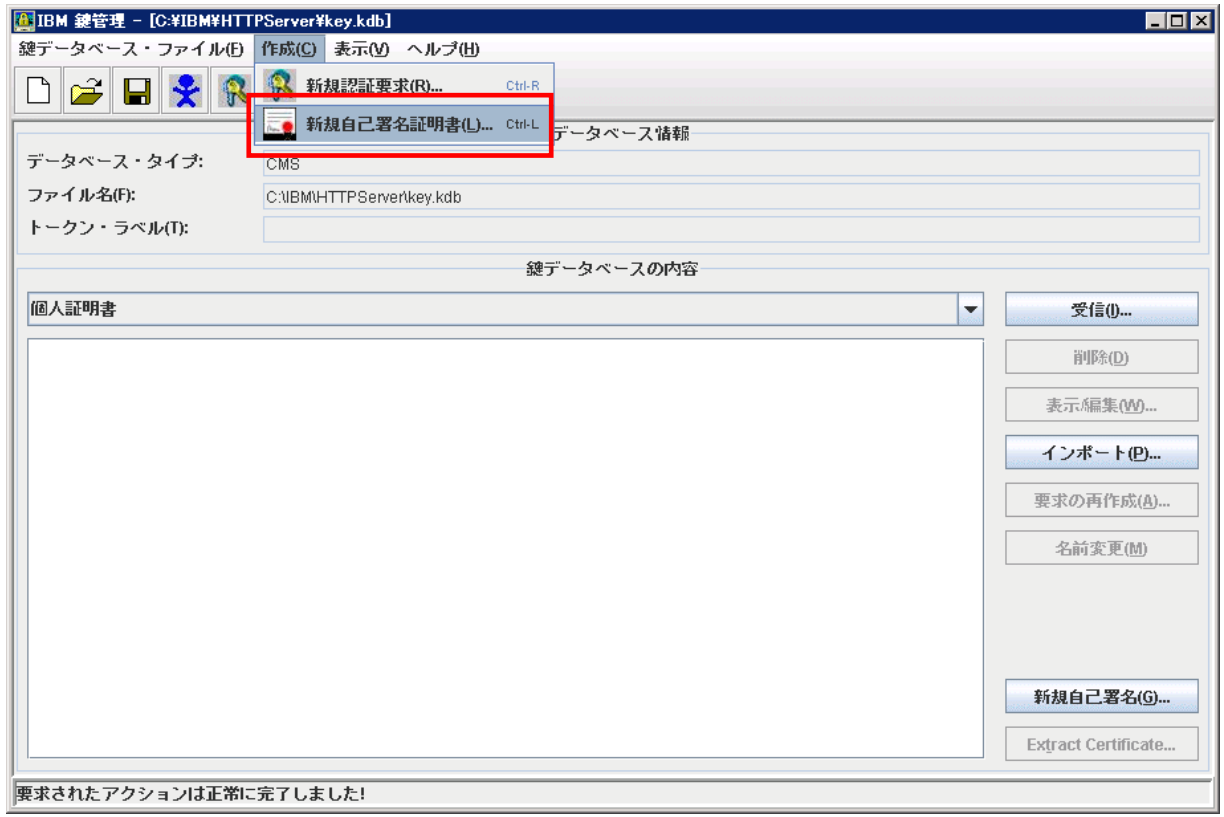
- SSL鍵ユーティリティを使用し、証明書を作成します。



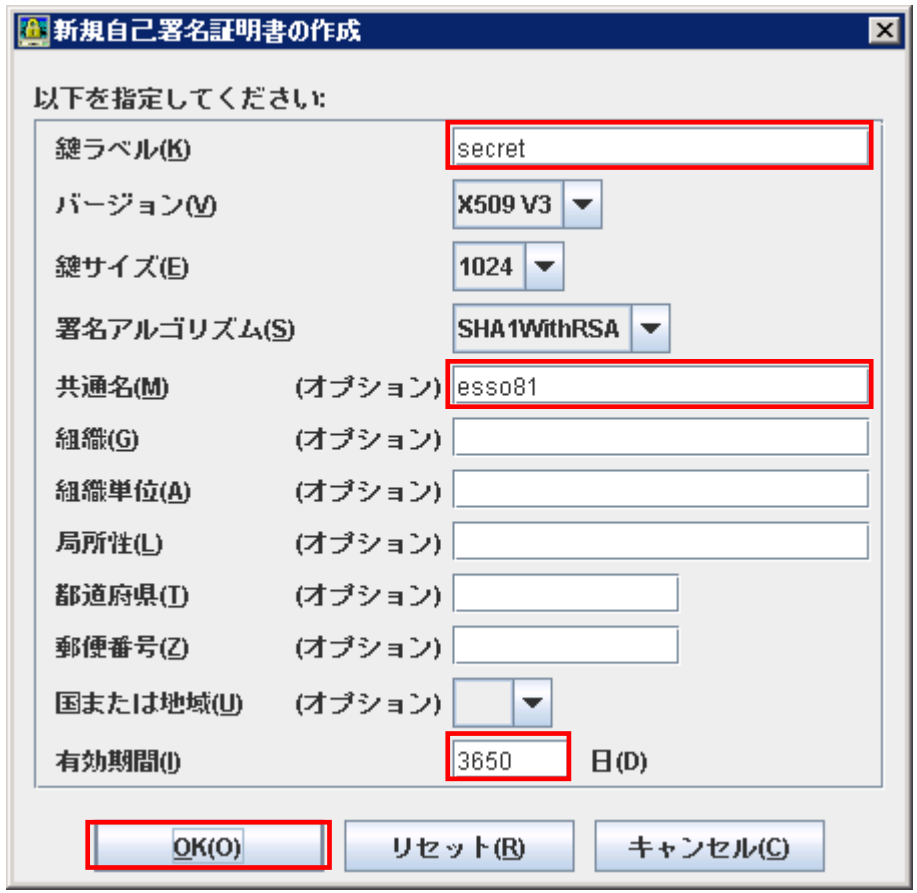
- CMS形式で、「パスワードをファイルに隠蔽」を選択し保存します。



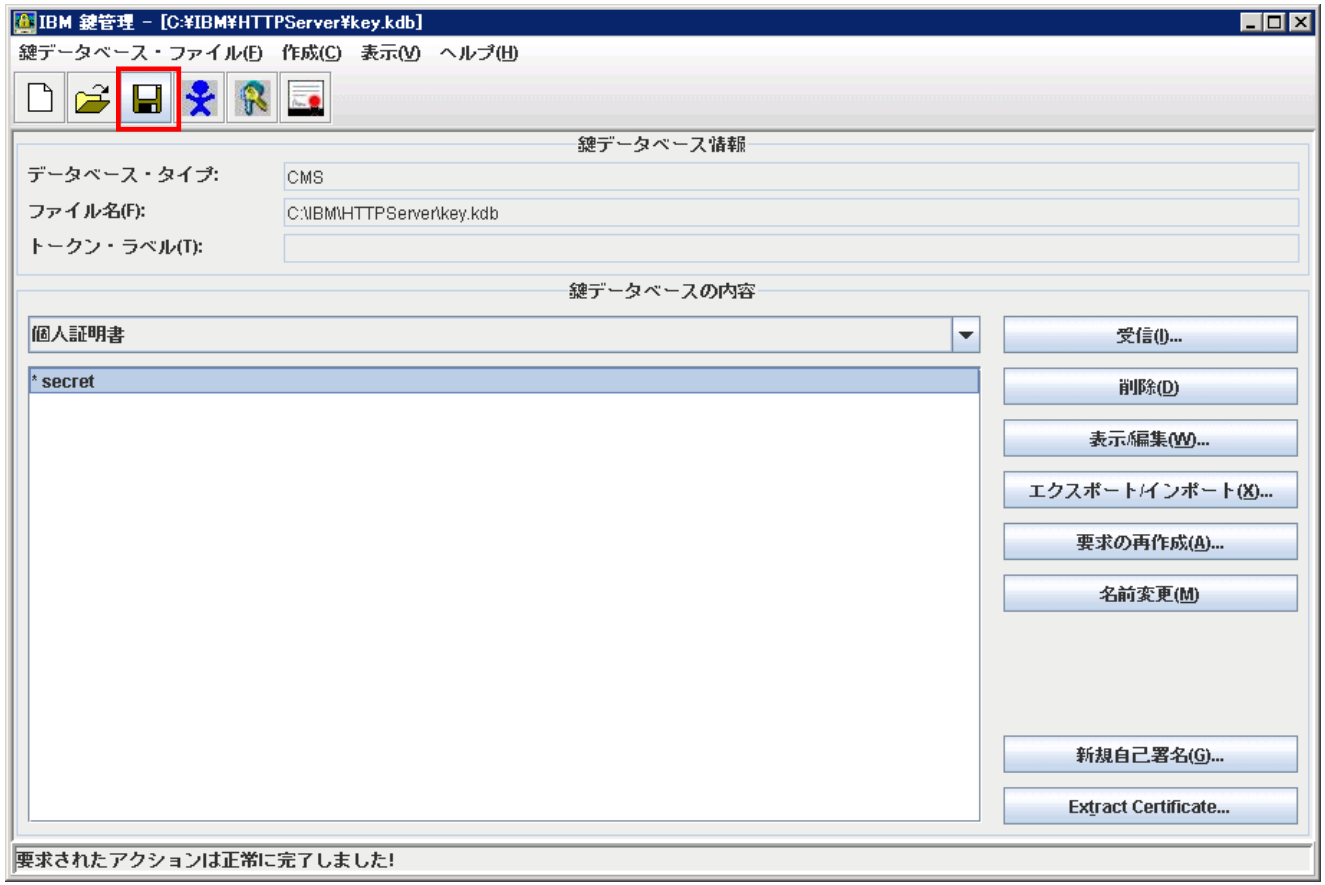
- 「作成」-「新規自己証明書」を選択し、自己証明書を作成します。



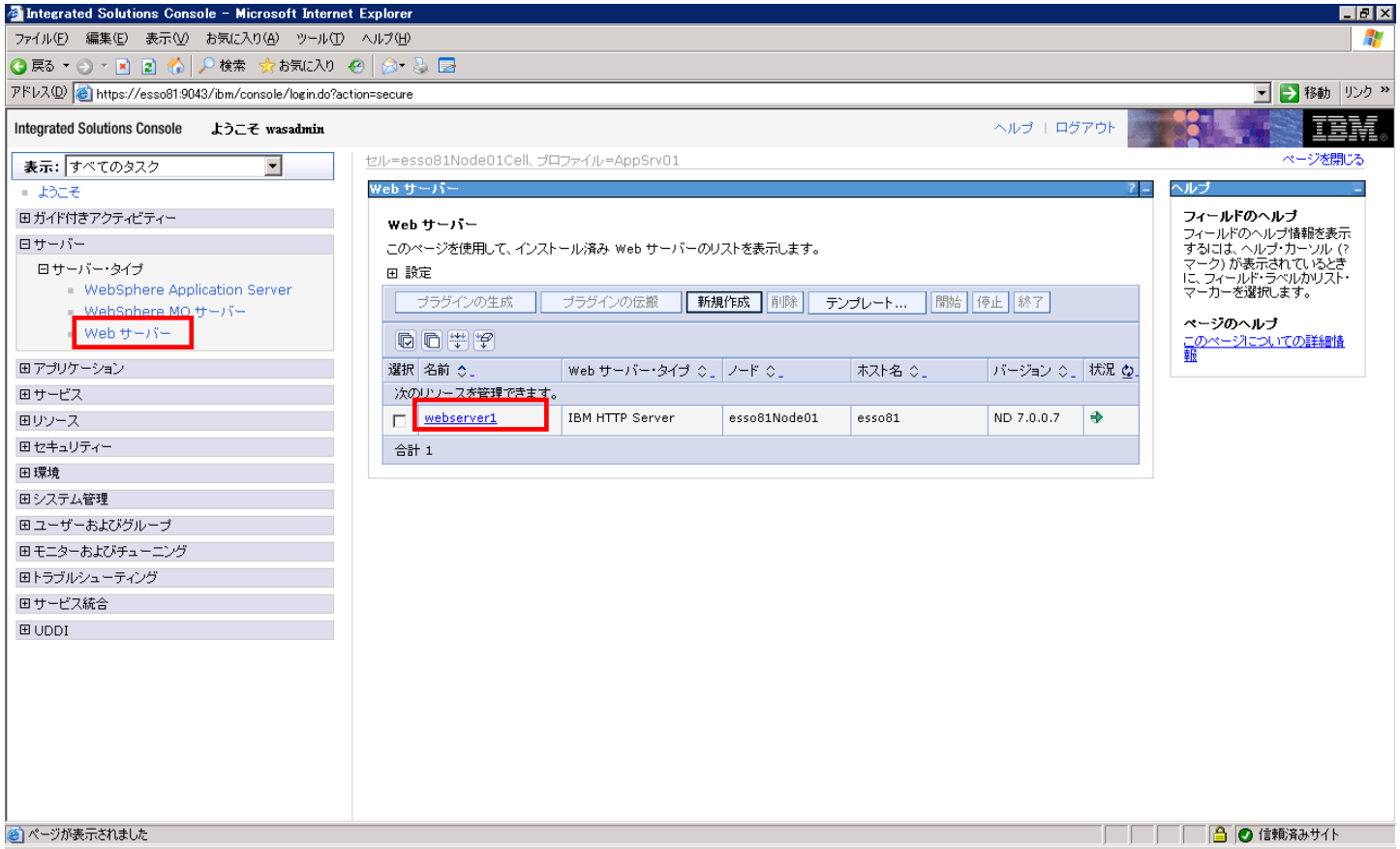
- 鍵ラベル、共通名(ホスト名)、有効期限は必ず入力し、証明書を作成します。



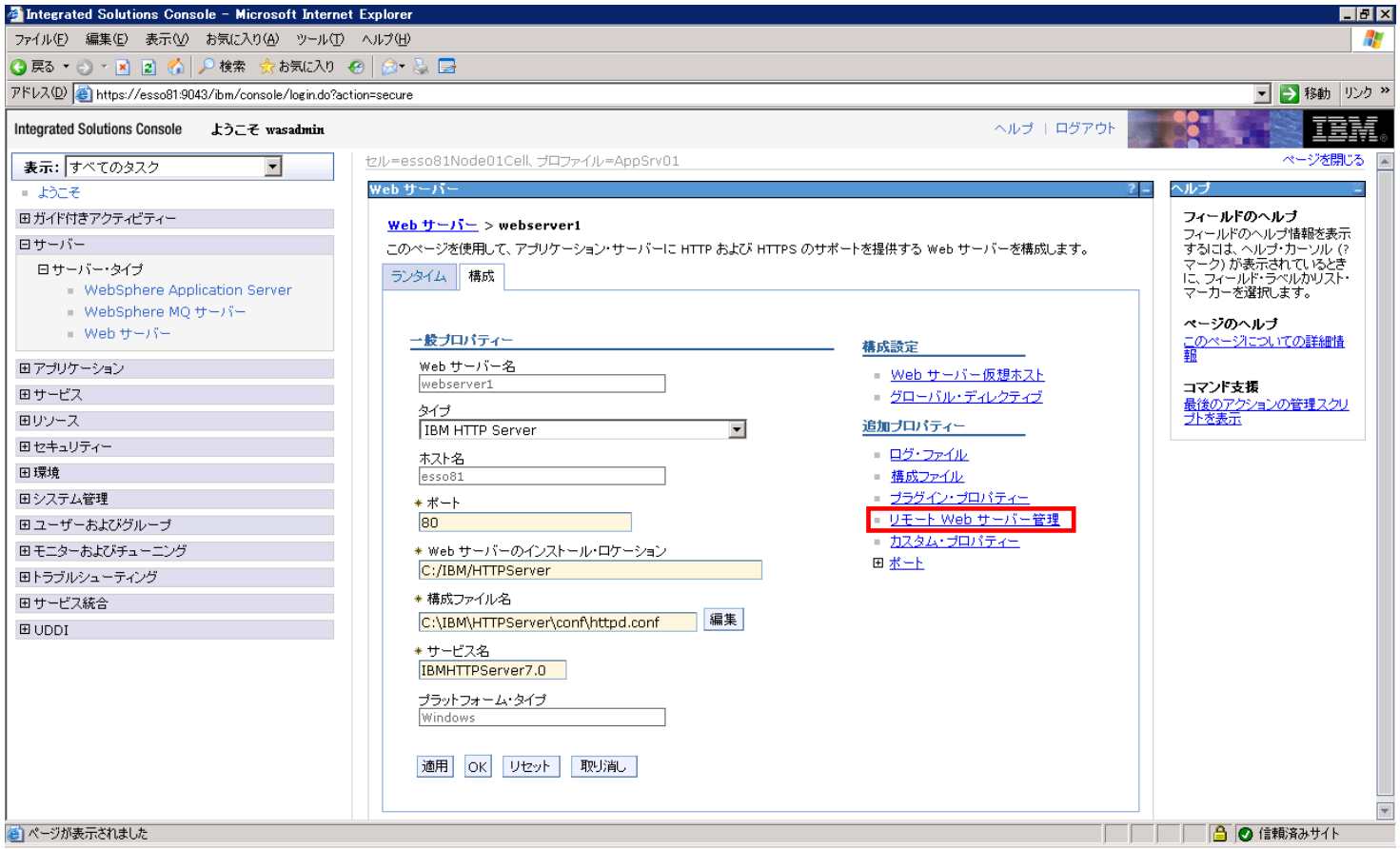
- 作成した鍵を上書き保管します。



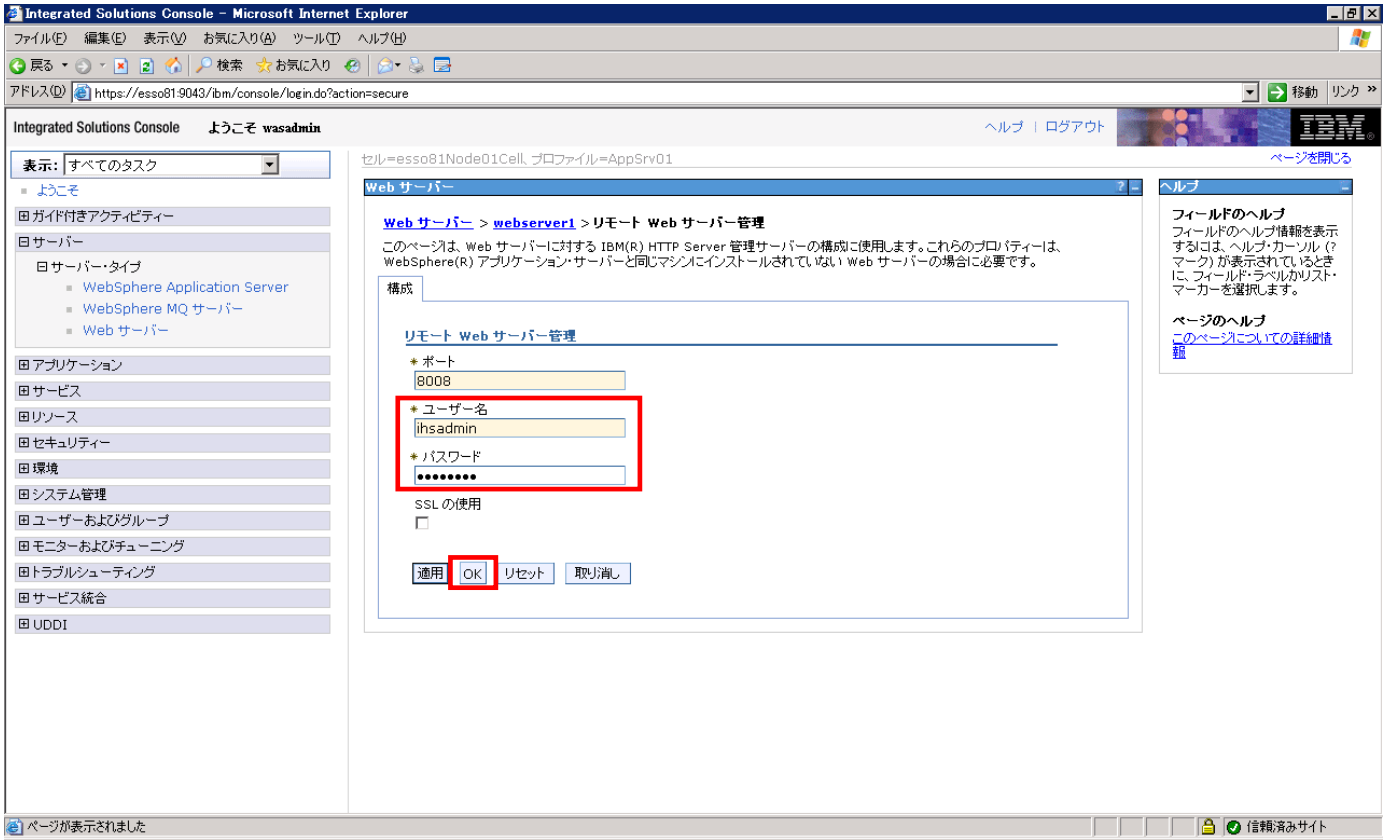
- WebSphere管理コンソールから、「サーバー」-「サーバー・タイプ」-「Web サーバー」を選択します。



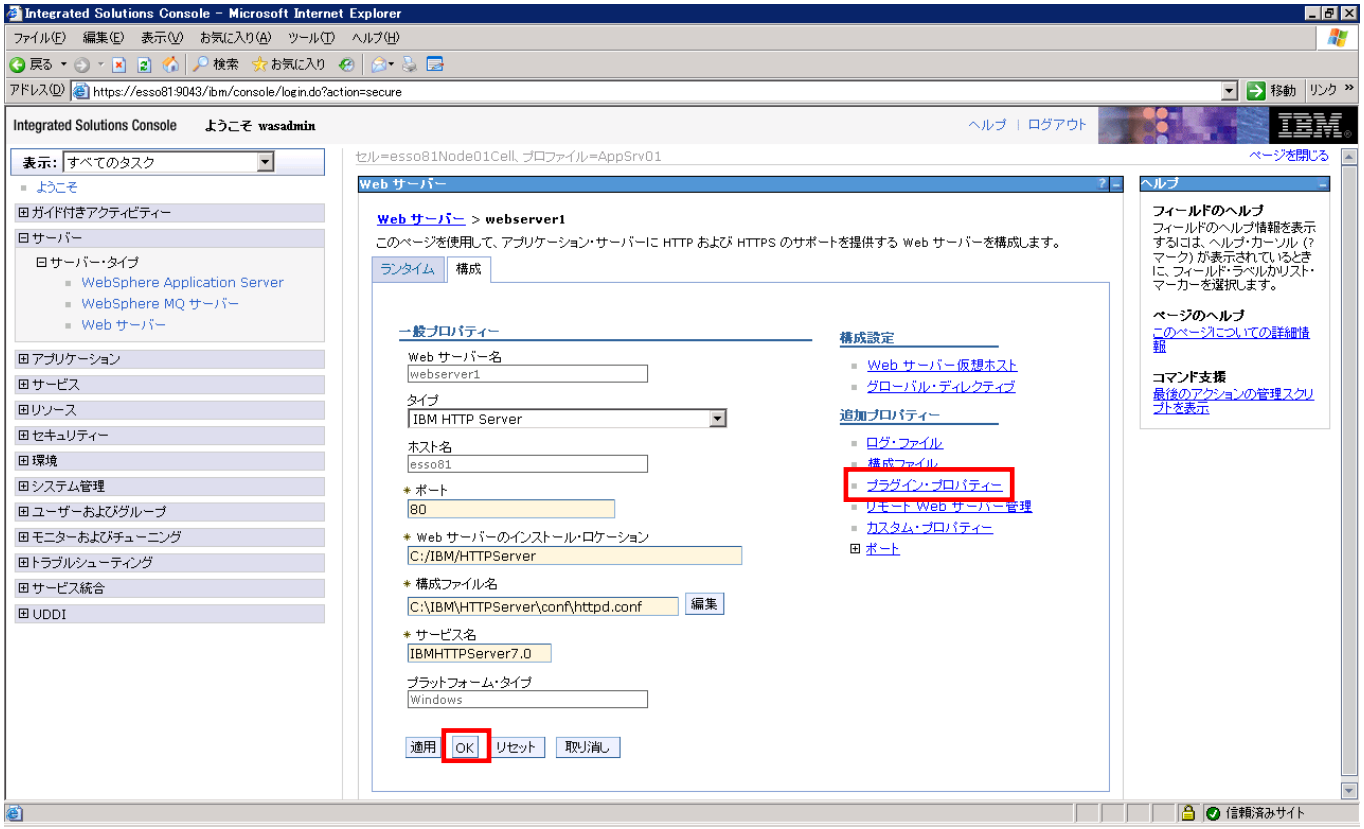
- 「リモートWebサーバー管理」を選択します。



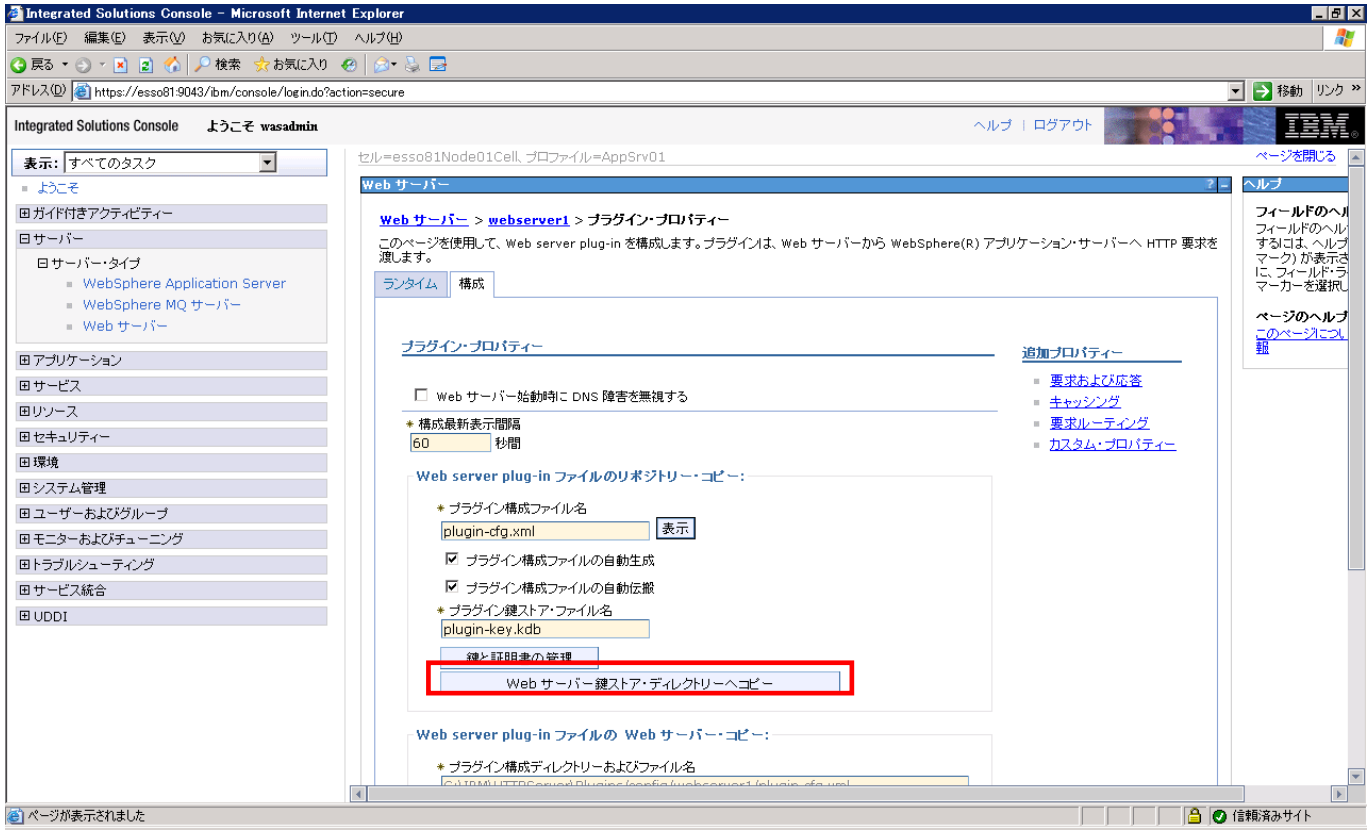
- IHS導入時に指定した管理ユーザー名を指定し、「OK」を選択します。
  ※IHS、WAS別サーバである場合は、SSLを使用する事をお勧めします。



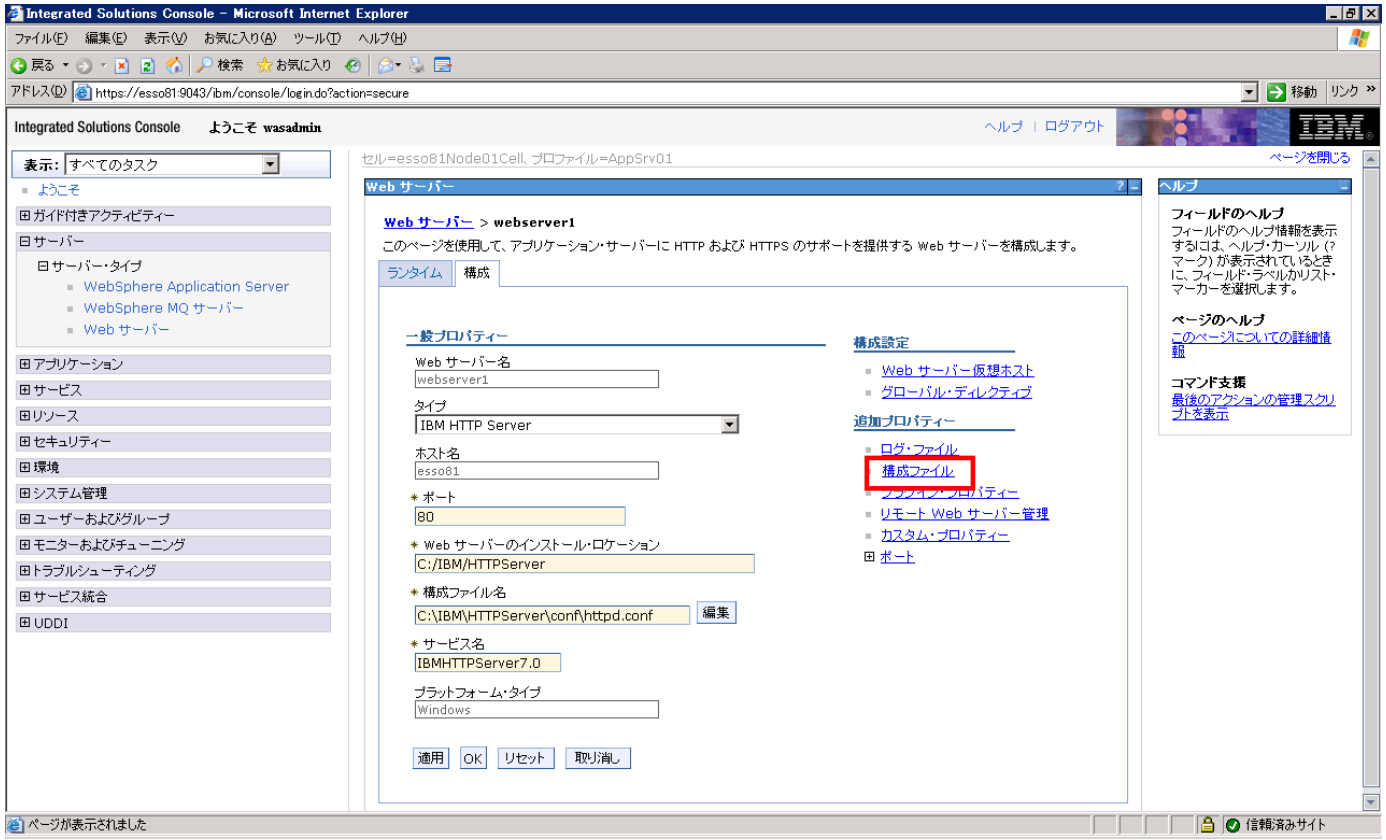
- 「プラグイン・プロパティー」を選択します。



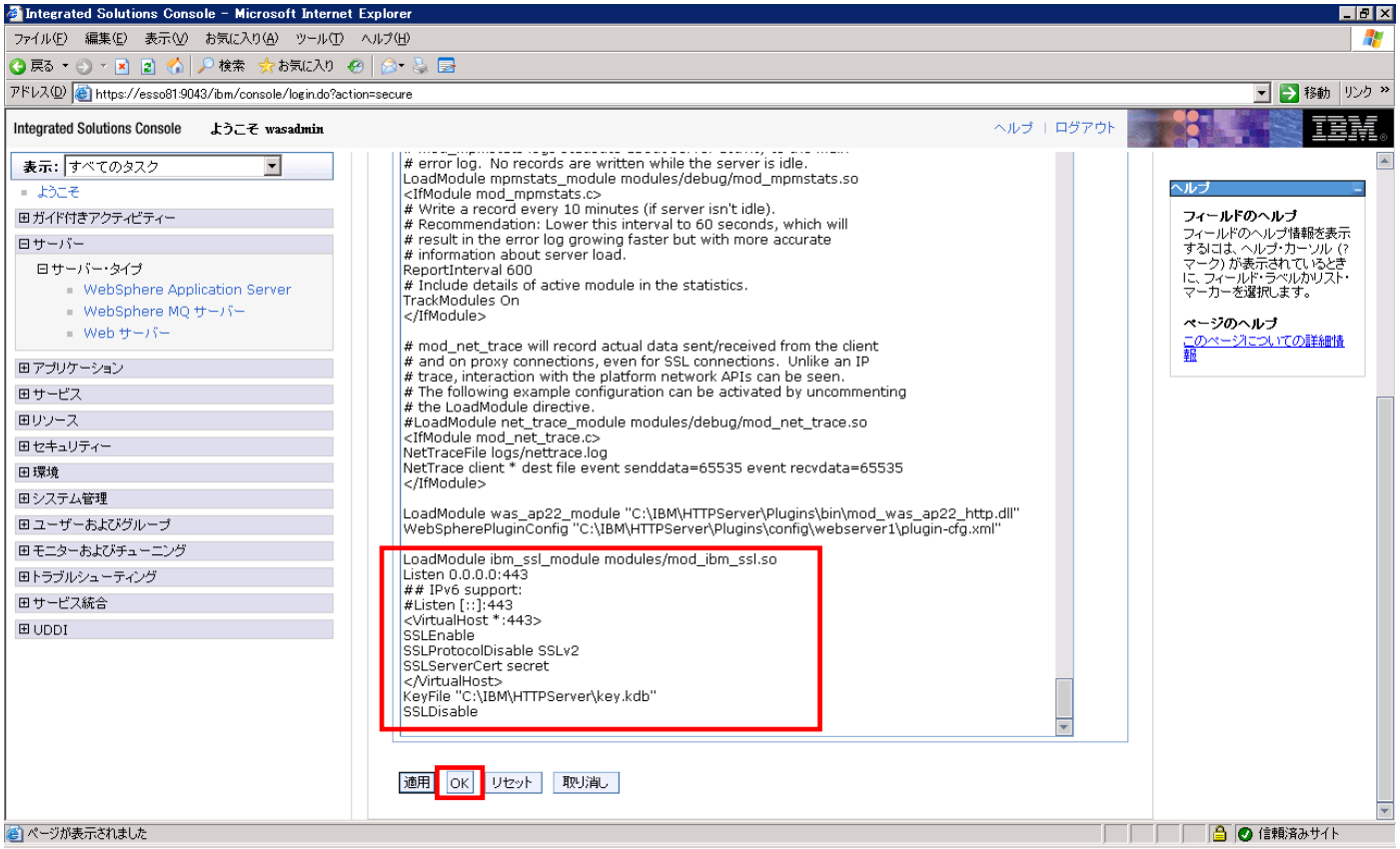
- 「Webサーバー鍵ストア・ディレクトリーへコピー」を選択します。



- 「構成ファイル」を選択します。



- 以下画面で、次ページの内容を追記します。

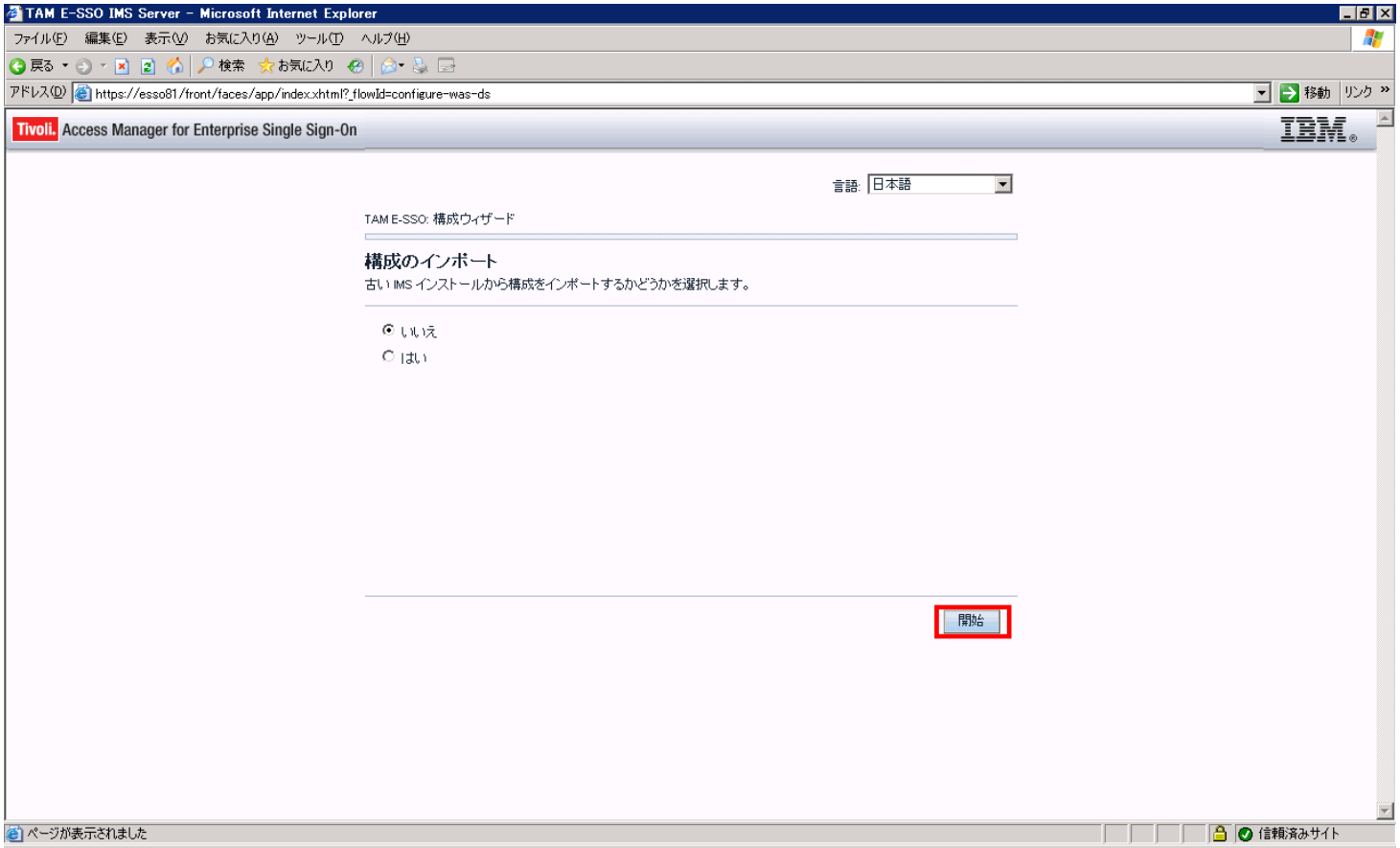


```
LoadModule ibm_ssl_module modules/mod_ibm_ssl.so
Listen 0.0.0.0:443
## IPv6 support:
#Listen [::]:443
<VirtualHost *:443>
SSLEnable
SSLProtocolDisable SSLv2
SSLServerCert <alias of the IBM HTTP Server SSL certificate>
</VirtualHost>
KeyFile "<absolute path of the plugin-key.kdb file>"
SSLDisable
```

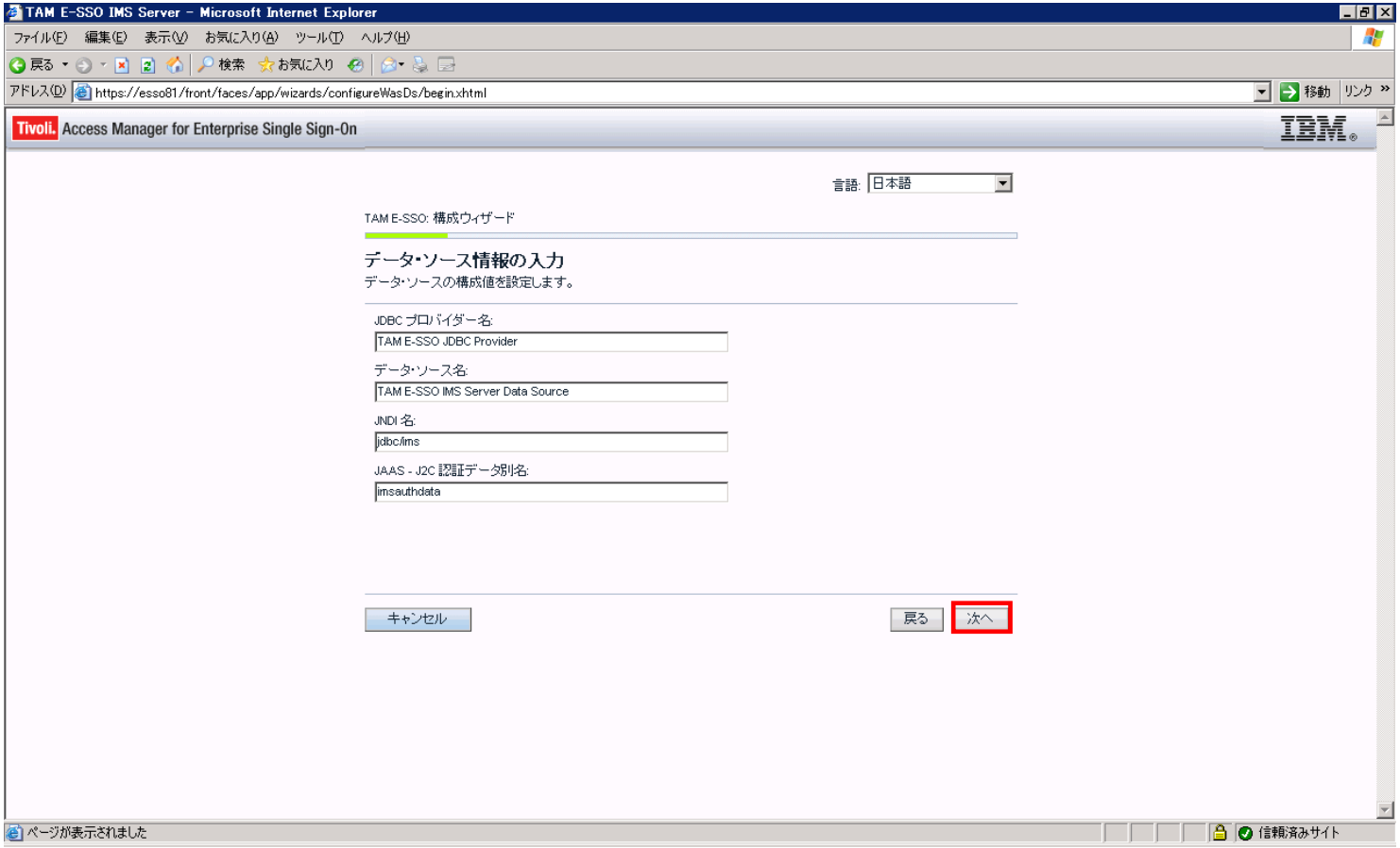
- <alias of the IBM HTTP Server SSL certificate>:
  - 鍵作成時のラベル名
- <absolute path of the plugin-key.kdb file>:
  - 作成した鍵のファイル

IMS Server Configration

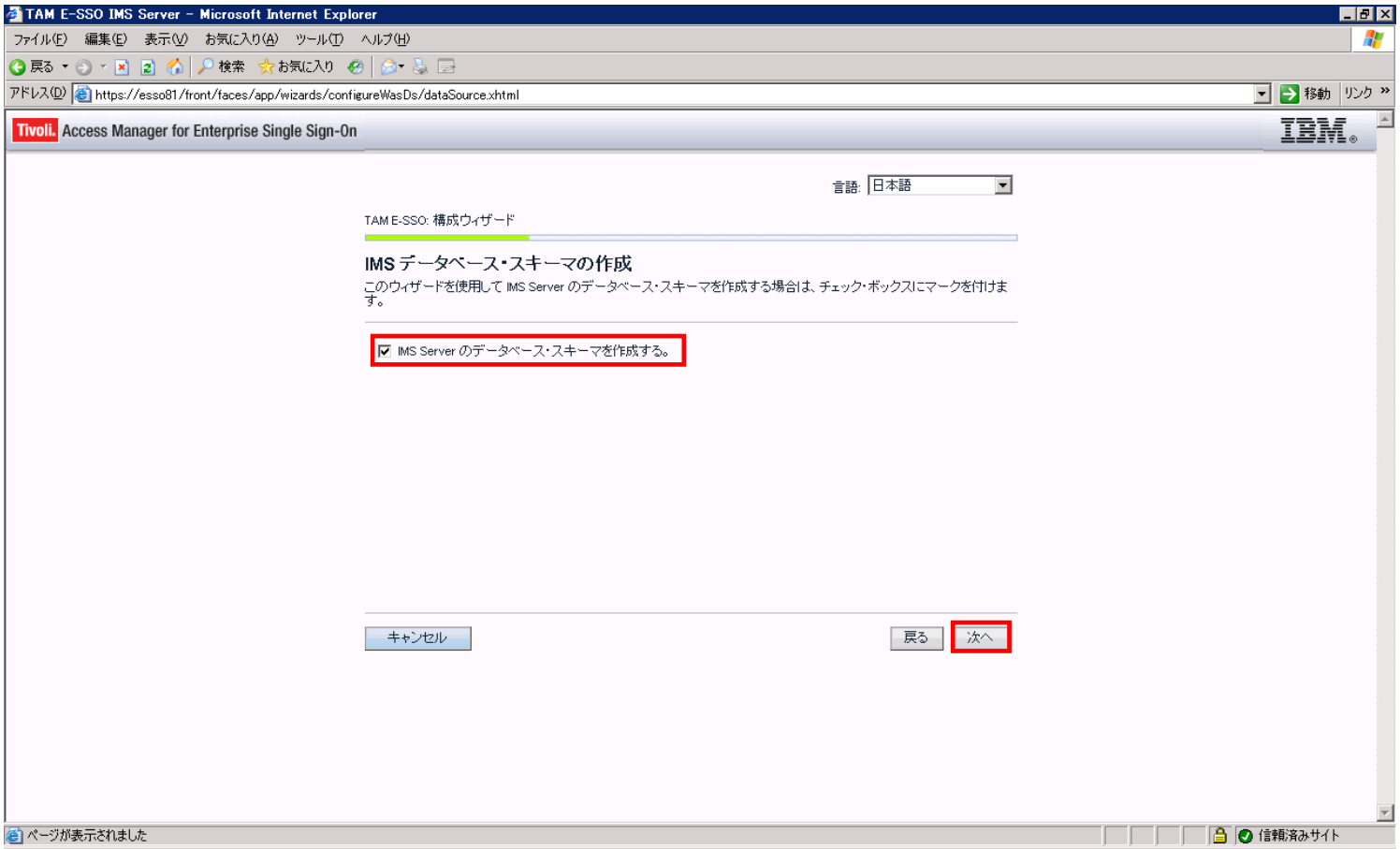
- https://<imsserver>/ims/にアクセスし、構成ウィザードを起動。



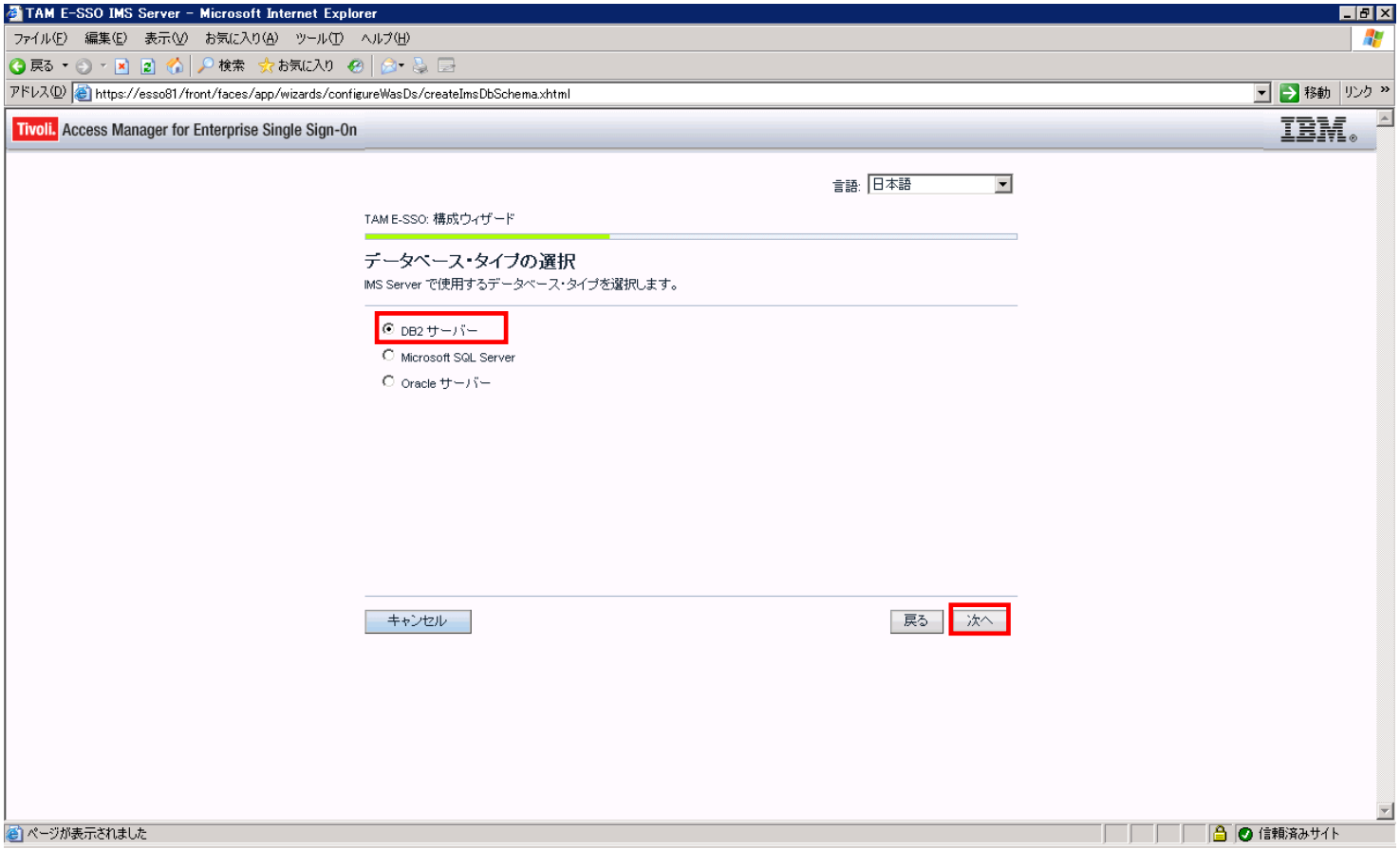
- 以下の画面でデータ･ソース情報を入力し、「次へ」進みます。



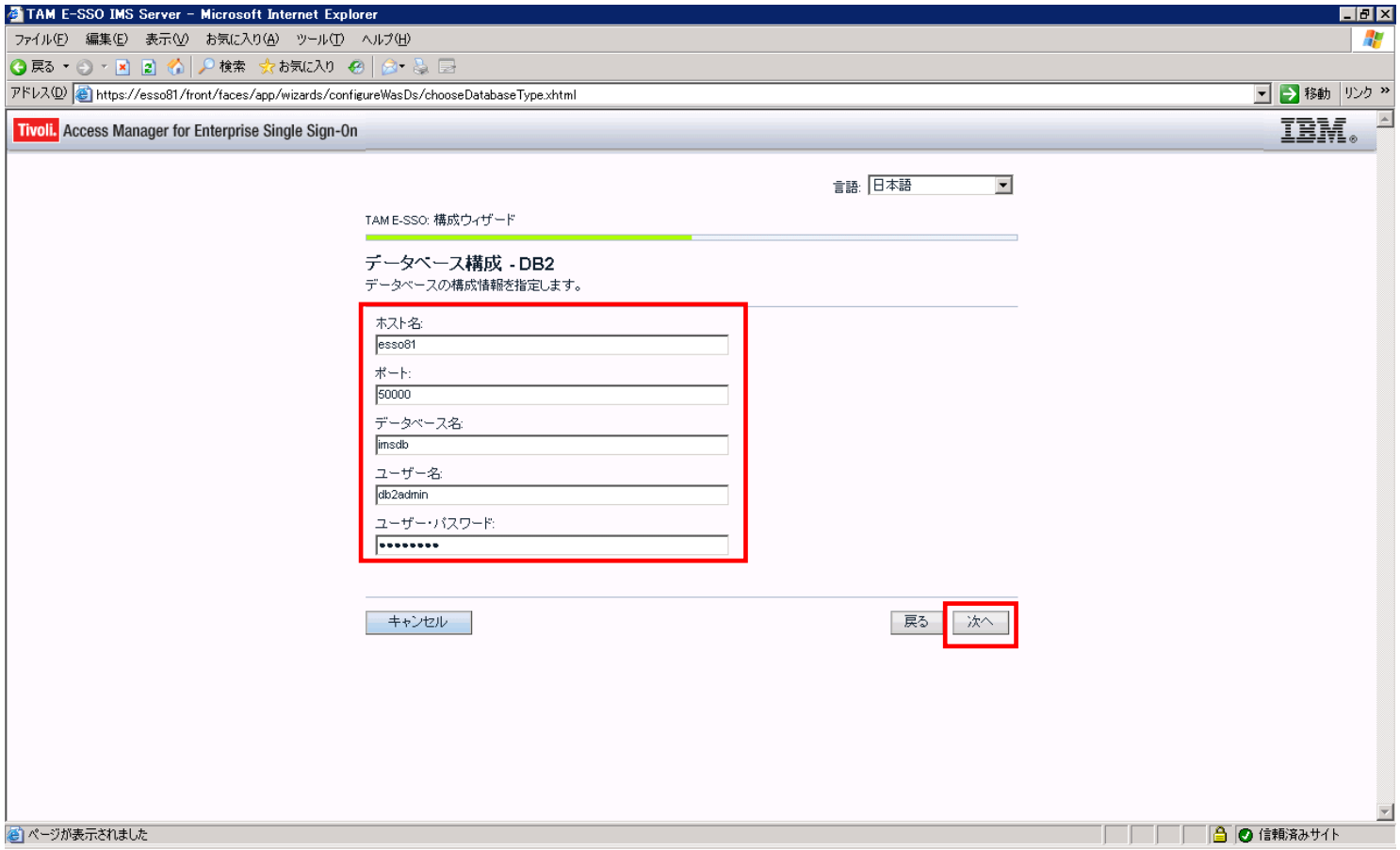
- 以下の画面でIMSデータベーススキーマの作成を指定し、「次へ」進みます。



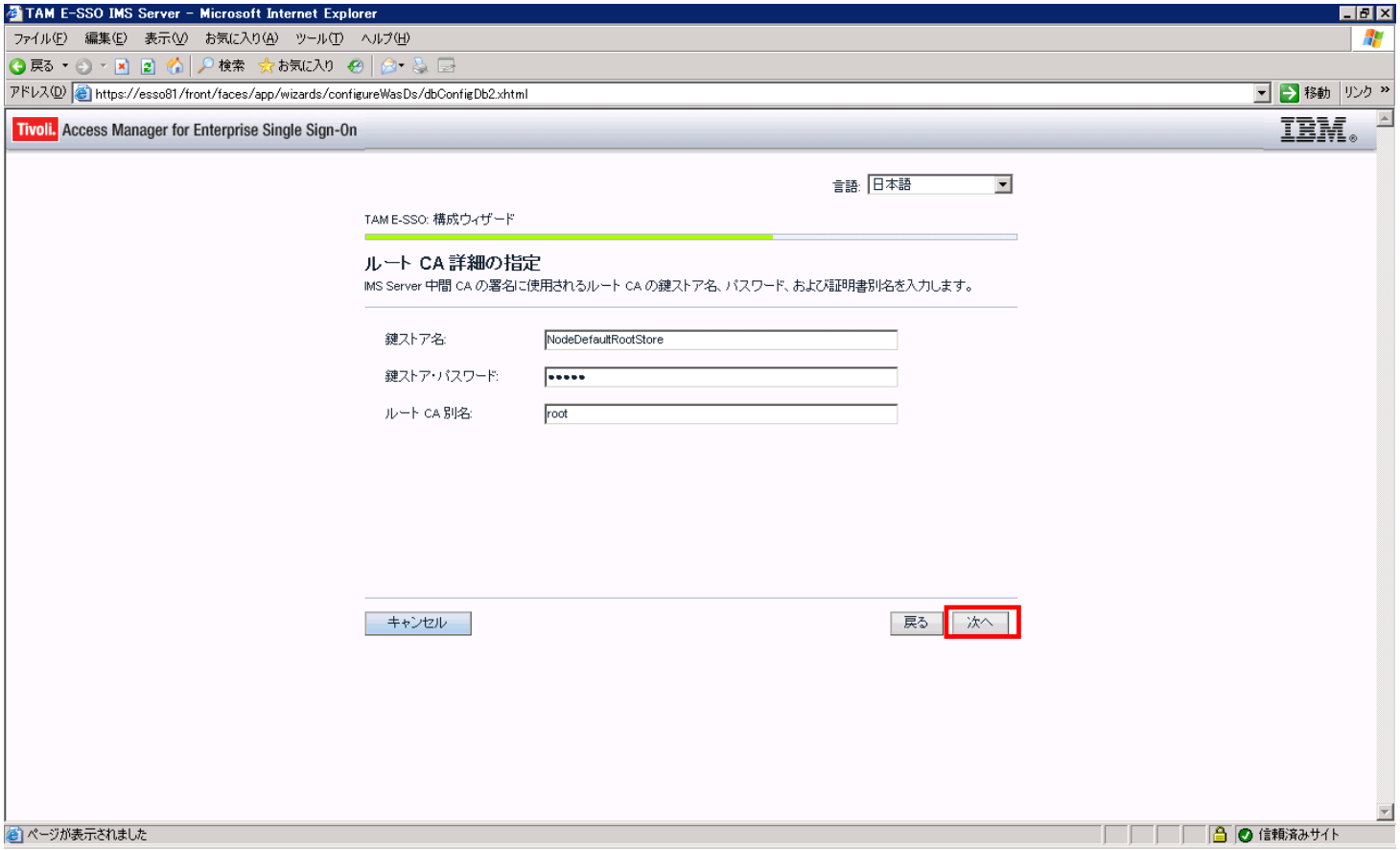
- 以下の画面でDB2サーバを選択し、「次へ」進みます。



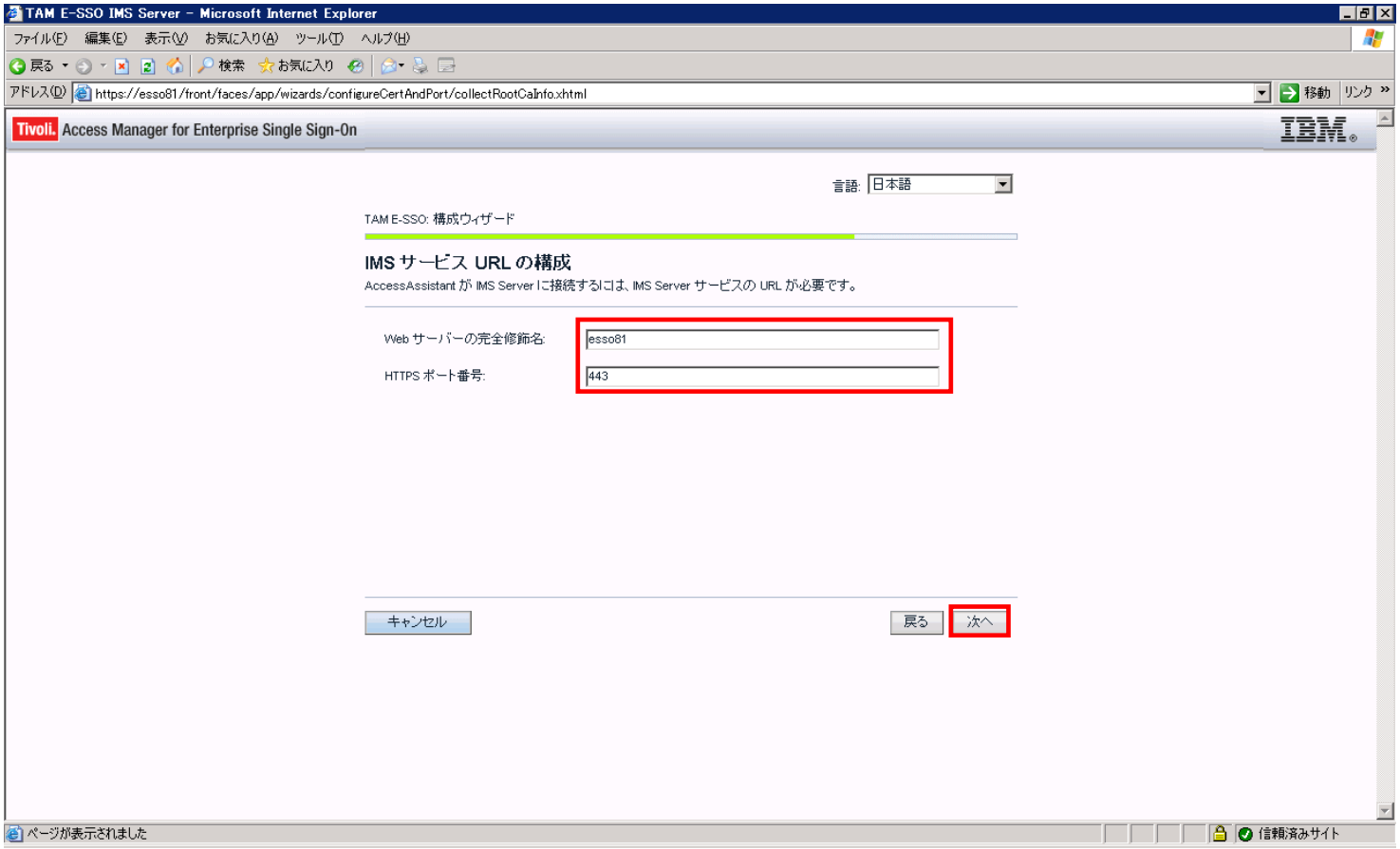
- 以下の画面で事前に作成した「imsdb」を指定し、「次へ」進みます。



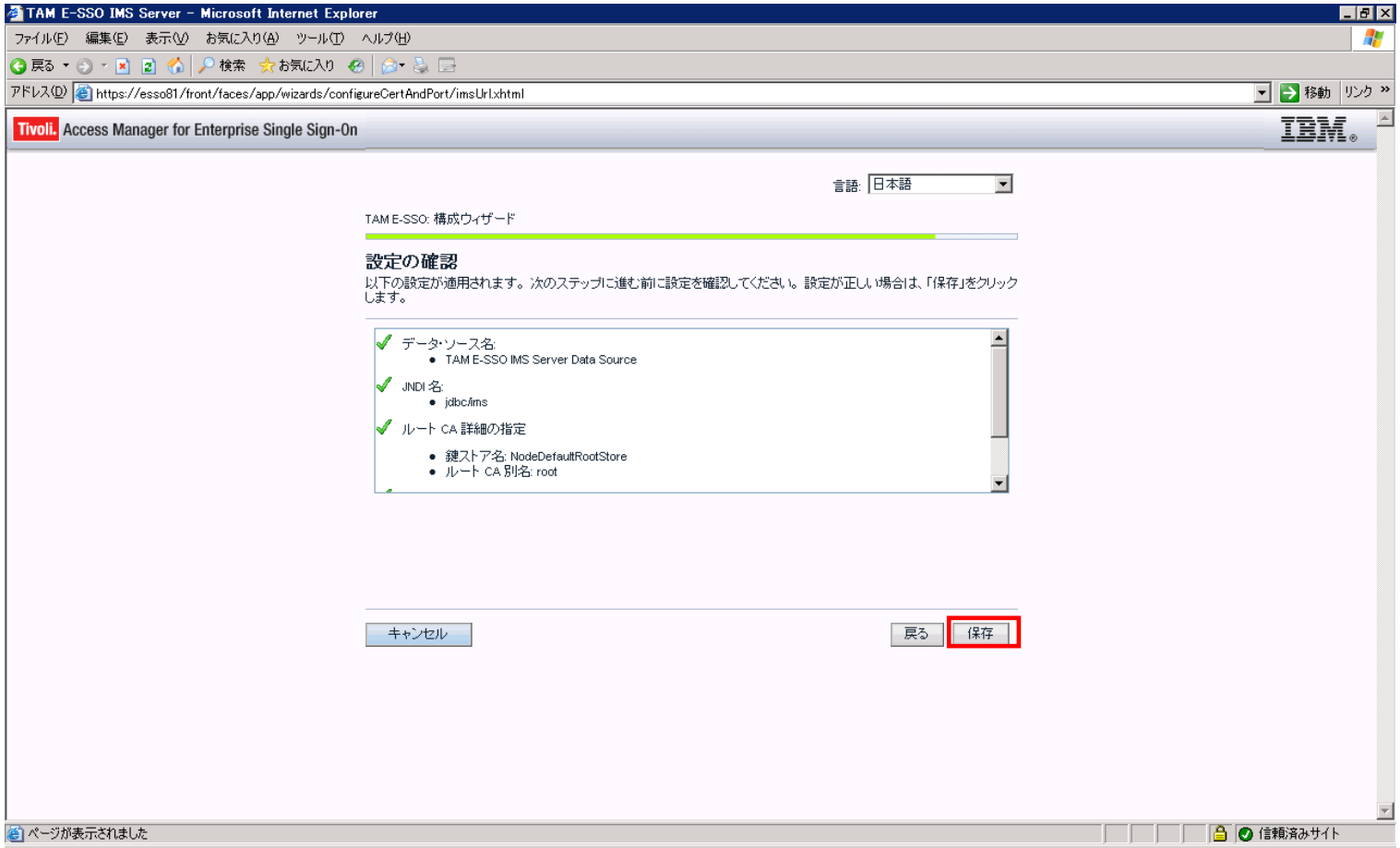
- 以下の画面でルートCA詳細を指定し、「次へ」進みます。



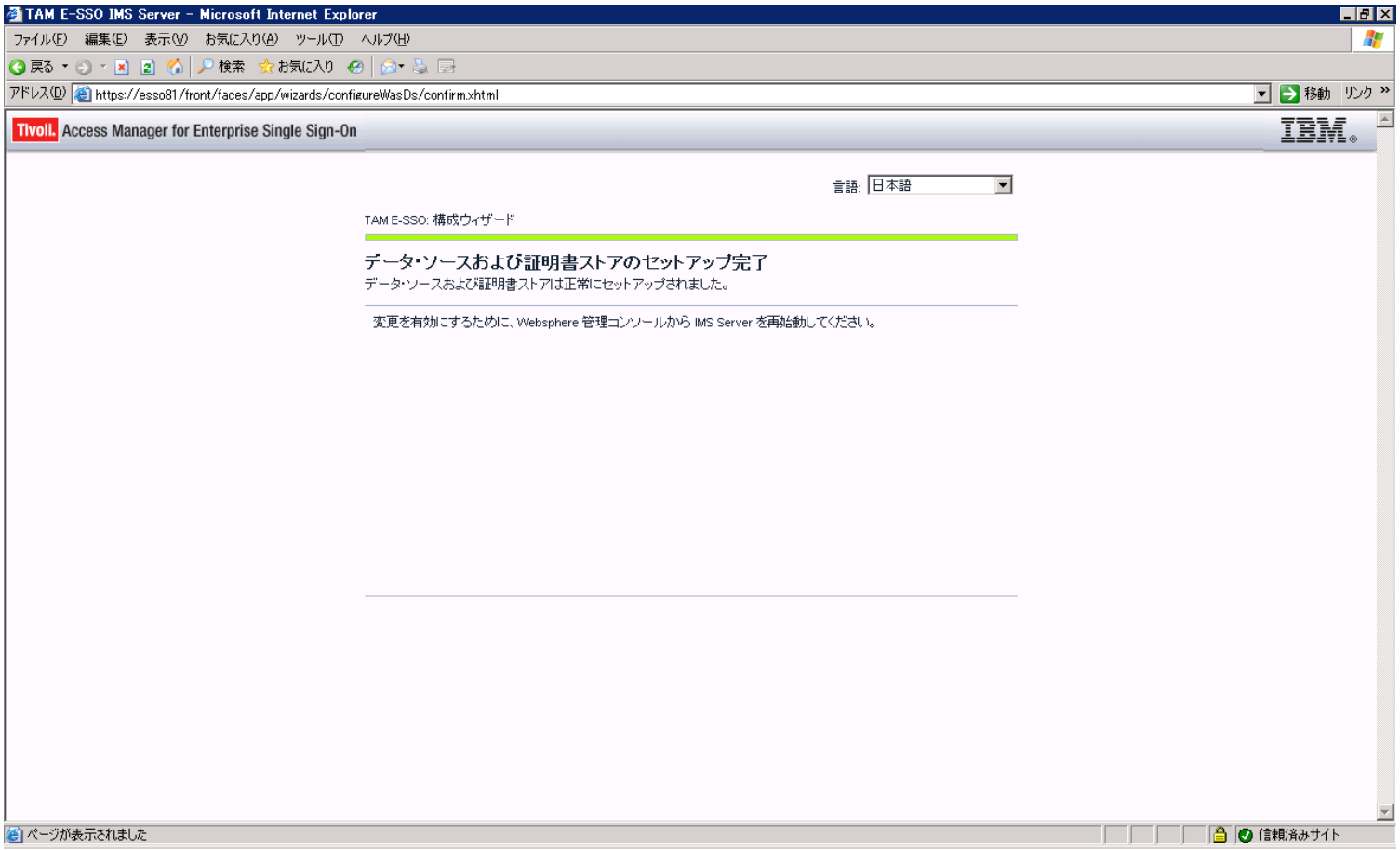
- 以下の画面でIMS ServerのURLを指定し、「次へ」進みます。



- 以下の画面が表示されます。「保存」をクリックします。

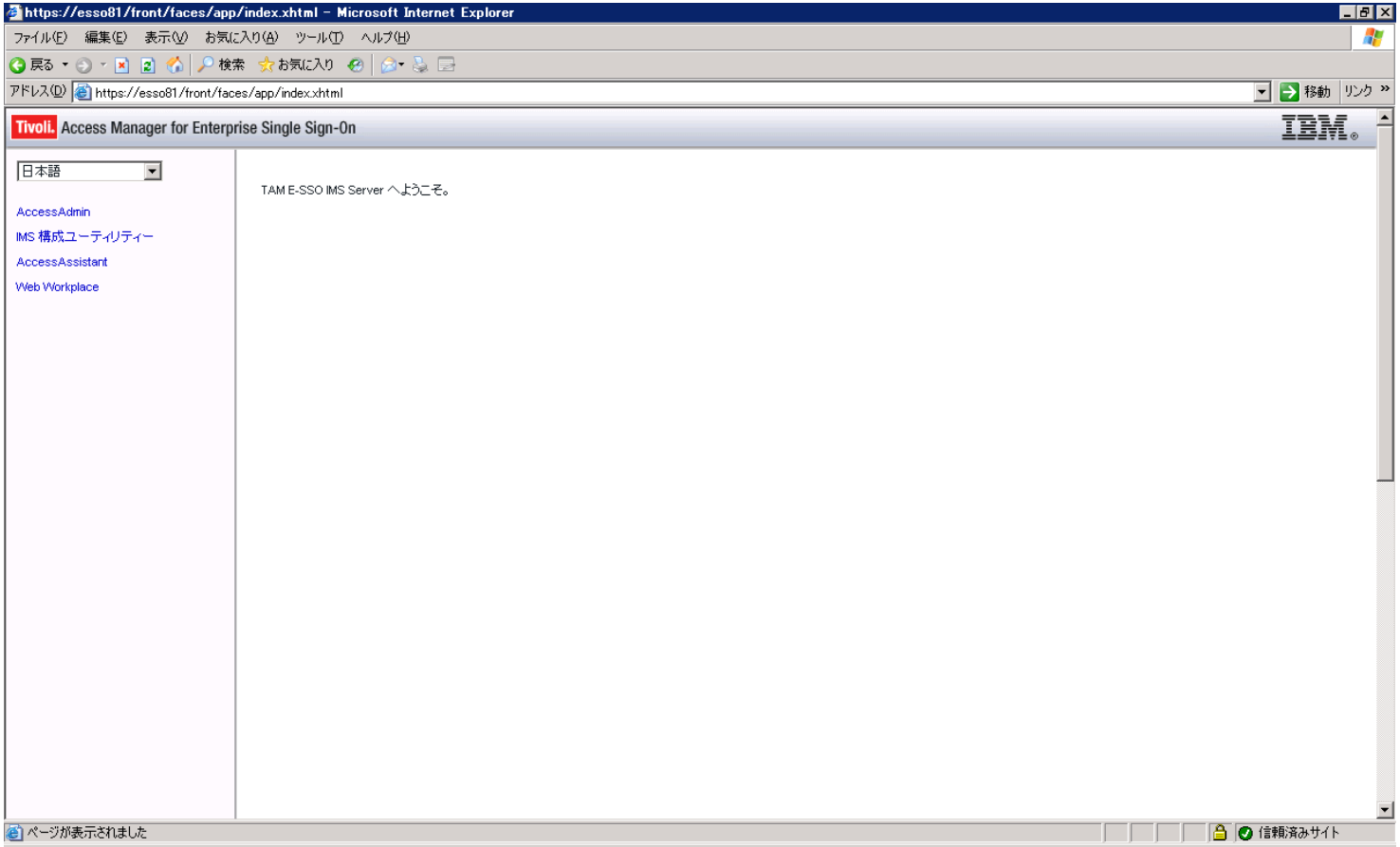


- 以下の画面で示された、IMS Serverを再起動します。



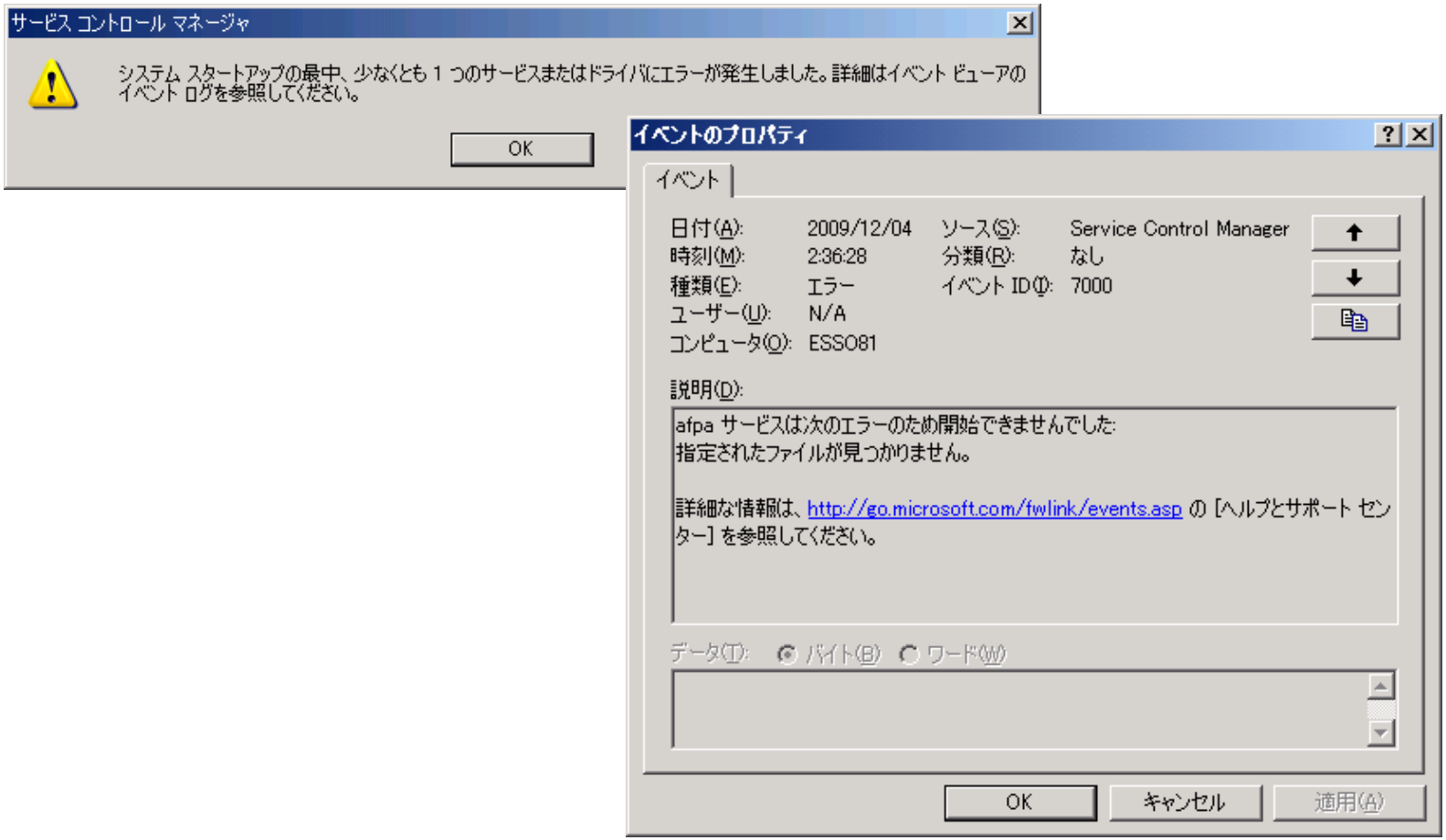
構成ユーティリティへの初回ログイン

- wasadmin（WebSphere管理ユーザでログイン）します。



OS起動時エラー対策

- IHS 7.0導入後出力されるドライバエラー解消方法は以下となります。



- 「スタート」ー「プログラム」ー「アクセサリ」ー「コマンドプロンプト」のメニューからコマンドウィンドウを起動します。

  以下の手順に従いドライバ定義を削除し、Windowsを再起動します。

```
C:¥>cd C:¥IBM¥HTTPServer¥bin

C:¥IBM¥HTTPServer¥bin¥>AfpaCmd.exe -u

C:¥IBM¥HTTPServer¥bin¥>
```